



万能でない神様

まつだつま

もな
おな
じで
世界と
おの
世界！
神様の
人間界
の世
村度の

神様に
お願いすると
本当に願いは
叶う？

目次

プロローグ	1
21	2
20	15
19	26
18	32
17	39
16	43
15	48
14	55
13	60
12	64
11	70
10	75
9	79
8	83
7	89
6	90
5	92
4	94
3	95
2	97
1	100
エピローグ	102

プロローグ

「約束が違うじゃないですか」

わしは持っていた資料を机に叩きつけて、前に座るそいつを睨みつけた。

「約束？ そんなもんした覚えはないな」

そいつは、椅子にふんぞり返り耳に指を突っ込みながら、わしに目を合わせようともせず、宙に視線を向けたまま言った。言い終わると「フン」と鼻を鳴らして口元を歪めて嫌な笑みを浮かべた。

その態度を見て、わしの怒りは沸騰したが、両拳を握りしめグッと堪えた。こいつとわしとでは身分がちがい過ぎる。ここでこいつに怒りをぶつけても、なんの解決にもならないし、こいつを怒らせて損するのはこっちだ。きっとこいつは怒ると開き直って、これまでの全てを滅茶苦茶にするだろう。

「人間の幸福度を上げるためにお互いに力を合わせて頑張ろうと、あの時、約束したじゃないですか。あの時の気持ちを思い出して下さい。お願いします」

怒りと悔しさを堪えて、わしはそいつに頭を下げた。しかし、そいつは忌々しく椅子にふんぞり返ったままだ。

「ああ、そういえば、昔、そんなこと言ったかもしれんなー」

そいつはふんぞり返っていた体を起こした。

「思い出してくれましたか」

わしは無理矢理笑みをつくった。

「言ったかもしれんが、それは大昔のことだ。もう気は変わっている。今はそんな気はさらさらしない。お前との話は終わりだ。さっさと帰れ」

そいつはそう言って、わしを追い払うように手を振った。

「あなたが約束したから、わしはあなたといっしょに頑張ろうと、ここに戻ってきたんですよ。これから人間の幸福度もっと上げようと約束したじゃないですか」

「ふん、いい歳して、なにが人間の幸福度だ。お前、いつまでそんな青臭いこと言うてるつもりだ」

「青臭い、ですか。わしたち神様は人間の幸福度を上げるために存在しているんじゃないんですか。それが、わしたち神様の使命じゃないんですか。青臭いことではありません」

そいつの座る机に両手をついて訴えた。次第に怒りが抑えきれなくなってきているのがわかった。

「それが、青臭いんだよ。人間は放っておいても、自分達で勝手に幸福度を上げるんだ。我々が力を貸す必要なんてないんだよ」

「それなら、人間たちが自ら上げた幸福度は人間たちのものでしょ。それをわしら神様がそれを勝手に吸い上げるのはおかしい話です」

机に両手をついたまま、ぐいっとそいつに顔を近づけた。

「そうは言ってもな、我々神様は人間の幸福度を吸い上げないと生きていけない。神様は人間の幸福度を吸い上げて、それをエネルギーにして生きているわけだからな。それくらいのことはお前もわかってるだろ」

そいつはわしに目を合わせようとせずに面倒くさそうに言った。

「だから、わしらが人間の幸福度を上げるんじゃないんですか。人間の幸福度を上げたその恩恵として、わしら神様は上がった幸福度の一部を人間から分けてもらうのが筋でしょ。人間たちの幸福度を上げもしないで、吸い上げるだけ吸い上げるのは絶対に間違っています」

「お前の言ってることは建前で、ただの理想論だ。そんなことやってたら、この神様協会はずぶれてしまうんだ」

「あなたがそういう考えなら、わしはこれ以上、あなたに協力は出来ません。すぐに神様協会から脱会します」

「まっ、仕方ない。勝手にしろ。こっちは、お前の助けがなくてもやっていける。わしを敵にまわして困るのはお前の方だからな。ハハハ」

21

僕は、地元の人しか訪れないような、小さな野々神社という所で研修を受けている神様だ。

正確に言うと、研修の身なので、まだ神様ではないのだけれど、一応、みんなからは見習い中の神様ということで、『習の神』と呼ばれている。早く本当の神様になれるよう、この神社で頑張っているいろいろと学ばなければならない。

研修期間は三十年の予定だ。研修が終わってから、神様協会のテストが受けられる。それに合格すると、晴れて神様協会所属の本当の神様になれる。

研修期間が三十年と聞くと、人間たちはビックリすると思う。三十年も研修して、一人前になったらすぐに定年じゃないかと思うかもしれない。

でも、神様の世界の三十年は、人間界の三年位のものなので、ビックリするほど長いわけではない。いや、けど、研修を受ける身からすると、やっぱり長い。

研修生は、先輩の誰よりも早く神社に姿を見せなければならないし、帰るのは、先輩たちが帰ってから、後片付けをして一番最後に神社を後にしなければならない。これが三十年も続くと思うと、さすがに長くてうんざりする時もある。

神様には人間のように定年がないので、自分からやめると言わない限りずっと続けることができる。

いや、違った。ずっと続けられない場合もあるのだ。それは神様協会から追放される神様もいるみたいなので、そうなると神様協会所属の神様を続けたくても、続けられなくなる。神様協会の会長に背いて追放された神様もたくさんいると聞いたことがある。せっかく三十年間の長い研修を受けて神様協会所属の神様になれたのに、会長に背いて追放されるなんてもったいない話だ。僕は絶対にそんなバカな真似はしない。

そろそろ先輩たちが、境内に姿を見せるころなので、僕といっしょにここの野々神社で働く先輩たち三人を紹介しておこう。

まず、この野々神社の責任者が野々神という神様だ。すごく優しい神様だけど、人間界と同じように神様協会本部と現場との板挟みになっている典型的な中間管理職タイプだ。だから、野々神はいつも胃薬を持ち歩いているらしい。

神様協会の会長の機嫌を窺いながら、部下の神様に気を配り、神社をきりもりするのは、見てて大変な仕事なんだと思う。僕は早く一人前の神様になって、少しでも野々神の役に立てるようになりたいなと思っている。

次に北地区を担当するのが北の神だ。神様協会に入ってちょうど百年になるそうだ。さっきも話したけど、百年と言っても神様の世界と人間界では時間の感覚が違う。神様の世界の百年は、人間界の十年くらいのもものだから、北の神は、まだまだ若手の神様になる。

北の神は若手の神様だが、真面目で成績優秀、人間の幸福度を上げる能力に長けていて、そのための努力も惜しまない。曲がったことが嫌いみたいで、神様協会のやり方に対して、たまに不満をぶつけることもあるようだ。神様協会のやり方に何が不満なのか、僕にはそのあたりのことは、まだよくわからない。

北の神は、僕にすごく優しく接してくれ、いろいろと的確なアドバイスをしてくれる。僕にとっては、頼りになる先輩だ。

最後に、南地区を担当するのが南の神だ。南の神はベテランの神様で、上司の野々神より神様としての経験年数は長いらしい。しかし人間の幸福度を上げることに冷めてしまっているようで、熱心に働こうとはしない。

南の神は、人間の幸福度を上げたところで、自分達には何の見返りもないのだと、毎日のように愚痴をこぼしている。全くやる気を感じない。

南の神は野々神の部下だけど、南の神の方が先輩なので、野々神は何かとやりにくそうにしている。僕は、わがままでやる気のない南の神のことが好きにはなれない。

「北の神、今から習の神の神様認定テストの申し込みに協会本部に行ってくるから、留守を頼むな」

野々神が一番頼りにしている北の神に声をかけた。

「はい。野々神、お気をつけて。今日のお帰りは？」

「そうだな、今日は直帰にするわ。後は頼むな」

「わかりました」

「習の神、これ持って行くからな」

野々神が僕に向けて、神様認定テストの推薦状と申込み用紙をヒラヒラと揺らして見せた。

「野々神、ありがとうございます。お手数おかけしますが、よろしくお願いします」

僕は背筋をピンと伸ばし、野々神に向けて深々と頭を下げた。

「そのかわり、これからしっかり勉強して認定テストは一発合格してくれよな」

野々神は僕の肩をポンポンと叩いて笑みをくれた。野々神のためにも、これから頑張らなければならない。

「はい、自分は、絶対に合格してみせます」

白い息とともに声を張り上げて返事をした。

「今日も参拝者は少ないな。眠くなってきたわ」

野々神が出ていった後、ずっと床に横たわっていた南の神がむっくりと起き上がりあぐらをかいて境内を見渡していた。

南の神は伸びをして大きなあくびをし、また床に大の字に寝転がった。本殿の床の冷たさが気持ちいいのか、床に貼り付いたように仰向けに体を預け、そのまま目を閉じていた。

僕はその姿を見てイライラした。こんな奴が神様の認定テストに合格しているのかと思うと腹が立つ。こんなやる気のない奴は神様協会から追放されればいいんだ。

「今日は天気が悪いですからね。暇すぎて体がなまってしまいそうです。南の神も体を動かしておいた方がいいですよ」

北の神は今にも降りだしそうな鈍色の空を見上げてから、立ち上がって腕を前に伸ばしたり、アキレス腱を伸ばしたりとストレッチを始めた。

北の神は朝一番に必ずストレッチをする。最近は僕も北の神に倣ってストレッチするようにしている。それをすることで、気持ちが引き締まり、今日一日頑張ろうという気持ちになれる。

南の神からは北の神の言葉に対する返事は聞こえてこない。その代わりに大きなイビキが聞こえてきた。

北の神は床にへばりつきイビキする南の神に、視線を落として苦笑いを浮かべていた。

南の神は、大きな口を開けて床によだれを垂らしている。

僕は腹が立って、叩き起こしてやるつもりで、南の神に近づこうとすると、北の神がポンポンと僕の肩を叩いて、「放っておこう」と言った。

「は、はい」

僕は、グッと堪えて北の神に聞こえぬように舌打ちをした。

「ところで習の神のテストはいつになりそうなんだ？」

北の神が僕に訊いてきた。

「野々神が今日、認定テストの申込み用紙を協会に提出してくれますから、うまくいけば

三十年後だと聞いています」

「三十年後か。じゃあ、気合い入れないといけないな。習の神が担当する研修地区の数字が今のままだと合格は厳しいぞ」

「やっぱりそうですよね。野々神から認定テストに合格するには、自分が担当する研修地区の幸福度を六十以上にしないとダメと言われてますが、まだ五十を行ったり来たりしてますから」

「そうだな、神様協会のテストに合格するには、まず研修中に担当した地区の人間界の幸福度が六十は必須だ。そこをクリアしないと実技テストとペーパーテストを受ける前にアウトになるかもしれない」

「そうですよね」僕は不安になった。

「まっ、でもこれからだ。まだまだ数字は上げられるよ。だから今日も気合い入れて頑張りますか」

北の神がポンポンと僕の肩を叩いて勇気づけてくれた。北の神のこういうところが好きだ。

「はい、これからもっと気合い入れて頑張ります」

「わからないことがあったり困ったことがあったら、遠慮なく何でも訊いてくれ。俺にできることはなんでも協力するよ」

北の神が優しく笑みをくれた。先輩の鏡のような神様だなと思った。

「ありがとうございます。頼りになるのは北の神だけです」

僕はそう言って、大の字になって居眠りする南の神に視線を落とした。北の神も続けて南の神に視線を落とした。

「本当は、大ベテランなんだから南の神が習の神にいろいろと教えてくれればいいんだけどね」

北の神が両手を上げてお手上げのポーズをとって見せた。

「僕は南の神からは、何も教わりたくありません。どうせサボる方法とかばかり教えてくれるだけで、タメになりそうもないですから」

「そうかな。でも、南の神は本当は実力のある優秀な神様だと思うんだけどな」

「こんなやる気のない神様が実力ある優秀な神様だとは思えません。こんなやる気のない神様から教わると思うだけで反吐がでます」

僕は南の神を睨みつけた。寝そべっている体を蹴っ飛ばしたい気分だった。

「わかったわかった。それなら仕方ないな。とりあえず、できるだけ早く研修地区の幸福度を六十まで上げることを俺と一緒に考えようか」

「はい、北の神。よろしくお願いします」

「そろそろ、参拝者が姿を見せはじめたね。さあ、今日も一日頑張りますか」

北の神が両手をグッと前に突きだした。

「はい、今日も頑張ります」

僕は両拳を握って気合いを入れた。

「南の神、起きてください。参拝者が来ましたよ、そろそろ仕事は始めましょうか」

北の神がそう言うと、南の神はむっくりと体を起こし、首を左右に折ってから、両手を高く上げ伸びをし、大きなあくびをした。立ち上がる気もなさそうで、そのまま、あ

ぐらをかいていた。

僕は南の神を睨みつけた。こいつはこの先、自分の足を引っ張るんじゃないかと不安に思った。

今日最初の参拝者は、老若男女数人のグループだった。神社の鳥居をくぐり本殿へと向かってゾロゾロと歩いてくるそのグループはキラキラと輝いているように見えた。

若い男女二人が仲睦まじそうに先頭を並んで歩いている。その後ろに年配の男女が続いて歩いていて、またその後ろにも年配の男女が歩いている。

先頭を歩く若い女性の胸の中で玉のようなフワフワした赤ん坊が気持ち良さそうに眠っている。

この赤ん坊が今日の主役のようなのだ。若い男女がこの赤ん坊の父親と母親で、その後ろを歩く年配の男女たちは赤ん坊の祖父母たちのようだ。

赤ん坊を抱っこする若い女性は赤ん坊の顔を覗きこみ、口元を綻ばせていた。すごく幸せそうな表情だ。

若い女性の父親らしき年配の男性が、若い女性の前に回り込み眠っている赤ん坊のトマトのような赤いほっぺを指で押さえた。年配の男性が押さえたところだけ赤いほっぺが白くなった。男性が指を離すとすぐにほっぺはトマト色に戻った。それだけで若い女性の父親らしき年配の男性の口元が綻んだ。

「そんなことしたら起きちゃうでしょ」

若い女性の母親らしき年配の女性が年配の男性に注意するが、年配の女性の目元は弓のように下がっていた。

「大丈夫だよ。ほら、よく眠ってる」

また赤ん坊の頬を指で押さえた。

「あら、ほんと。気持ちよさそうね。タエコの胸の中が落ち着くのね」

年配の女性もそう言って赤ん坊の頬をツンとついた。若い女性、赤ん坊の母親の名はタエコというようだ。

「タエコの赤ちゃんの頃にそっくりだよな」

年配の男性が赤ん坊の顔を覗きこんで言った。

「ええ、よく似てるわ。タエコの赤ちゃんの頃を思い出すわ」

年配の女性の目はふんわりとしていた。

「タエコ、抱っこするの、代わろうか」

若い男性がタエコに声をかけた。赤ん坊の父親、タエコの夫のようだ。

「シンちゃん、ありがとう。じゃあ、お願いするわ」

赤ん坊の父親はシンちゃんというようだ。タエコは、シンちゃんの方に体を向け、赤ん坊をシンちゃんの胸の辺りに持っていった。シンちゃんは、赤ん坊を抱えようと両手を出した。

「そおーっとね、起こさないようにね」

一番後ろを歩いていたシンちゃんの母親らしい年配の女性が前まで来て心配そうできて、そして愛おしそうな目で赤ん坊を見つめた。

「母さん、横からうるさいよ」

シンちゃんが面倒くさそうに言った。しかし、シンちゃんの顔は笑顔だった。

タエコの胸からシンちゃんの胸に赤ん坊が移動した。赤ん坊はシンちゃんの胸の中で、頭が少し低くなり、不安定な体勢になってしまった。

シンちゃんのぎこちない抱きかたのせいか、赤ん坊がパッと黒目の大きな目を開いた。その瞬間、赤ん坊の泣き声が境内に響き渡った。

「ほらー、起こしちゃったじゃない」

シンちゃんの母親がシンちゃんの肩を叩く。

「ごめんね、あなたのお父さんは、まだ抱っこするのに慣れてないからね」

シンちゃんの母親がシンちゃんの肩に手を置いたまま、泣いている赤ん坊の顔を覗きこんだ。それでも、シンちゃんの母親の顔は笑っていた。

シンちゃんの父親も前に来て泣いている赤ん坊の顔を覗きこんだ。

「おーい、おじいちゃんだよー。いないいない、ばあー」

シンちゃんの父親がおどけて見せた。

「あなた、そんなことしたらビックリして、もっと泣いちゃうわよ」

シンちゃんの母親がそう言ったが、すぐに赤ん坊の泣き声は止んで、笑い声が聞こえてきた。

「ほらー、笑った」

シンちゃんの父親は自慢気に言った。その父親も満面の笑みだった。

赤ん坊が眠っていても、泣いていても、笑っていても、他の六名の大人たちは幸せそうだった。幸福度がドンドンと上昇していくのがわかった。

「この家族の幸福度はドンドン上がってますよね」

僕は北の神に向かって言った。

「そうだね。こういうのはありがたいね」

「あの若い夫婦は北の神の担当地区ですよ。北の神の地区は、いつも幸福度がめちゃくちゃ高いから羨ましいですよ」

北の神の担当する北地区はいつも幸福度が高い。北の神は本当に人間の幸福度を上げるのが上手だ。僕も早くそうならなければいけないと思った。

神社にはふんわりした空気が流れていた。僕の心もふんわりとしていた。

「今日は出だしがいいですね。こっちまで幸せな気分になりましたよ」

僕は清々しい気分になりそう言った。

「やっぱり赤ん坊の力は凄いね」

僕は北の神と並んで鳥居をくぐる幸せな家族の後ろ姿を目を細めて見ていた。

その幸せな家族とすれ違うように鳥居の前に中学生らしい制服を着た少年が立っているのが見えた。

少年は鳥居の前で一礼してから鳥居をくぐり、参道の端を歩いてきた。手水舎まで行き、手水をとって拝殿へと向かってきた。ガチガチに緊張した動作だ。ヘルメットをかぶったような髪型で濃い眉毛に黒縁眼鏡をかけている。いかにも勉強のできる真面目な学生といった感じだ。受験の合格祈願にでも来たのだろうか。

少年は、拝殿の前に立ち、小銭入れから十円玉を取り出して左手で握りしめた。鈴をやさしく鳴らしてから、握りしめていた十円玉を賽銭箱に放りこんだ。

トントン、カタンと十円玉が落ちる音がした。少年はそれを確認するようにお賽銭箱

に視線を落としていた。ぎこちない動作で二礼二拍し、手を合わせた。

「受験前の大切な時なのに、チエちゃんのことばかり考えてしまいます。どうしたらいいんでしょうか。助けてください」

少年の祈りの声が聞こえた。

「恋の悩みかー。若いねー。羨ましい悩みだよ。恋愛も受験も両方頑張ればいい」

「真面目な少年ですね」

「何事にも一生懸命な君はきっと大丈夫だよ」

北の神が手を合わせる少年を見ながら声をかけた。

「今の少年は南の神の担当ですよ、少しは気にならないんですかね」

僕はやる気の無さそうな南の神に冷たい視線を向けた。

「あんまりカリカリするな。今は自分のことだけに集中した方がいい」

北の神が僕の怒った肩に手をおいてなだめてくれた。けど、僕の気持ちはおさまりそうにない。やる気のない神様はさっさとやめてほしい。

「けど、あの態度は、神様としてどうなんですかね」

南の神は、僕の視線を無視して、興味無さそうにあぐらをかいたまま、耳の穴をほじっていた。

「くそーっ」

僕は境内の床を蹴った。

少年が出て行って、次に神社に姿を見せたのは、三十歳くらいの男性と幼い女の子だった。

男性は女の子の手を引いて体を折るように下を向いて唇を噛みしめていた。表情が沈んでいるように見えた。

女の子は黒目の大きな瞳をしていて、大きくなったらきっと綺麗な女性になると思うのだが、今の表情は男性と同じく沈んで見えた。

二人はゆっくりと拝殿のところまでやって来た。

「さあ、ミチカ、神様にママのことをお願いしようか」

男性が女の子の前に屈んで女の子の視線に合わせて声をかけた。

「かみさまが、ママのびょうきをなおしてくれるの？」

「そうだよ、ミチカがお願いしたら、きっと神様がママの病気を治してくれるよ。神様は、いい子の見方だからね」

男性がそう言って女の子の頭を撫でた。

「じゃあ、ミチカが、かみさまにおねがいする。ママにはやくげんきになってほしいから」

「そうだね。じゃあお父さんといっしょに神様にお願いしようか」

「うん」

男性が女の子の手を持って一緒に鈴を鳴らした。鈴がカランカランと小さな音をたてた。

「よし、いい子だ。次はこれだよ」

男性がそう言って女の子の頭を撫でてから、女の子のもみじのような右手に百円玉を置いた。女の子はその百円玉をきゅっと握りしめた。

「これをかみさまにあげればいいんだよ」

女の子は小さな笑みを浮かべた。

「そうだ、よくわかったね。ミチカ一人で神様にあげられるかな？」

「うん、ひとりであげられる」

「じゃあ、これはミチカにお願いするね」

男性は女の子が百円玉を握る右手を優しく両手で包んだ。

「うん、まかせて」

「じゃあ、神様にあげてくれるかな」

男性は、そう言って、お賽銭箱の前で女の子を抱えあげた。

女の子は握りしめていた百円玉をもみじのような手からヒョイっと賽銭箱に投げ入れた。

百円玉は賽銭箱の上でトントントンと跳ねてからコロコロと賽銭箱に吸い込まれて、最後にコトンと音をたてた。

男性がそれを確認してから女の子を地面に下ろした。

「よーし、いい子だ。これで神様はミチカのお願いをきいてくれるよ。あとはお父さんといっしょに神様に手を合わせてママが元気になりますようにってお願いしようか」

男性が女の子の頭を撫でながら口角を上げた。

「うん、これで、かみさまがママをげんきにしてくれるよね」

「そうだよ。こうして手を合わせて、心の中で神様に『いつも見守ってくれてありがとうございます』って言ってからママのことをお願いしたら、きっとママの病気は治るよ」

男性と女の子が並んで拝殿に向かって手を合わせた。

「神様、妻の恭子と出会わせてくれ、そしてミチカを授けてくれて本当にありがとうございます。今、恭子は乳癌で苦しんでいます。何とか手術がうまくいって命が助かりますようにお願いします。これからミチカの成長を恭子といっしょに見守れるようにお願いします」

男性の願いの声が聞こえた。

「かみさま、いつもみてくれてありがとうございます。ママがげんきになって、またいっしょにおかいものにいきますように」

続いて幼い女の子の願いの声が聞こえた。

二人は長い時間、手を合わせ目を閉じていた。男性の呼吸する音と女の子の呼吸する音がシーソーのように交互に響いていた。

「あの親子は習の神の担当地区だな」

北の神が少し沈んだ声で僕に声をかけた。

「そうです。自分の力で何とか助けてあげたいです」

僕は手を合わせている女の子に熱い視線を送った。

「まあ、難しいね」

背中の方からしゃがれた声があった。その声の方に振り向くと、南の神がボサボサの頭をボリボリと搔いていた。

「おたくも神様なら少しは人間を幸せにすることを真剣に考えたらどうなんだよ」

僕は南の神に向けて声を荒げた。

「わしは、ちゃんと考えてるよ」

「ちゃーんと考えてるだって？　いつも、なーんにもしてないじゃないか」

南の神の胸ぐらをつかみたい気分だった。胸ぐらを掴んで殴り飛ばしたい。

「じゃあ、あんたは真剣に考えてるのか？」

「当たり前だ。僕たちは神様なんだ。神様が人間の幸福度を上げることを真剣に考えなくてどうするんだよ」

「じゃあ、真剣に考えてるあんたは、あの親子をどうしてやるつもりなんだ。お母さんを助けてやれるのか」

「そ、それは……」

「どうせ、考えてるだけで、結局なーんにも出来ないんだろ」

南の神がいじわるっぽく右の口角だけを上げて笑った。

「自分が、あの子のお母さんの病気を神の力で治してみせるよ」

「ほおー、すごく威勢がいいな。けど、残念だがあんたの力じゃ無理だな。全く力不足だ」

「うるせえ、やってやるよ。自分があの親子を幸せにしてみせる」

「まあ、せいぜい頑張ってみな」

南の神はそう言って、立ち上がり奥へと消えていった。僕は南の神の背中を睨みつけた。体が熱くなり勝手に震えだした。

「あいつ、ほんとムカつきますよね」

北の神に同意をもとめた。

「確かに、もう少し後輩のことを考えてくれればいいんだけどな」

北の神が唇を噛みしめながら、僕の顔を見た。

「本当、なに考えてるんですかね」

僕は思いっきり、フンと鼻から息を吐いた。

「ただ、残念ながら、あの子の母親の病気を治すのは、俺たちの力だけでは難しいのは事実だろうな」

「えっ、僕はともかく、北の神の力でも難しいんですか」

「そうだな。俺だけの力では難しい。俺と習の神と南の神の力を合わせたら出来ないこともないかな」

「じゃあ、みんなの力で助けてあげましょうよ。あの女の子がお願いしてるんですから何とかしてあげましょうよ」

「それが、難しいんだよ」

「なぜ、難しいんですか。南の神が協力してくれないからですか。それなら、この際、僕が南の神に頭を下げてお願いしますよ」

「南の神が協力してくれるかどうかって問題じゃないんだ。それをすると、協会から分配してもらっている、この神社の神の力を全て使い切ることになるからなんだ」

「それでも、やってあげましょうよ。あの子の願いを叶えてあげましょうよ。お母さんと買い物に行くことくらい叶えてあげたいですよ」

僕は北の神の二の腕を握りしめ、必死でお願いした。

「習の神、お前の気持ちはすごくわかる。俺も、昔そう思った時期があった。でも、もし、明日、同じような悩みを持った別の親子が現れたら、君はどうするつもりだ？」

「えっ」

「人間界には、さっきの親子のような悩みで苦しんで人間は、他にもたくさんいる。だから一人のために、俺たちの神の力を全て使い切ってしまったら、他の人間に対して、何もしてあげられなくなってしまう。だから、俺たちは、出来るだけ多くの人間に満遍なく、少しずつ神の力を使って幸福度を上げてあげることしか出来ないんだ。急に重い病気が治ったみたいな奇跡を起こすことで、人間を幸せにすることは、俺たち神様には無理なんだ。俺たちの出来ることは、相性のいいお医者さんにめぐり会えるようにしてあげるとか、気持ちが前向きになるような人や物に出会わせるようにもっていくとか、出来るだけ運を良くしてあげることくらいしか出来ないんだ」

「神の力って、その程度のもんなんですか？　自分の目指している神様は万能だと思ってました。一生懸命生きている人間の願いは、全て叶えてあげられると、そう思っていました。それは違うんですか」

「残念だけど、俺たちの持つ神の力は小さすぎる」

北の神はそう言って言葉を詰まらせ唇を噛みしめていた。

「神の力を、もっと増やす方法はないんですか」

「今、俺たちにできることは、人間の幸福度を上げて、その上げた分の幸福度の一部を人間から分けてもらって、それを神の力に変えるくらいしか方法はないんだ」

「でも、人間の幸福度をすごく上げている北の神でも神の力は少ないわけですよ」

「そう。俺は今の協会の体質に問題があると思ってる」

「協会の体質ですか？」

僕は全く意味がわからなかった。

「今の協会のシステムは、神様が人間を幸福にすると、その人間の上がった幸福度のうちの五十パーセントを協会が人間から吸い上げているんだ。だから人間を幸せにしても協会が五十パーセント吸い上げているので、人間が感じている幸福度は本来の半分くらいしかないんだ」

「そんなに吸い上げてるんですか。半分も吸い上げるなんて、びっくりしました」

「俺も吸い上げすぎだと思う。けど、ここからがもっと問題なんだ」

「まだ、何かあるんですか」

「人間から吸い上げた幸福度は、本来は神の力として人間の幸福度を上げるために使わなければいけないんだ。全て人間に還元しないといけないと俺は思ってる」

「そうじゃないってことですか？」

「今の協会は、人間から五十パーセント吸い上げた幸福度を、協会本部がいくらか抜いている。それがどれくらいなのかはわからないが、噂では吸い上げたうちの九十パーセント以上は抜かれているらしい。もしそれが事実なら、現場の神様に神の力として分配されるのは雀の涙ほどしかないんだ。俺たちは、そういうわけで、神様と言っても、大きな神の力を持っていないんだ。特別に協会に稟議を出せば別途、神の力を追加してくれることもあるみたいだけど、あの親子の場合だと協会も特別扱いはしてくれないと思う」

「協会本部の取り分って本当に九十パーセント以上もあるんですか」

「そこは、噂だけで、俺たちにはわからない。どっちにしても、最初に人間から五十パーセントは取りすぎだと思うし、俺たちへの神の力の分配も少なすぎる。だから、俺たちはなんにも出来ない。人間から吸い上げる幸福度を五十パーセントから減らして人間に

もう少し幸福度を残してやれば、人間は自分たちの力で、もっと幸せになれるし、俺たち現場の神様にもっと神の力を分配してくれたら、少しは今よりよくなると思う」

「なんとかならないですかね。僕はもっと人間を幸せにしたいです。僕が神様になろうと決めたのは、奇跡みたいなことを起こして人間を幸せにする神様がいるって聞いたからなんですけど、現実には、そんな神様は存在しないんですね」

「うーん、いるにはいるみたいだけど……」

「いるんですか？」

「俺も会ったことはないけど、協会に属さないフリーの神様のなかにカリスマのような神様もいて、その神様なら、もっと人間を幸せにする力を持ってると聞くけどね」

「フリーの神様ですか？」

「神様協会に属さない神様だ。フリーだと、協会に幸福度を吸い上げられないから、人間の幸福度を上げた分すべてを自分の好きなように使える。人間に幸福度を残してあげるのも神の力に変えるのもすべて自分で決められるんだ」

「フリーの神様になるには、どうすればいいんですか。それなら自分は協会に入るよりフリーの神様の方がいいです」

「すごい意気込みだね。神様協会に所属しなければ、一応フリーの神様ってことになるけどね。ある意味、習の神は今もフリーの神様だよ」

「じゃあ、このままテストを受けなくて協会に所属しなければいいんですか」

「まあ、そうだけど、ただ、それで神様としてやっていくのは大変なことなんだ。ほとんどのフリーの神様はうまくいかないで挫折してしまっているみたいだ。成功してるのは百人に一人、いや千人に一人だと聞いているよ。君の場合、悪いけど、まだ神様としての経験もほとんど無いわけだから、フリーでやっても百パーセント失敗すると思うよ」

「フリーで挫折した神様たちは、どうなっていくんですか」

「協会に頭を下げて協会に入れてもらう神様もいるにはいるみたいだけど、それもコネがないとなかなか難しいみたい。協会に背いた神様に協会は甘い顔をみせないからね。だから、ほとんどは、浮浪の神になるか、疫病神に転身しているらしいよ」

「えっ、疫病神ですか？」

僕はびっくりした。

「そう。疫病神」

北の神は口を尖らせていた。

「でも、なぜ、人間を不幸にする疫病神なんかになっちゃうんですか。人間の幸福度を上げるために頑張ってきた神様が、全く正反対のことを始めるわけですよ。そんなの、僕には信じられません」

「結局、神様として生きていく為だろうね」

「生きていく為ですか？」

「フリーだと、自分の力で全てやらなければならないんだ。俺たちみたいに神様協会に所属していると、自分の力で人間の幸福度を上げられなくても、人間が勝手に神社にお参りにきて、幸せになったことを神様に感謝してくれるんだ。よく神社に参拝して、手を合わせながら俺たちにお礼を言ってくれるだろ」

「『受験に合格しました。ありがとうございます』『無事に孫が生まれました。ありがと

うございます』『ここまで長生きさせていただきありがとうございます』なんていう、あれですよ」

「そうそう。さっきのお宮参りの家族なんかもそうだ。『赤ん坊を授けてくれて、ありがとうございます』と言って俺たち神様にすごく感謝してくれてるだろ。けど、そういうのは、実は俺たち神様の力なんかじゃないんだよ。人間が自分たちの力で幸せをつかんでいるのに、勝手に神様のおかげだと思ってるわけ。その勝手に上がった幸福度からも神様協会は、その人間から幸福度を五十パーセント吸い上げてるから、神様協会に所属している神様は、少ないとはいえ何もしなくても安定して幸福度を分配してもらえりわけなんだ。フリーの神様になると、それが無くなるから、人間の幸福度を上げることが出来ないと生活できなくなるんだ」

「厳しいのはわかりますけど、でも疫病神になることはないと思うんですけどね。人間を不幸にするなんて、信じられませんか」

北の神は、僕の顔を見て何度も頷いていた。北の神も同じ気持ちのようだ。
「今、フリーでやっている神様のほとんどは協会から追放された神様なんだ。追放された理由は成績が芳しくないとか、協会に背いたとか、それぞれだろうけど、ほとんどが急に追放させられているはずなんだ。フリーとして独立する準備も何も無しに追放されてしまうんだ。独立するつもりで必死で勉強して準備していても、フリーで成功するのは難しいはずなのに、準備も無しに成功するなんて、本当に大変なことなんだ。だから簡単に生きていける疫病神になってしまうんだと思うよ」

「疫病神は簡単なんですか」

「疫病神の方が普通の神様より簡単みたいだね」

「なぜですかね？」

「人間の幸福度を上げるより不幸度を上げる方が簡単だからだよ」

「不幸度を上げる方が簡単なんですか」

「そう。たとえば、電車の到着時間を五分遅らせたら、人間はどうなると思う？」

「人間は困ってしまうでしょうね」

「そう、困ってしまうんだ。そして、駅員に怒りをぶつける人間がいたり、イライラして、隣の人間とちょっと肩が触れただけで大声を上げたりする。そうして、不幸度は周りの人間にもどんどん伝染して、一気に広がり、そして上がってしまうんだ。街中でカーンと大きな物音をたてただけでも、人間の不幸度はピュッと跳ねあがるんだ。疫病神はそのね上がった不幸度を吸い上げてエネルギーにするわけだから、比較的簡単に独立して食べていけるようになるわけだ」

「人間を不幸にすることに、やりがいは感じませんか。協会は追放した神様の多くが疫病神になってしまっていることを知っているんですか」

「もちろん、知ってるよ」

「なのに、追放し続けてるなんて、わけがわかりませんか。疫病神が増えてしまったら、人間の幸福度が下がるじゃないですか。それは神様協会としても困るんじゃないですか」

「成績の悪い神様や神様協会に反抗的な神様を協会に籍をおいたままにして、神の力を分け与えるより追放した方が協会としてはいいみたいだね。疫病神が増えても意外と困らないみたいだし」

「疫病神が人間の不幸度を上げて神様協会は困らないんですか」

「疫病神が人間の不幸度を上げて幸福度が落ちてしまっても、人間は自分たちの力で幸福度を元に戻す力を持ってるんだ。だから協会は困らない。逆に落ちた方が上げやすい。いや、協会は勝手に人間が自分たちで上げてくれるとわかっているんだ」

「そうなんですか」

僕が思っていた神様とは何かが違う。

「そう。人間にはそういう力があるんだ。災難や苦難があって、一度幸福度を下げたとしても、自分たちの力で幸福度を上げてしまうんだ。ピンチになればなるほど、人間は力を発揮して、災難や苦難を乗り越えてしまう。その時の幸福度は災難や苦難の前より、グッと上がっているんだ。人間はほんとと凄いよ。苦しいことがあればあるほど、その後の幸福度を上げるんだ。みんなが仲間意識をもって助け合って乗り越えた時の人間が上げる幸福度は神様の力では到底及ばないくらいに上がってる。それは人間の力で上がった幸福度なのに、さっきも話したけど、人間が勝手に神様のおかげだと思って感謝して神社にお参りしてくれるんだ」

「神様より人間の方がすごいんだ」

「だから疫病神が増えても神様協会は気にしていないみたい。疫病神が不幸度を上げれば、人間は自分たちの力で元に戻すからね。反対に優秀な神様がフリーになって成功される方が困るみたいだから、そっちを嫌がってる」

「優秀な神様ですか？」

「そう、優秀な神様がフリーになると神様協会としては、これまで大幅に人間の幸福度を上げてくれていた神様が抜けるわけだから痛いわけ。それにフリーで成功されると、どんどん優秀な神様は後を追って出ていっちゃうから必死で引き留めようとするんだ」

「やっぱり、僕はフリーになって成功する神様に憧れますね。それを目標にしたいです」

「気持ちはわかるけど、まだ研修の身だろ。今日、野々神がせっかく推薦状を持ってテストの申し込みに行ってきているんだ。まずはテストに合格することだよ。それから協会でいろんな経験を積んで、フリーになる準備をすればいいんじゃないかな。今の気持ちがあれば、習の神はきっとフリーで成功できるよ」

北の神がそう言って口角を上げた。

「北の神は優秀で力もあるのに、フリーになる気はないんですか」

北の神は右手を振りながら、俺は優秀じゃないよと言ってから、「確かにフリーで成功することに憧れるけど、俺はこれまで協会にすごくお世話になってるから、まず協会に恩返しをしたいんだ。今の協会をもっと良くして、もっと人間の幸福度を上げられる、そんな協会にしていきたいんだ」

気配を感じ、僕が振り向くと南の神が知らない間に、そこに立っていた。僕と北の神の話の立ち聞きしていたようだ。

神様協会を批判するようなことも話していたので、チクられるのではないかと心配になった。バカにするような、冷めた目で、こっちを見ているのかと思い、睨んだが、意外にも、好々爺のような顔をして目を細めて口角を上げていた。

『緊急会議、協会所属の全神様は出席せよ』

人間の幸福度が下がり続けている緊急事態ということで、緊急会議が開かれるという通知がメールで届いたのは二日前のことだった。

神様協会に所属する全神様が出席となると、その間、神社は空っぽになり参拝に来る人間の願いを聞いてあげることが出来なくなる。

しかし、神様協会の会長の命令は絶対なので、野々神社の神様全員を緊急会議に出席させなければならない。

私は野々神社の責任者として神社を空っぽにしているものだろうかという気持ちもあったが、その気持ちを押し殺すしかなく、『はい、かしこまりました』とメールを返信した。

緊急会議のことを野々神社に所属する部下たちに伝えたと、予想通り三者三様の反応が返ってきた。

「はい、わかりました」

習の神は研修生らしくはつらつとした声で応えた。

「誰か一人は、神社に残るべきですよ。会議に全員参加する必要はないと思います」

北の神は、無然とした表情を浮かべて、そう言った。人間の幸福度のことを真剣に考える真面目な北の神らしい意見だ。私もそう思ってるよ、と心の中で呟いた。

「後ろの席で居眠りしとけば、いいだけだ。どうせ大した話じゃねえんだし」

南の神は境内に寝転んだまま言った。居眠りして注意だけはされないでくれよと願った。

私は三人のそれぞれの反応に深いため息が出た。

通知の最後には、神様協会に所属する神様たちに、現状の体たらくを理解させ、尻を叩き、そして協会長が決めた新たな対策を発表するための大切な会議だと書いてあった。

会議当日、会議が始まる五分前に大会議室を見渡した。野々神は三人とも出席しているのかが気になった。

北の神は文句を言いながらも習の神といっしょに一番前の席に陣どっていた。

北の神は眉間に皺を寄せ、睨むような視線で、誰もいない壇上をじっと見ていた。

習の神は筆記具をテーブルの上に置き、背筋をピンと伸ばし緊張した面持ちで座っていた。聞く姿勢はぼっちりだ。

最後に南の神を探した。どうせ後ろの方の席だろうと視線を走らせていると案の定一番後ろの席に座っていた。腕を組んで背もたれに背中を預け目を閉じていた。

私は、北の神も南の神も問題を起こさないでくれよと祈りながら、大会議室の両サイドに設けられた各神社の責任者の席に腰を下ろした。

最初に壇上に立ったのは、司会進行を務める部長だった。部長は簡単な挨拶を済ませた後、人間の幸福度の専門家として有名だという先生を紹介し、「先生、よろしくお願いいたします」と言ってマイクを専門家に渡した。

白髪で白衣を纏った鶏ガラのような男は「皆さん、こんにちは」とガラガラした聞きづらい声を出した。

室内の照明が少し落とされ、専門家の背後のスクリーンに折れ線グラフのついた画像が映し出された。

「このグラフからもわかるように、このあたりから人間の幸福度がずっと右肩下がりになっております」

専門家がスクリーンに映し出される右肩下がりのグラフの折れ線に指し棒を沿わせながら説明した。

「過去にも戦争や災害で、人間の幸福度が大きく下がることはありました。例えばこことかここですね」

今度は折れ線グラフが大きく窪んだ箇所を指し棒で軽くトントンと叩いて示した。

その後、みんなが理解したか確認するように専門家は眼鏡をずらして会場を見渡した。会場からの反応は、ないに等しいほど薄い。専門家は、口元を歪めてから、ボードの折れ線グラフに視線を戻した。

「しかし、戦争や災害の後、すぐに大幅に幸福度が上がっているのです。ほら、ここです、ここ」

今度は窪んだ箇所の後に折れ線グラフが急上昇している箇所を指し棒で強くトントンと叩いた。

「このように人間の幸福度が下がった要因がはっきりしている場合は、すぐに上がってきますからいいのです。わかりますか」

専門家はまた会場を見渡した。やはり反応は薄い。専門家は首を傾げてから続けた。

「しかし、今の状況は戦争や災害などの大きな要因があって下がっているのではなく、緩やかに止まることなく下がり続けているんです。じわりじわりと真綿で首を絞められるように」

専門家がそこで言葉を切って、自分の首を両手で絞めるポーズをした。そしてまた会場を見渡し薄気味悪く笑って見せた。

それでも会場から何の反応もなかった。専門家は、会場の反応を期待するように、しばらく両手で首を絞めたポーズのまま、おどけた表情を見せたが、結局、最後はあきらめて話に戻った。

「私の知る限りでは、このような下がり方をしたことは世界中どこを探しても過去に前例はありません。この傾向は大変危険だと言わざるを得ません」

その後も専門家は過去の事例や世界の事例の説明を延々と続けた。結局、具体的な対策は専門家の口からは出てこなかった。危険だ、過去に前例がない、を繰り返すばかり

だった。

専門家は話を終えて、壇上からゆっくりと数段しかない階段を降りていった。ヨボヨボと足元がふらついている姿のせいで、さっきまでの話の説得力が一段と欠けてしまった。会場内にどんよりとした重い空気だけが流れた。

北の神を見ると、腕を組んで首を傾げていた。表情は険しい。隣の習の神は、下を向いたまま必死でノートにペンを走らせていた。後ろに座っている南の神は机にうつぶせていた。

「俺たちにどうしろって言うんだよな」

会場のあちらこちらからそんな小声が聞こえてきた。

協会長の顔を覗き見ると、会場を睨むように見ていた。北の神、もう少しやわらかい表情をしろ、南の神、顔を上げろ。野々神は心のなかで呟いた。

専門家が壇上を下り、代わって部長が勢いよく壇上へ上がった。

部長が会場を見渡して口角を上げた。ザワザワしていた会場が静まった。それを確認してから、部長は口を開いた。

「皆さん、大変厳しい状況ですが、下を向かず、全員、前を向いて、この危機を乗り越えましょう」

部長が空気を変えようと澁刺した声を上げたが、会場からは、それに応えるような声はあがらず、静まり返ったままだった。

部長は苦笑いを浮かべながら静まり返った会場を見渡してから続けた。

「皆さん、そんなに暗くなることはありません。ピンチはチャンスです。この後、協会長から、このピンチを乗り越える今後の具体的な対策について、有難いお話がございます。今の苦難の時期を乗り越えるために協会長が、寝る間も惜しんで、皆さんのことを一番に考え、練りに練った対策です。心して聞いてください」

部長は、そう言ってから笑みを浮かべ協会長に視線を向けた。

「では、協会長よろしくお願ひいたします」

部長は協会長の座席に体を向けて力強い拍手をした。

協会長が席を立ち壇上へ向かうと、会場からもチラホラと中途半端な拍手が起こった。私もそれに混じって中途半端な拍手をした。

協会長が壇上に上がったところで、部長は深々と頭を下げた。協会長が部長に不機嫌そうな視線を向けた後、会場を睥睨した。

会場の空気がピンと張りつめた。そこで、協会長は会場に向けて満面の笑みを浮かべた。

「皆さん、お忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。皆さんの日頃の努力に感謝しております」

そう言って慇懃に頭を下げた。会場に集まった神様たちは、泡が割れるように、ポツ、ポツと頭を下げていった。

「皆さんが本当に頑張ってくれていることは、よくわかっています」

協会長はそう言って会場を見渡した。会場の反応の無さに不服そうな表情を浮かべ、ひとつ咳払いをしてから続けた。

「しかし、先程の専門家の話でもわかるように、今の人間の幸福度の下がり方は大変厳しい状況にあります」

協会長は、さっきの専門家が説明してくれていたグラフに視線を向けていた。

「このままでは、われわれ、神様協会が崩壊してしまうかもしれません。そうならないために、皆さんには人間の幸福度を大幅に上げてもらうよう、より一層努力してもらわなければいけないのです。しかし、そう悠長なことも言ってられないのが現状です。そこで、私はある対策を考えました」

協会長はそこで言葉を切り、演台に置いてあるコップの水を口に含んだ。

「私の考えた対策、それは早急に人間の幸福度の吸い上げの割合を五十パーセントから七十パーセントに上げるということです。これについては、すでに協会本部の方で準備にとりかかっています」

静まり返っていた会場内が、にわかになぎわつきはじめた。

私も驚いた。人間の幸福度をこれまで以上に吸い上げるのは無謀だと思った。たぶん会場のみんながそう思ったのだろう。しかし、そんなことは、絶対誰も口には出せない。

会場のなぎわつきに、協会長は剣呑な視線を向けて、わざとらしく激しい咳払いをした。それと同時になぎわつきが、波が引くようにスーッと引いた。

会場が静まりかえった時、一番前に座る神様が手を上げてから「すみません」と言って立ち上がった。

協会長がその神様を見て、怪訝な表情を浮かべた。

私は手を上げて立ち上がった神様の方へ視線を向け、その神様を見た瞬間、心臓が飛び出しそうになった。

「今は質問の時間ではございません。ご着席ください」

部長は慌てて言ったが、その神様はそれを無視した。

「せっかく上がった人間の幸福度から、いきなり七十パーセントも吸い上げてしまうのは、吸い上げ過ぎだと思うのです。確かに神様協会は厳しい状況かもしれませんが対策が乱暴すぎます」

嘘だろ。協会長に向かって何を言い出すんだ。北の神、それは後で直属の上司である私に相談してくれればいいことだ。飛び出して行って北の神の口をおさえたい心境だが、体がガタガタ震えて動けなくなった。

北の神の意見に同調する「そうだ、そうだ」という声が会場内のあちこちから飛んだ。みんなやめろ、北の神もやめてくれ。私は冷や汗がダラダラと出た。

協会長は顔を真っ赤にし演台を思い切り叩いた。パーンという音が室内に響き渡り、演台に置いてあるコップと花瓶が倒れた。演台から水がしたたり落ちる。会場内は静まり返った。

「人間の幸福度が君たちがのんびりしていたおかげで三割も落としているんだぞ。協会を維持するためには、七十パーセント吸い上げるしかないんだ。それでも、協会を維持するにはギリギリなんだ。これ以上、君たちが人間の幸福度を落とし続けると、吸い上げは七十パーセントどころではなくなるんだ。もっと上げないといけなくなるんだぞ。文句いう暇があるなら、人間の幸福度を上げる対策をしっかりと考えろ」

協会長が北の神を睨み怒鳴るように言った。

しかし、北の神は全く怯むことはなかった。

「せっかく上がった人間の幸福度を七十パーセントも吸い上げてしまうと、その後の人間の幸福度が下がりやすくなります。人間の幸福度は一旦下がりだすと、堰を切ったようにドンドンと下がりだすこともあります。そうってから人間の幸福度を上げるのは大変難しいんです。われわれ現場の意見としては、人間から吸い上げる幸福度を急激に増やさないでほしいということです。七十パーセントに上げるより反対に三十パーセントに下げてほしいくらいです」

立ち上がったまま、北の神が意見を続けた。

北の神、もうやめてくれ。後で協会長から大目玉をくらうのは上司の私なんだよ。私は祈るように手を合わせた。

「そんな現場のわがままを聞いていたら、神様協会は崩壊してしまう。そうならないために、五十年以内には、七十パーセントにするしかない。わしも苦渋の決断だ。それくらい理解しろ」

協会長の怒りはすでに頂点に達している。真っ赤な顔をして目は血走っていた。

「そんなことより人間の幸福度を上げる政策は考えないのですか」

北の神はまだ食い下がる。

「そんなこと、だと」

協会長は怒鳴った。

「はい。人間の幸福度を上げる政策が必要です」

「フン」協会長は鼻を鳴らし続けた。

「人間の幸福度を上げる政策は君たち現場の下僕たちが考えることだ」

「それなら現場の神様を増員してもらえないでしょうか。現在、現場を担当する神様は全部で五百人です。百年前に比べると現場の神様は二百人も減っています。反対に協会本部は、百人だったのが倍になり二百人に増えています。現場を担当する神様の数が減っているため人間の幸福度が下がっていることも考えられます。現場を担当する神様を六百人にして、本部を百人にさせていただけないでしょうか。それで、もうしばらく幸福度の吸い上げは、五十パーセントのままにしておいていただきたいです。それから人間から吸い上げた幸福度の配分ですが、私たち現場への配分を増やしていただきたいです。現在、配分が不透明なものも納得いきません。たぶんですけど、本部の配分の方が多くて現場が少ないと感じます。現場の神様に神の力を与えないと、人間の幸福度も上げられません。神様の数から考えても現場の方が多くて当たり前ではありませんか。本部と現場の配分は考え直していただきたいです」

北の神がいつも愚痴っていることだが、それをこの場で言うことはないんだ。

「それについては、後日検討する」

協会長は話を終わらせようと、視線を下に落とした。

「後日というのは、いつごろでしょうか」

北の神、もうやめてくれ。協会長にたてをつくと、お前の身が危うくなるんだぞ。

「今聞いてすぐには答えられるわけない」

協会長のこめかみがピクピクと音を立てている。北の神、もうダメだ。限界だぞ。

「以前から問題になっていたことですよ。これまでに検討することはなかったのでしょうか。現場の神様は幸福度を神の力に変えて、人間に還元していますが、一体協会本部では、吸い上げた幸福度を何に使ってしまっているのでしょうか。そこもまったく見えてきません。不透明すぎます」

「それぞれの立場や生産性も考慮して検討してるんだ」

「検討した内容をもっと具体的に示していただけますか？　そして今後の幸福度の分配について、早急に決めてください」

「専門家の意見も聞かないといけないし、まだまだ結論なんて出せるわけがない」

「悠長なこと言ってられないんですよ」

「君、いい加減にしろ。誰に向かって、そんな口を叩いてるんだ。自分を何様だと思ってる。今この場でこれ以上は口を開くな」

協会長は、北の神に向けて人差し指を突きだし、ハ虫類を思わせるような目で睨みつけた。協会長の体が怒りのせいで震えている。会場内の空気が凍りついていた。

協会長は次に部長に視線を向けた。「部長、なんでこんなことになる。しっかり進行しろ」

「は、は、はい、司会進行がまずくて申し訳ございません」

かたまってしまっていた部長は壇上に上がり、深々と頭を下げた。

「こ、この場は、皆さんの意見や質問を聞く場ではございません。これ以上のご意見や質問はご遠慮願います」

部長の声は最初のはつらつとした声とは違いかすれていた。

「部長のいう通りだ。君たちはこの場で偉そうなことを言える立場ではない。君たちの怠慢のせいでこうなってしまうのだ。もし意見や質問がある場合は各神社の上司を通すようにしてくれ。この場で君たちのわがまを聞くのは時間のムダだ」

協会長は意見した北の神を一瞥した。部長が頭を下げて、締めに入った。

「予定の時間が過ぎていきますので、これで終わらせていただきます。まずは幸福度の吸い上げ率七十パーセントに向けて、協会本部は準備をすすめておりますので、決まり次第ご報告いたします。よろしく願います。以上で閉会いたします。お疲れ様でした」

部長は一気に捲し立てた。

「吸い上げ七十パーセントは断固反対です。多数決で決めてください」

北の神がまだ食い下がる。

「いい加減にしろ」

協会長が演壇をバーンと叩いた。

「部長、しっかり進行しないか」

また会場内が凍りついた。

「も、申し訳ございません。それでは、現場の皆さん、人間の幸福度を上げるために頑張ってください。以上で閉会いたします。各神社の長には、この後、幸福度の吸い上げ七十パーセントに向けてのスケジュールについてご説明いたします。各神社の長だけは残っておいてください」

部長は顔をひきつらせてそう言った。

協会長は壇上を足早に下りて、そのまま奥へと消えていった。続いて協会幹部たちも

席を立ち奥へと消えていった。会場内には現場の神様たちのブーイングが飛び交った。それを両サイドに陣取る各神社の長たちが必死でなだめるが、静まりそうになかった。

司会の部長が壇上に上がり満面の笑みを会場に向けた。

「皆様、お疲れさまでした。これで解散します。各神社の長の方は三十分後に隣の第二会議室にお集まりください。それ以外の方は、くれぐれもお気をつけてお帰りください」

私は体中のありとあらゆるところから汗が吹き出て、びしょびしょになっていた。この後の各神社の長だけの会議は針のむしろになるだろう。

「各神社の長は全員揃ったのか」

協会長が座ったまま剣呑な目を前に座る各神社の長たちに向けて言った。

私はこの場から逃げ出したい気分でした。北の神が集会の場で反抗的な意見を述べたので、協会長はすこぶる機嫌が悪い。きっと、北の神の上司である私は怒られるだろう。

「はい、全員揃っております」

部長の声は上滑りしていた。

「今日の集会、あれはなんだ？」

「私の司会進行がまずくて、大変申し訳ございませんでした」

部長が深々と頭を下げた。

「君の進行もまずかったが、それより、こっちが大事な話をしてる時に、現場のヒラの神様が何故あんな生意気なことを言うんだ。どんな教育をしてきたんだ」

協会長の声を聞く度に私の体は縮んだ。

「申し訳ございません。本人にはこのあと厳重に注意しておきます」

「なぜ、あの場ですぐに追い出さなかった。わしの話聞きながら聞いていた他の神様に迷惑だろ」

「配慮が足りませんでした」

「あの生意気な若造は、どこの神社だ？」

ついにきた。私は、顔を上げられず体を沈めた。

会場は静まり返っている。

「おい、どこの神社だ。その神社の長はどいつだ」

私が手を上げなければならない。それはわかっている。わかっているでも手を上げる勇気がない。

まず、恐る恐る顔を上げて、協会長の顔色を窺った。真っ赤な顔をして鬼のようだった。当たり前だが完全に怒っている。

「あの発言をした神様の所属する神社の長の方は挙手してもらえますか」

部長が手を上げながら会場を見渡していた。誰も手を上げない。当たり前だ。私が上げなければならないのだから。

「あの生意気な若造は、どこの神社の所属だと訊いてるんだ。そこの長はさっさと手を上げろ」

協会長の怒鳴り声が、俯く私の頭の上を通り過ぎていった。

部長が、ハァーとため息をついた。

「早く挙手してもらえますか」

「調べればわかることだぞ。あいつは、どこの神社の所属だ。そこの長はすぐに手を上げろ。早くしろ。時間の無駄だ」

どうせわかることだ。私は顔を上げ勇気を持って、ゆっくりと肘を曲げたまま少しだけ右手を上げた。

「そー、しっかり手を上げろー」

協会長の声が私に向かって飛んできた。目が合った瞬間に体が縮みあがった。

「は、は、はい」

声を絞り出してゆっくり肘を伸ばし、手を頭の上まで上げた。

「お前のとこか」

一段と激しくなった怒声が飛んできた。

「は、は、はい。そ、そうです」

真っ赤な鬼のような顔が大きく膨らんだ。

「すくな立てー」

「は、はい」

立ち上がった瞬間に椅子がバタンと倒れた。

「お前はどこの神社だ？」

「は、はい、の、の、野々神社です」

「なに、ののののだと」

「い、いえ、の、の、神社です」

しっかりと言葉が出ない。

「野々か」

「は、はい。の、の、です」

「野々か。あそこはわしの嫌いな地区だ。で、あの若いのは、野々のどの地区を担当してるんだ？」

「き、き、きた地区を、た、たんとう、し、しております」

「なに言ってるかよくわからんな」

「あの若い神様は野々神社の北地区を担当しているようです」

部長が協会長に向かって言った。

「野々神社の北地区担当か、よーし、わかった」

協会長はそう言って、私を一瞥して、部長の方に顔を向けた。

「野々神社の北地区の成績はどうなんだ。すぐに調べろ。成績が悪ければ、あいつをすぐに協会から放り出せ」

「い、いきなり放り出すんですか？」

部長が目を大きく見開いた。

「わしに質問するな。お前も放り出されたいのか。さっさと言われたことをやれ」

「は、はい。そ、早急に」

部長は頭を下げて、立ったまま手元にあるパソコンのキーボードを叩きはじめた。

北の神を放り出すなんて無茶苦茶だ。しかし、北の神は完全に協会長を怒らせてしまった。協会長は本気かもしれない。私にはどうすることもできない。できることは神様に

お祈りするくらいだ。

北の神の成績は優秀だ。北の神の成績を見れば協会長の怒りも収まるかもしれない。そうあってくれと部長が慣れない手つきでパソコンのキーボードを叩く姿を祈るようにして見た。

「まだ出ないのか」

協会長が私を睨んだまま部長に向かって言った。

「も、もうしばらくお待ちください。あれー」

部長は髪の毛をかきむしった。

「さっさとしろー」

「あっ、はい」

「とろい奴は、必要ない」

「は、はい。で、出ました」

「奴の成績はどうだ？」

「野々神社の北地区の成績ですが……」

部長がパソコンの画面に顔を近づけた。そして右手で右目をこすりながら見た。

「早く言え」

「え、えっと、ですね。それがですね。す、すごいんです」

「何がすごいんだ？」

「優秀です。びっくりしました」

「ふん、優秀だと？」

「は、はい。野々神社の北地区の人間の幸福度は常に九十以上はあります」

「なに？」

「こ、これです」

部長がパソコンを持ち上げ、協会長に画面を向けた。

協会長が訝しげにパソコンを覗きこんだ。

「こちらです」

部長はパソコンの画面を協会長の方に向けた。

協会長がしばらくパソコンの画面を見ていた。

「ほおー、なかなかたいしたもんだな。これはびっくりだ」

協会長がそう言ってから、ちらりと私の方を見た。

「はい、これは凄いです」

部長も私の方を見た。

これで北の神は大丈夫かもしれないと思った。

「おい、野々神、あいつはこんなに成績が優秀なのか？ 勤務態度とかはどうなんだ？」

「あ、あ、はい。こ、この度は申し訳ございませんでした」

私は腰を二つに折った。

「詫びはいい。今日の件は、お前も後で処分してやるからな。それよりあいつの成績と勤務態度がどうかを訊いているんだ。それをさっさと答えろ」

「あ、はい、き、北の神の成績は確かに優秀でございます。勤務態度もこれまでに問題を起こすようなことはなかったのですが、今回はどうしたことなのか、私も戸惑ってお

ります」

「成績優秀なのは確かなようだな。しかし、それとこれとは別だ。わしに対して反抗的な態度をとったことは絶対に許さない」

「は、はい、ごもっともです」

「協会から放り出してやってもいいのだが、これだけの実力があると、フリーで活躍する可能性もある。そうなると協会としては困るよな」

協会長は隣の部長に同意を求めるように言った。

「確かにそうですね。常に九十以上はすごい数字です。九十も出せる実力ならフリーになっても活躍する可能性は十分にあります」

「協会が追放した神様がフリーで活躍したとなると、協会の面子も丸潰れだしな」

「しかし、全協会員の前で協会長に批判的な発言をしたわけですから、それなりの処分をしないと、これもまた、協会の面子に関わります」

「そうだな、じゃあ、後でゆっくり決めるか」

協会長が右の口角だけを上げた。

「それでは、処分については、後日ということによろしいですか」

「そうだな、それまでは謹慎させておけ」

「野々神、彼の処分については、後日また連絡します。それまでは彼を謹慎させておいてください」

「はい、申し訳ございません」

私は深く深く頭を下げた。この後、北の神にどんな処分が下されるのか。それも気にはなるが、私自身もそれなりの処分を受けなければならないだろう。そう思うと鉛を飲み込んだような気分になった。

「人間界に行ってもらうことにした」

協会長に呼び出されたのは、緊急会議の五日後のことだった。

協会長に意見をやるなんて前代未聞のことで、集会での北の神の発言は、やはり大きな問題になっていた。

私は、北の神の処分がそれなりに重くなるだろうと予想はしていたが、その予想をはるかに超える重い処分だった。

人間界に行くということは、処分の中でも一番重い処分だ。

通常は協会での活動停止が一般的な処分で、処分の重さは活動停止期間の長さに比例する。一番重い場合は永久追放ということになる。

永久追放されてしまうと、協会に属さないフリーの神様になってしまい、そうなったほとんどの神様がそこで路頭に迷い浮浪の神になるか疫病神に転身している。

人間になるというのはそれよりも重い処分になる。協会長は北の神が優秀な神様だと知り、フリーになって活躍されることを恐れたのだろう。処分した神様がフリーで活躍されると協会の面子が丸潰れになってしまうからだ。

そこで、協会長は北の神を人間界に送ることに決めたようだ。人間になるということは神様だった時の記憶や神の力を全て失ってしまうので神様としての死を意味する。人

間界の死刑と同等の処分と言っていい。

「に、人間にしてしまうのですか」

私は、あまりにも重い処分にショックで目の前が真っ暗になった。

「フフン、ショックのようだな」

協会長は右の口角だけを上げて笑った。

「あ、は、はい。北の神は優秀なやつです。何とか助けてもらえないでしょうか。お願いいたします」

私はふらつく体を二つに折り、深々と頭を下げた。

「あいつを助けたいのか？」

「お願いします」

頭を下げると、涙が床に落ちた。

「わしに齒向かうとこういうことになるんだ」

「は、は、はい」

頭を下げたまま、声は上ずってしまう。

「さすがに辛そうだな」

「は、は、はい」

「誰かのそういう困った姿を見ると、わしは嬉しくなる。ハハハ」

「本当に申し訳ございませんでした。なんとかお許しいただけませんか」

私は土下座し床に額をこすりつけた。

「フン」

「お願いいたします」

協会長の顔を見上げて懇願した。

「わかった。君がそこまで言うなら処分は少し軽くしてやろう」

協会長は私を見下ろして言った。

「ほ、本当ですか」

協会長は勝ち誇ったように笑みを浮かべていた。

「ああ、処分は軽くしてやる」

「ありがとうございます」

もう一度、床に額をこすりつけた。

「あいつは優秀なようだし、神様に戻れるチャンスは残してやろう。しばらく人間界で自粛してもらおうという形にする。だから人間になっても神様としての記憶や神の力は残しておいてやろう」

「北の神は神様に戻れるわけですか」

「ああ、あいつが人間界で過ごして、心を改めるようであれば、すぐに神様に戻してやる。ただし、自分が神様であったことを絶対に人間に漏らしてはならない。そして、人間界で過ごす間は神の力を使うことも絶対に許さない。もし、それを破った場合は、その時点で神様の記憶も神の力も失うことになる。神様としては死んでもらう」

めずらしいケース、いや、こんな処分は、これまで聞いたことがない。

きっと、協会長は北の神の実力を認めているのだろう。だから人間界で過ごしている間に改心すれば協会にとって大きな戦力になると考えたのだ。協会長は将来的に、優秀

な北の神を自分の手足として使うつもりだ。

「わ、わかりました。神様に戻るチャンスはあるわけですね。ありがとうございます。処分は人間界で修業すると伝えておきます。期間はどれくらいになるでしょうか」

「まだ決めてはいないが、長くても人間の寿命は百年くらいだろう。人間の寿命を全うするまでだ。もし、あいつが改心したとわかれば、もっと早くしてやる。そうだな。十年や二十年でも神様に戻してやってもいいな。但し、改心しなければ人間の寿命を全うしても神様に戻すつもりはない。その場合は人間として死んだ時点で神様としても死んでもらう。そこがタイムリミットだ。それまでに改心してもらいたいものだな」

19

目を覚ますと男の切れ長な目があった。彼は俺の顔をじっと見つめている。彼の瞳はユラユラと潤み、光に照らされキラキラと輝いていた。

長い時間、ずっとその状態が続いた。そのうち彼の潤んだ瞳から涙が零れ、俺の顔に落ちてくるのではないかと冷や冷やした。

男の口角は思いっきり上がり、幸福度絶頂といった様子だった。

「秀太、大きくなったらいっしょにキャッチボールでもしような」

男は俺のもみじのような小さな手を強く握ってきた。温かくて大きな手だ。

体を自由に動かすことが出来ない俺は、一日中男に頬ずりをされたり手を握られたりと、されるがままだった。

俺はついこの間まで野々神社に所属する北の神という神様だった。神様協会の緊急会議の場で意見を述べたことが神様協会の協会長の逆鱗に触れ、人間にされてしまった。

俺は人間界で、北野家の長男の秀太として生まれ、今病院のベビーベッドに横たわっている。

俺のことをずっと覗きこんでいるこの男が、俺が人間界で過ごす間の父親で、名前を北野俊介という。そして、俺の隣のベッドで横になってるのが、母親の北野みどりだ。

神様が処分をうけ人間にされてしまう場合、本来は神様の記憶を全て消されてしまうそうだが、俺の場合は、その記憶を消されることなく残してもらえた。

緊急会議の場で、自分の考えを発言しただけで、処分され人間にされてしまったことに憤りを感じるが、神様の頃の記憶と神の力を残してくれ、神様に戻るチャンスを与えてくれたことには感謝しなければならない。

だから、気持ちを切り替えて、神様に戻った時に役立つよう、これから人間界でしっかり修業するつもりでいる。

今日は多くの人間が秀太の誕生のお祝いにかけてくれた。

「お祝いに来てくれてありがとうございます」

俊介は感謝の言葉を口にし、幸せな気持ちを分け与えるかのように、来る人来る人の手を強く握りしめていた。

ベッドで横になっているみどりに対しては、「お疲れさま。本当にありがとう」と今日だけでこの言葉を十回以上口にしていた。

「お疲れ様。本当にありがとう」

俊介が俺の顔を覗きこむのをやめて、みどりの方に振り向き、またその言葉を口にした。

フフフとみどりの笑う声が聞こえた。

俊介はみどりが横になるベッドに体を向けて、みどりの右手を両手で優しく包むように握った。

「今日はぼくにとって人生最良の日だよ」

俊介の声は涙声になっていた。

「結婚式の時も、今日が人生最良の日だって言ってなかったっけ。あなたにとって、どっちが本当の最良の日なのかな」

みどりはクスクス笑いながら言った。

「そうだった。結婚式も最良の日だったなー、けど、うーん、今日も最良の日なんだ。甲乙つけられないよ」

「あなたには人生最良の日がいくつもあるのね」

「うん、これからもみどりとこの子と一緒に過ごせば、きっとぼくにとっての最良の日がいっぱいできると思う」

「あなたはいいわね、最良の日が次から次からいっぱいできて」

「うん、だからぼくは、これから先、君やこの子に次から次へと最良の日をいっぱいプレゼントする。絶対に約束するよ」

「じゃあ、期待してるわ」

みどりはそう言って、ニコニコしたまま俺の方を見た。

俺が生まれただけで、両親の幸福度がドンドンと上がっていくのがわかった。神様の頃に赤ん坊の力は凄いと思っていたが、ここまでとは思わなかった。

神様の頃に、何度も目にしたお宮参りの家族の様子が頭に浮かんだ。赤ん坊を囲んだ人たちはみんな満面の笑みを浮かべ幸せそうだった。

今日、病院に訪れたたくさんの人たちも俺が横たわるベビーベッドを覗きこみ、俺の顔を見るなり顔がパッと晴れやかになり、幸福度を一気に上げていた。

俺は生まれてから両親からの変わらぬ愛情を受けてスクスクと育った。人間がよく口にする『平凡だけど幸せな人生』とはこういうことなのだと実感した。

ところが、俺が小学校三年生の時に北野家にとって、はじめての苦難が訪れた。

幸せで明るい家族がたったひとつの出来事で一気に暗転する。自分たちがなにか悪いことをしたわけでもないのに、昨日まで太陽に照らされたような明るい家族がそのことだけで暗闇に立つことになる。これが人間界の恐ろしさだと知った。

いつも元気で、病気とは無縁だったみどりが乳癌になってしまったのだ。

それを告げられた俊介はすごくショックを受けていた。

「もしものことがあったら、ぼくはもう生きていけない。みどりのいない人生なんて考えられない」と頭を抱えて涙を流していた。

「きっと治るから大丈夫、心配しないで」とみどりの方が気丈に振る舞い俊介を励ましていた。

神様の頃に、重い病にかかった人間が苦しむ姿をたくさん見てきた。患者本人だけでなく家族も辛い思いをし、悲痛な表情で神社に手を合わせに来ていた人間を数多く見てきた。

神様の頃、そんな人間を助けてあげたかったが、思い通りにならないジレンマがあった。俺たち神様は人間が思っているほど万能ではない。俺たちの持つ神の力では苦しむ人間を救うことは出来なかった。

みどりが乳癌だと聞いて、人間が家族のために神社にお参りし、神様にすぎる気持ちが痛いほどわかった。しかし、神様の頃の俺はどうすることもできなかった。

俺は絶対にお母さんを助けたかった。このまま神様にもどれなくてもいい。協会長との約束を破り、自分の持つ神の力をすべて使い切っても、お母さんの命を救うことを考えた。

それがこれまで自分に愛情を注いでくれたお父さんとお母さん二人への恩返しかもしれないと思った。

「お母さんは早期に癌が見つかった。しっかり治療すれば完治するから心配しなくても大丈夫だよ」

みどりの担当医の吉岡先生が、泣きそうになっていた俺の前に屈み、視線を合わせ笑みをくれた。

吉岡先生の眼鏡の奥で光る瞳は、小さいけれど強く輝いていた。この人に任せれば大丈夫だと思った。

「はい、よろしくお願いします。お母さんを治してください」

俺は泣くのを堪えて笑みを浮かべて頭を下げた。

「ああ、約束する」

吉岡先生が俺の頭を撫でて、そう言ってから右手小指を突き出した。

俺も右手小指を出して、吉岡先生と指切りをした。お母さんが本当に治るかはわからないが、本当に神様といえるのは、この吉岡先生のような人だろう。

隣に立っていた俊介は目を真っ赤にして、右手で目頭を押さえていた。

「先生、本当に、本当に、よろしく願いいたします」

俊介は、そう言って吉岡先生の右手を両手で強く握りしめ何度も頭を下げた。

自分が神の力を使わなくてもこの吉岡先生に任せれば大丈夫な気がした。この吉岡先

生に託してみよう。

もし、それでダメなら自分の神の力で、出来るだけのことをやってみようと思った。

その後、みどりの手術は成功し、吉岡先生のおかげで、俺の神の力を使うことなく、みどりは順調に回復した。やはり吉岡先生が、俺たち家族にとっての神様だった。

吉岡先生と出会ったことで、俺は神様に戻る前に医者になって多くの人間の命を救いたいと思うようになった。

そうだ、神様でなくても、人間を幸せにすることができる。いや、神様より人間の方が人間を幸せにできるのかもしれない。

人間でいる間に、人間の力だけで人間を幸せにする経験をしておくのもいいなと思った。

「お母さん、俺、お母さんを治してくれた、吉岡先生みたいなお医者さんになって、たくさんの方の命を救いたいんだ」

みどりが退院してから、俺がそう言うと、みどりは嬉しそうににっこりと笑った。

「じゃあ、今からしっかり勉強しないとね」

それからの俺は医者になるために猛勉強を始めた。そして、必死で勉強した甲斐もあり、大学の医学部に入り卒業し医者になることができた。

大学病院で働き始めた俺には、尊敬する先輩がいた。五年先輩の沢田美智香という、瞳の綺麗な美しい女性だ。

沢田は病と闘う患者やその家族に寄り添い、患者に親身になっているのが、そばにいて伝わってきた。この人もみどりの病を治してくれた吉岡先生と同じで、神様みたいな人だと思った。

俺は医者という仕事に憧れて志し、医者になることができたが、厳しい仕事でもあった。精神的にも肉体的にもキツイ仕事で逃げ出したくなることもあった。そんな時に沢田の頑張っている姿を見ると俺は初心に戻ることができた。そして彼女の顔を見ると胸がときめいた。

沢田は、俺にとって特別な存在だった。それは俺が彼女を女性として意識してしまっていることもあるのだが、それ以上に彼女との間に深い縁を感じていた。

それは沢田に会うのは今回が初めてではなかったからだ。俺が神様の頃に彼女に会っていた。それがわかったのは沢田の子供の頃の話を知ったからだ。

「北野くんは、なぜ医者になろうと思ったの」

沢田に訊かれたのは、彼女と一緒に働くようになって二ヶ月くらい経った頃だった。

その時、母親の乳癌の時の担当医の吉岡先生に憧れ、自分も患者やその家族に寄り添

う医者になりたいと思い医者を目指したと答えた。

「沢田先生は、どうして医者を目指したんですか？」

彼女には自分よりも強い志を感じたので俺は興味があった。

「わたし？」

沢田が自分の鼻に細く長い人差し指を向け口角を上げた。

「はい、沢田先生の仕事への情熱がすごいので、気になります」

「そんなにすごくないけどね」

「いえ、すごいです。沢田先生を見てると、俺、すごく胸が熱くなります」

そう言った後、心臓がバクバクし体が熱くなった。

「北野くんにそう言ってもらえると嬉しいな」

「そ、そうですか」

嬉しいなんて言ってもらえて、胸がはち切れそうになった。

「わたしが医者を目指したのも北野くんと少し似てるかな」

「俺と似てるんですか」

「そう。北野くんとほぼ同じ」

沢田はそう言ってから立ち上がり窓の前に立った。それから外の景色を眺めていた。俺も立ち上がり彼女の後ろに立ち、そこから窓の外に視線をやった。ビルの上に明るく光る三日月が見えた。

沢田はしばらく窓の外の景色を眺めていた。俺はすらりとした後ろ姿を見て鼓動が早くなった。

一步だけ彼女に近づいてみた。彼女はまだ窓の外を見ている。沈黙が続く。もう一步近づいた。手を伸ばせば彼女の細い肩に手が届く距離だ。

俺は勇気を出して彼女の肩に手をのせようとした。その瞬間に彼女がこっちに振り向いた。俺は慌てて上げかけた手を下ろした。

「わたしの母も乳がんだったの」

沢田が俺の目をじっと見て言った。その目は潤んでいた。沢田は昔のことを思い出し、外の景色を見ながら涙を堪えていたんだ。なのに、俺はなにを勘違いしているんだ。

「えっ、沢田先生のお母さんも、ですか？」

俺は気を取り直して訊いた。

「そう、二十五年も前で、わたしはまだ幼かった頃なんだけどね。母は、今のわたしより若かったのに助からなかったわ」

沢田は唇を噛みしめていた。

「そうだったんですか。助からなかったんですか」

「そう、助からなかった」

沢田の潤んだ目から涙がこぼれ頬を伝った。

「嫌なことを思い出させてしまって申し訳ありません」

頭を下げて、この話は終わらせようと思った。

「気にしないで、遠い昔のことだから大丈夫よ。それに、正直に言うと、わたしには母の記憶はあまりないの。母が死んだ時、悲しかったのは、確かだけど」

彼女はそこで言葉を詰まらせた。顔を上げ天井を見つめ、唇を噛みしめていた。

やはり、この話は早く終わらせるべきだと思っていたら、沢田が続けて話しはじめた。
「母が亡くなって、わたしより父の方が大変だったと思う。わたしは幼かったから、あまり記憶にないけど、きっと、悲しくて、寂しくて、辛かったんだと思う。それなのに男手一つでわたしを育ててくれた」

「そうですか」

「それでね、父みたいに辛い思いをする人を少しでも減らしたくて、できるだけたくさんの患者さんを病から救いたいと思ったの。それができるのは、やっぱり医療に携わるしかないでしょ」

「そうですね、俺もそう思いました」

「実はね、二十五年前の母の手術の日に父に連れられて、家の近くにある野々神社という小さな神社にお願いに行ったの。おかあさんが助かりますようにってね。父といっしょに必死でお願いしたのを今でも覚えている。その帰り道、わたしは神様にお願いしたから母は助かるものだと思っていた。父に向かって、これでおかあさん助かるねって言って、笑ってたと思う。でもね、ダメだった。神様なんてインチキなんだと幼心に思った。だから、自分が医者になって少しでも多くの命を救うと決めたの」

俺が野々神社にいた頃だと、記憶の扉を開けた。そういえば父親と幼い女の子がお願いにきたことを思い出した。

習の神が何とかしてあげたいと言っていたのに、その時、俺は無理だと言ったことを苦々しく思い出した。

「すみませんでした」

つい、頭を下げてしまった。

「なんで、北野くんが謝るのよ」

沢田先生は首を傾げて笑った。

「いや、そんな苦労してたんだと思うとなんか申し訳なくて」

「苦労したのはわたしより父よ」

「沢田さんのお父さんは、今もお元気なんですか」

「おかげさまで父は元気よ。これからは父にも恩返しをしたい。わたしを育てるのに大変だったろうから、これからは父にも恩返しをしたい。再婚すればよかったのと思ったけど、父はそんな気はなかったみたい。今も一人で暮らしてるわ」

俺はこの時、神様に戻ってやらなければいけないことがたくさんあると思った。

神の力は万能ではないが、もっと人間を幸せにできる力があるはずだ。そのためには、やっぱり神様協会を変えなければならない。

沢田への俺の想いは片想いで終わったが、それから優香という女性と知り合い結婚した。優香のお腹に子供ができた時は、俺も俊介もみどりも優香も優香の父親も母親もみんなの幸福度がグーンと上がった。

俺はこれからこの家族の幸福度を上げ続けるために、できるだけ長く人間として生きていこうと決めた。

テスト当日の朝をむかえていた。よく晴れた気持ちのいい朝だったが、僕は疲れていた。

昨日の夜は緊張して眠れなかったせいで、体は重く頭がボーッとして熱っぽい。こんな日は休みをとって体を休めるべきかもしれないが、そんなことは言ってもらえない。

今日は大切なテストの日だ。テストに行かなければ、これまでの三十年の努力が全て水の泡になってしまう。

熱っぽく重い体、ボーッとした頭にカツをいれようと北の神に教えてもらったストレッチを始めた。ストレッチを始めると体がだんだんと軽くなり、頭もスッキリとしてくる。

「習の神、おはよう」

背中から声がしたので振り向くと、野々神の笑顔があった。

「あっ、野々神。おはようございます」

僕はストレッチを中断して、野々神に勢いよく頭を下げた。

「いよいよテストだな」

テストという言葉聞いて、少し落ち着きはじめて僕の心臓は再び暴れだした。

「は、はい」

緊張をほぐすように、思いっきり肺に空気を送り込んだ。

「頑張ってるな」

野々神が僕の肩に手を置いて優しい視線をくれた。

「はい、自分は絶対に合格してみせます」

直立不動になり大きな声で返事した。

「中地区の現場での成績もなんとか幸福度が六十を越えたし、いい感じになってきたな」

「はい、これも野々神のおかげです」

「俺の力なんてたいしたことないよ。お前が頑張ったからだ。北の神が抜けて大変な時期だったが、なんとか乗り越えたしな」

「最初はどうか、不安でした」

「あとはお前が合格して、北の神が担当していた北地区を担当してくれたら、ありがたいんだけどな」

北の神が抜けてから北地区は野々神が兼任し担当していた。野々神は忙しかったので、南の神にも手伝ってもらいたかったようだが、南の神はそんな気は無さそうだった。

僕は自分の担当の中地区だけで、精一杯だったが、合間をみつけて野々神を助けようとした。

野々神は、僕のテストのことを心配して、中地区の人間の幸福度を六十に上げることに集中すればいいと言ってくれた。中地区の幸福度は、なかなか上げられず本当に大変な時期もあった。そんな時は北の神がいてくれたらなと思った。

「北の神は今どうしてるんでしょうね。北の神には早く人間界から戻ったきてもらって、またいろいろ教えてもらいたいです」

「あいつが戻ってきたら、あいつには今度は南地区を担当してもらおうかと思ってるんだ。今の南の神はやる気が無さすぎるよ」

野々神は唇を歪めて言った。

「自分は絶対に南の神みたいにはなりません。自分は北の神が目標です」

「確かにお前は北の神と似たところがあるからな。ただ、目標にするのはいいが、あいつは正義感が強すぎる。あの会議の場で北の神は協会長に言い過ぎた。場をわきまえなければダメだ。そこのとこだけは北の神のようにならないでくれ」

「でも、自分は北の神の言ってることが正しいと思っています。今の協会長のやり方だと人間界の幸福度は上がりません」

「確かに気持ちはわかる。わかるけどな、協会長も協会を存続させていかなければならぬし、いろいろ考えてるわけだから、協会で神様を続ける以上は協会の方針に従わざるを得ないんだ。嫌なら独立してフリーでやるしかないけど、それで成功するのは、ほんの一握りだ。ほとんどが浮浪の神か疫病神になってしまってる」

「その話は、北の神からも聞いたことがあります。でも、フリーのなかには成功してカリスマ的な神様もいるんですよ」

「いるみたいだね。噂だけで会ったことはないがな。そんなことは、今考えなくていい。今はテストのことだけに集中しろ」

「はい、わかっています。テストに合格して野々神にご迷惑はおかけしません」

「そうか、それなら安心だ。しかし、南の神は遅いな。もう昼過ぎてるぞ」

「そうですね。もうすぐ二時になります。また遅刻ですかね」

僕は唇を尖らせた。

「今日は参拝者のことは南の神に任せて、お前は少しでもテスト勉強をしておいた方がいいんだがな。私が一緒にいてやりたいが、テスト会場の準備で、申し訳ないがもうすぐ会場に行かなければならぬんだ」

「南の神が来なかったら一人でここにいますから、大丈夫ですよ。野々神は心配しないで、テスト会場の準備へ行ってください」

「しかしなー、もし南の神が夕方になってもここに来なかったら、お前はテストに行けなくなるじゃないか。そんなことになったら大変だぞ。テスト会場の準備を断ろうか」

「それはマズイんじゃないですか。自分なら大丈夫ですよ。南の神もそのうち現れるでしょうし、南の神が来たら、参拝者のことは全て任せてテスト勉強に集中します。野々神は心配しなくて大丈夫です」

「本当に南の神は来るんだろうな。後輩の大事なテストの日に、あいつは何を考えてるのか、ほんと困ったもんだ」

野々神は腕を組んで境内を見渡していた。

「今にはじまったことじゃないですよ」

「まあ、そうだがな」

「あっ、来ました」

視線の先に、目を充血させてあくびを堪えながら歩いてくる南の神の姿があった。

「やあ、おはようさん」

南の神が、こっちに向かって、ひょいと右手を上げて挨拶した。

「南の神、『やあ、おはようさん』じゃないですよ。とっくにお昼過ぎていますよ。今日は、習の神の大事なテストの日なんですよ。後輩の大事な日に何してるんですか。少しは緊張感持ってくださいよ」

野々神が眉間に皺を寄せながら声を張り上げた。

「後輩の大事な日ねえ」

南の神は僕を横目を見た。

「習の神は、ここでいっしょに頑張っているあなたの後輩でしょ」

野々神が苛ついている。

「確かにそうだな」

南の神は面倒くさそうに首を左右に折った。

「習の神は今日テストなんです。大事な日なんですよ。覚えてましたよね」

「何度も言うな。覚えてるよ。だから、休みだってえのに、こうしてわざわざ来てやったんじゃないかねえか。それに遅いって言うけど、テストの時間は夕方だ。まだ時間は充分あるだろ」

「休みに申し訳ないとは思ってますけど、私はこれからテスト会場の準備に行かなければなりませんし、習の神には最後に少しでもテスト勉強する時間をとってやりたいんです。なので、今から神社のことは南の神がやっておいてくれますか」

「わかった、わかった。神社のことはやっておくから」

南の神はそう言って本殿の奥へと入っていった。

「今から、私はテスト会場に向かいますから、後、お願いしますよ」

野々神は、南の神の背中に向けて声を張ったが、南の神は無言で背中を向けたまま右手を上げるだけだった。

「ハァ、大丈夫かよ」

野々神はため息を吐き、両手を上げてお手上げといったポーズを見せた。僕は苦笑みを浮かべた。

「じゃあ、先に行ってるから、遅れないようにな。今日は南の神に任せるしかないから、何かあったら、遠慮せずに南の神にやってもらえよ」

「わかりました」

僕は野々神がテスト会場へ向かう後ろ姿を見送ってから、本殿に腰を下ろした。

何度も深呼吸したが、やはり落ち着かない。参拝者が来てない間に、とりあえず問題集を開いた。ここは絶対にテストに出ると野々神から念押しされマーカーを引いた箇所の問題を復習することにした。

「気張ってるな」

背中から声がしたので、振り向くと南の神が肩越しに問題集を覗きこんでいた。

「ああ、南の神。もうすぐテスト会場に行きますので、あとお願いしますね」

「何度もうるせえな。わかってるよ」

南の神はそう言って、僕の隣に腰を下ろした。

南の神は僕の隣に座った途端に背中を掻いたり咳払いをしたりするので、気が散って勉強に集中できなくなった。

南の神は、わざと僕の勉強の邪魔をしているのかと思うくらい隣で音をたてているので、僕は南の神を睨んだ。

僕がテストに合格すると南の神は自分の立場が危うくなるとわかっているのかもしれない。だから僕には合格してほしくないと思っているのだ。

野々神が南の神を追い出したがっていることを南の神も薄々は勘づいているだろう。

さっきも野々神は、僕がテストに合格したら北地区を担当して、北の神が戻ってきたら南地区を担当してもらうようなことを話していた。そうなると、南の神の居場所はなくなる。

自分の立場が危ういからといって、邪魔をする暇があるのなら、一生懸命に頑張って仕事すればいいのにと考えた。

そんなことを考えていると、南の神に対して無性に腹が立って勉強どころではなくなった。気が散るから、南の神は奥にいてくれればいいのかと思っただけでなく、全く集中できなくなり、「クソー」と問題集を床に叩きつけた。

「たいくつだなあー」南の神が掠れた声で言った。

こっちの気も知らずにと僕は一段と苛立った。怒りのせいで僕の呼吸が荒くなっていった。南の神に関わりたくないのだから、僕から南の神に向けて言葉を発することはしなかった。南の神の存在は無視して冷静になろう。

静まりかえった境内で、こんどは「ガァー、ガァー」と南の神の痰を切るような音が出た。

「静かにしろよ」

我慢の限界で、つい言葉が出てしまった。

「おっ、あいつはなんだ。なんかおもしろそうな奴が来たな」

南の神は僕の言葉は無視して、鳥居の方を指さした。南の神の相手はしないでおこうと思っていたが、つられて鳥居の方に視線を向けてしまった。そこには地元の中学校の制服を着た少年が鳥居を見上げて立っていた。

少年の顔を見ると唇を噛みしめていた。そして糸のような細い目は潤んでいるようだった。少年の手元を見ると、両拳を強く握りしめ小さく震えていた。

学生服のお腹のあたりには靴の跡が白くついて汚れていた。右肩の辺りは濡れているようだった。ズボンも裾から脛のあたりまで濡れているように見えた。

「ありゃ、おかしいな。普通じゃねえな」

南の神がそう言って、後ろから僕の肩に手をのせてきた。

「そ、そうですね」

無視しようと思っていたが答えてしまった。

「ありゃー、絶対やばいな」

南の神が僕の耳元で呟いた。

「あの子の体、震えてますもんね。怒ってるんですかね」

僕は少年のことが気になり目が離せなくなった。

「怒ってるというより悔しがってるか、悲しんでるんじゃないかな」

「一体こんなところに何しに来たんだろう」

僕は首を傾げた。こんなに若い子が一人で神社に来ることは珍しい。高校の合格祈願や恋愛成就で来ることはあるが、彼を見る限りそんな様子には見えない。

少年はゆっくりと僕たちのいる拝殿へと向かって歩いてきた。その足取りは重く、右足を引きずるように歩いていた。右足を怪我してるのかもしれない。

「こっちに来るぞ」

南の神が僕の耳元で呟いた。少年のことが気になり、南の神への苛立ちは消えていた。

「あっ」つい、声が出た。

「どうした？」南の神が訊いてきた。

「あの子の顔見てください。アザがありますよ」

「あー、本当だ。顔がだいぶ腫れてるな」

「喧嘩でもしたんですかね」

「うーん、あれは、ただの喧嘩じゃないぞ。ちょっとヤバいんじゃないか」

南の神が珍しく参拝者のことを心配して、僕の前に出て少年を見ていた。

「なにがヤバいんですか？」

「ああ、とりあえず様子を見ようか」

「わかりました」

僕は南の神と並んで拝殿の前に立ち、少年の様子を窺った。

少年は僕たちの前に立ち、鈴を鳴らしてから賽銭箱に十円玉を投げ入れた。

『カタカタ、コトーン』

十円玉が音を立てて賽銭箱に吸い込まれていった。そして少年は僕たちに向かって手を合わせた。五秒、十秒、二十秒、三十秒、長い時間、少年はじっと目を閉じて手を合わせていた。その間、僕たちに向けて願い事をするとはなかった。

少年は合わせていた手をほだき顔を上げて「フー」と息を吐いた。

「お父さん、お母さん、ごめんなさい」

最後に涙声でそう呟いて、踵を返し手水舎の方へと歩き出した。

「あの少年はあんたの担当の地区のようだな」

南の神が資料を広げながら言った。

「そうですか、中地区ですか」

「そうだ。中地区だ」

「彼になにがあったんでしょうか」

「これは、だいぶヤバいパターンだな。多分苛めにあって、自殺を考えてるのかもしれないな」

「えっ、自殺、ですか」

「ああ、間違いない。この子はこれから自殺するつもりだ」

「嘘でしょ。自殺なんて絶対ダメですよ。まだまだ人生は楽しいことがあるんだから」

「あんたの性格からして、これは放っておけないよな」

南の神が僕の肩に手を置いた。

「放っておけないです」

僕は少年をじっと見つめた。

「そうだよな。習の神は正義感の固まりだからな」

「でも、今日はこれからテストがあるんです」

「そうだったな。忘れてたわ」

「だから、南の神、すいませんが僕の代わりにこの少年のことお願いします。彼を助けてあげてください」

僕は南の神に向かって頭を下げた。

「いやいや、他の地区のことなんて、わしは知らんよ」

南の神は右手を横に振って、右の口角だけ上げて笑った。

「えっ」

僕は言葉を失った。さすがの南の神でも、この少年を見たら僕の代わりになんとかしてくれと思った。なのに、南の神は『知らんよ』と平気で言った。

「あんたの担当地区なんだから、あんたが責任持ってやりな」

「何言ってるんですか。自分はもうすぐテストに行かなければならないんです。テストに合格しないと、自分は正式な神様にしてもらえないんですよ」

「正式な神様って協会に入ることかい」

「そうですよ。協会から正式に神様と認めてもらわないといけないんです。その為に自分は今まで頑張ってきたんです。南の神もそれくらいわかってるじゃないですか」

「そうかい。協会に認められるのが正式な神様ねー。正式な神様になるためには、困った人間が目の前にも無視してもいいわけだ。あんたが、ここに来た当時は、ああいふ少年が来たら放っておけなくて飛んで行ってたんじゃなかったかな」

「そりゃあ、この少年のことは心配ですよ。放っておけない気持ちはあります。でも、何度も言いますが、自分は今日テストがあるんです。だから、南の神にお願いしてるんです」

「じゃあ、結局、あれかよ」

南の神が顎を突きだした。

「あれってなんですか？」

「人間を幸せにしたいとか偉そうなこと言っておきながら、結局自分の出世の方が大事ってわけだな」

「そう言われても、困ります」

「たいしたことない奴だな」

僕は返す言葉がなかった。このままこの少年を放ってテスト会場に向かっていいものだろうか。この少年の命と僕がテストに合格すること、どちらが大事なことなのだ。決まっている少年の命の方が大事だ。

きっと南の神は、この少年に何もしてくれない。自分がテストに行ってしまうと、この少年はどうなるんだ。もしこの後、少年が自殺してしまったら、僕は悔やんでも悔やみきれないだろう。

しかし、テストに行かなければ、野々神に迷惑をかけてしまう。それに、僕があの子のためには出来ることなんて、たかが知れている。自分の力だけで少年を助けることはどうせできない。だから僕はテストに行くべきなのだ。

「そろそろ、テストに行きますね」

僕はそう言って、テスト会場へ向かおうとした。神社を出る前に少年を見ると、彼は手水舎の前に立っていた。そこで柄杓で水を掬い、掬った水を頭からかけた。少年の髪の毛から水が滴り落ちる。

僕はテストへ向かう足をとめた。

少年はそれからまた柄杓で水を掬い頭からかけた。それを何度も何度も繰り返した。十回くらい繰り返して、少年の体はビショビショになっていた。

少年はそのまま体育座りをし、膝と膝の間に顔を埋めていた。

南の神が僕に少年の様子を近くで見てくるように言った。何で自分がと思ったが、少年の様子は確かに気になったので、少年が座りこんでいる手水舎へと向かった。

少年の元へ行き、膝の間に埋めた彼の顔を覗きこんだ。少年の目から涙がポロポロとこぼれ落ちていた。

「おい、元気だせ。何があったんだ？」

僕は少年に向かって言った。

その言葉は少年に届くことなく、少年は右腕で涙を拭っていた。

それを見た僕まで涙が出てきた。

「あらら」という声が耳元で聞こえた。

振り向くとすぐ近くに南の神の顔があった。僕はビクビクして跳び跳ねた。

「やっぱり泣いてるな」

「そうですね」

「こりゃ、思った通り深刻だぞ。お前、どうすんの？」

「いや、だから、自分は今からテストへ行きますので、この少年のことは南の神が面倒みてください」

「少年よ。ここで泣いても、助けてとお願いしても、どうしようもないわ。あんたが来た神社が悪かったね。ここの神様は、あんたのことより、自分の出世の方が大事なんだって。ごめんなー」

南の神が少年の顔を覗きこみ、嫌味っぽくそんなことを言った。

それを聞いて僕は南の神を睨みつけた。こんな時に北の神がいてくれたらと思ったが、そんなことを思っても仕方がない。

「南の神が何もしてくれないなら、自分はテストには行きません。今からこの少年についています」

僕は南の神を睨みつけた。

「ほおー、なかなか骨があるねえ。習の神はそうでなきゃーな」

南の神が僕の目の前でわざとらしくパチパチと手を叩いた。

「クソーッ、もうやるしかない」

僕は拝殿へと戻り、さっきまで読んでいた問題集を床に叩きつけた。

「習の神、遅いな。何かトラブルでもあったのかな。それなら連絡くらいあるはずだろうしな」

テスト会場の準備は三十分前に終わっていた。会場の外に出て、習の神を待っていると、これから受験する研修生たちが緊張した面持ちで続々と会場に入っていく。そのなかに習の神の姿はなかった。腕時計に視線を落とすと、テスト開始まで、あと二十分だ。それにしても遅すぎる。

私は習の神が来るであろう道を、手でひさしを作って眺めた。傾きかけた太陽の光が眩しい。風が吹き抜けて落ち葉が舞う一本道。そこに習の神の姿はない。

もう一度、腕時計に視線を落とした。開始十分前になっていた。間に合わない。慌ててポケットからスマホを取り出して野々神社に電話した。呼び出し音が鳴り続けるだけで、なかなか繋がらない。

胸騒ぎしかなかった。野々神社まで戻ろうかと思って、電話を切ろうとしたところで、やっと繋がった。

「もしもし、私だ」

相手の声を聞く前に怒鳴るように言った。

「野々神、どうしたんですか。そんなに慌てた声を出して」

電話に出たのは南の神だった。

「習の神がまだ会場に姿を見せてないんだ」

「あー、そうですか」

相変わらずやる気のない声だ。お前も慌てろよと思った。ひとつため息を吐いてから、南の神に訊いた。

「習の神は、もうテスト会場に向かっていますよね」

南の神からの返答が怖かった。

「それがですな、野々神が出ていってすぐに、変な少年が参拝に現れましてね」

胸の中の騒ぎが一段と大きくなっていく。

「変な少年？」

「そう。ほんと、変な少年だったなー」

「その変な少年がどうしたんですか」

ダラダラとしゃべらず結論を教えてくれ。

「野々神、どうしたんですか。すごく苛立ってるみたいですけど」

南の神の呑気な声が、一段と私を苛立たせる。

「だから、習の神がまだ来てないんです。もうすぐテストが始まるんですよ。習の神はもうこっちに向かっているんですか？ さっきの変な少年って何なんですか？」

「それがね、習の神のやつ、その変な少年が心配になったみたいで、少年を追っかけて行っちゃいましたわ」

「えっ、えー、ど、ど、どういうことですか」

頭が混乱して整理ができない。

「どういうことって、習の神は、その少年が心配になったみたいで、テストどころじゃないとか言って出ていっちゃいましたわ」

「テストどころじゃない。あいつそんなこと言ったんですか」

私は髪の毛をかきむしった。

「ええ。確かそんなこと言ってましたな。いや、違うか。テストはもう諦めたって言ってたかな」

「どう言ったかなんて、どうでもいいんです。それよりなぜ習の神を止めてくれなかったんですか。今日は大事なテストの日だって言いましたよね」

「そんなこと言われてもねー。一応止めはしましたけどね。あいつがどうしても行くっていうもんでね、止めるのもどうかと思いますして、あいつの好きにさせました」

「無理矢理にでも止めないとだめでしょ」

「役立たずで、すいませんな」

「それじゃあ、習の神はテストには来ないわけですね」

「ええ、たぶん、そういうことでしょうな」

「あー、わ、わかりました。もういいです」

私は電話を切ってから天を仰いだ。薄暗くなった空には月も星も見えなかった。

あれだけ言うておいたのに、なぜ習の神は、そんな変な少年を追いかけて行ってしまったのだ。

もともとそういうタイプであることはわかっていた。正義感が強くて、後先考えずに行動するタイプだ。だから念には念を入れて一人で突っ走らないように言い続けたのに。怒る協会長の顔が浮かんで、気持ちがずっしりと重くなった。

今から協会長に報告に行くのが恐ろしい。北の神の件もある。協会長は私の管理能力の無さを、私が立ち直れなくなるくらい罵倒するのだろう。その時はひたすら謝るしかない。

協会長は習の神にもう一度チャンスを与えるだろうか。いや、無理だろう。協会長が習の神のような実績のない研修生にチャンスを与えるはずがない。

そうなると、習の神はどうなるんだろう？ 北の神のように人間にされるのかもしれないが、北の神と違って実績のない研修生だ。人間になるとしても記憶も神の力も消されてしまうだろう。二度と神様にはなれなくなる。

それとも協会から追放されるのか、そうなったら、習の神は、彼の目指しているフリーの神様になるわけだが、今の習の神の実力でフリーでやっていけるはずがない。

となると、習の神は浮浪の神か疫病神になってしまうのか。どちらにしても、習の神の神様としての道は閉ざされた。

何かいい言い訳はないかと考えた。テスト会場に来る途中で事故にあった。朝になって病気になってしまった。

「ハァー」そこまで考えてため息が出た。

そんな嘘はすぐにバレるだろう。そうなったら自分の身まで危うくなる。ここは正直に話すしかない。

正直に言えば、私の処分は、協会から追放されるような重い処分になることはないだろう。罵倒されることにじっと耐えるしかない。

重い処分になるのは習の神、お前だけだ。悪く思うなよ、というか、習の神、お前が悪いんだ。なぜテストに来なかったんだ。全てお前の責任だ。なぜ自分まで協会長から怒られなければならないんだ。

協会長のハ虫類のような目が頭に浮かんだ。今から報告に行く足取りは重い。

「またかね」

協会長がソファにもたれたまま、私に剣呑な視線を向けた。

「申し訳ございません」

私は深々と頭を下げた。頭を下げたまましばらくかたまった。頭を上げて協会長と目を合わせるのが怖かった。協会長の視線が後頭部に突き刺さる。

「南の神は全くやる気なしで、北の神は集会で生意気な発言をする。そして今回は研修生の習の神がテストをボイコットか。協会をバカにするのがあんたの教育方針なのかね」

「い、いえ、決してそんなことはございません」

私は、下げた頭を上げることが出来なかった。

「あんたをどっかへ飛ばしてやろうか。そうでもしないとわしの気が収まらない」

協会長の言葉を聞いて、慌てて顔を上げた。

「えっ、わ、私が処分されるのですか」

血の気が引いていくのがわかった。

「嫌かね？」

協会長のハ虫類の目が、ギロリと私を見た。白目が黄色く濁り、小さい黒目が私を突き刺す。

「は、はい。嫌と申しますか、お許してください。どうか、お願いいたします」

また深々と頭を下げた。

協会長は「フン」と鼻を鳴らし、しばらく口を開かなくなった。

そのまま沈黙が続いた。協会長の貧乏揺すりのせいで、床がガタガタと音を立てていた。

私は頭を下げたままじっとしていた。首の辺りから変な汗が出て、ポタポタと床に落ちた。

「確かに、君も出来の悪い部下ばかりを持って大変だと思う。そこは同情してやるよ」

協会長がやっと口を開いた。

「は、はい」

協会長の声が柔らかくなったので、少しだけ気分が楽になった。

「じゃあ、君は見逃してやるかな」

協会長がめずらしく口角を上げて私を見ていた。

「ほ、ほんとうですか？　ありがとうございます。このご恩は一生忘れません」

もう一度深々と頭を下げた。

「君は許すが、研修生は追放するからな」

「や、やはり、追放、ですか」

私は首を折った。

「私の決断に不服なのかな？」

「い、いえ、そ、そういうわけではございませんが、未来のある若者でもあるわけでした、なんといいますか……」

「君が未来のある若者を助けたいなら、それでもいいが、わしの気持ちは収まらない。君か研修生かどちらかを追放したい。君が研修生の未来を考えてあげるのなら、君を追放する。君か研修生か、わしはどっちを追放すればいいんだ？　それを君に決めさせてやる」

「私か、習の神か、どちらかが追放でございますか？」

「そうだな。なんなら両方でもいいぞ。その方がわしはすっきりする」

協会長がニタリと笑った。

「い、いや、それはちょっと……」

「両方が嫌なら、どっちにする？　早く決めてもらわないとな。わかっているとは思いますが、わしは気が長い方ではないからな」

「そ、それでは、申し訳ございませんが、習の神の方を……」

「習の神の方をどうするんだ？　はっきり言え」

「あっ、はい。習の神の方を追放ということでお願いいたします」

「そう。じゃあ今回の処分は、研修生の追放でいいな」

ここで、「はい」と言ってしまっているのだろうか。「はい」と言ってしまえば、習の神は神様協会から追放されてしまう。私が協会長にしっかりお詫びして、神様協会追放より軽い処分にしてもらおうようお願いすべきなのかもしれない。それが、習の神を預かった私の責任のような気がする。

「あ、あの、ですね」

私は揉み手をしながら、協会長の方へ一歩前を出た。

「なんだ？」

また、ハ虫類のような強烈な目で睨まれた。

「いえ、なにも」

一歩前を出たが、すぐに二歩下がった。

「じゃあ、研修生は、協会からすぐに追い出して、フリーの神様として頑張ってもらおうかな」

私は無言で腰を直角に折った。

16

僕はテストに行かなくてよかったのだろうか、野々神に迷惑かけてしまったんじゃないだろうか、そんな思いを頭に過らせながら、少年の萎んだ背中を追いかけた。

もしこの少年が苛められているわけではなく、自殺なんてする気もなかったのなら、僕の今の行動は全く無意味なものになる。

少年は野々神社を出てから月の光に反射し白く光るアスファルトの小道を五分程歩いたところで立ち止まった。右側には大きなマンションがそびえ立つ。十五階建ての去年できたばかりのきれいなマンションだ。どの部屋の窓からも灯りがもれている。今はどこの家庭も一家団欒の時間なのかもしれない。

マンションの敷地は広く、建物の奥には芝生が敷き詰められた広場が見える。広場の右側には自転車置き場やごみ捨て場があり、左側には小さな子どもが喜びそうな遊具が並んでいる。今は暗くてひっそりしているが、昼間の明るい時間には子供の声が響き渡るのだろう。

少年はマンションの敷地内に足を踏み入れ、辺りを見渡してから、背筋を伸ばしマンションを見上げた。僕の立つ位置からだ、少年はエントランスの明かりのせいで黒いシルエットになって表情までは見えない。

このマンションが少年の自宅だろうか。自宅マンションの前まで来たが、学校で喧嘩でもして服が汚れ顔に痣があるので、親と顔を合わせづらくて、入るのに躊躇しているのかもしれない。

少年は「フー」と息を吐いてから、両側に花が植えられている通路を通り、エントランスの前まで行った。僕もエントランスの前まで向かった。

少年はそこで鍵を出す様子もなく、インターホンを押そうともせず、ぼんやりと立っていた。たまにガラス張りの自動ドアからエントランスの中を覗いていた。

しばらくすると、エレベーターが開いて両手にゴミ袋を抱えた年配の女性が出てきた。女性がエントランスから自動ドアの前まで来たところで自動ドアが開いた。

女性が少年に視線を向けて、すれ違い様に「こんばんわ」と口角を上げて挨拶をした。

少年は言葉は発せず、小さく首だけひょこっと縦に動かし、自動ドアが開いている隙にマンションのエントランスの中へ入って行った。僕も少年を追いかけて、自動ドアをすり抜けてエントランスの中へと入った。

少年は、年配の女性が乗ってきたエレベーターのドアが閉まる前に、そのエレベーターに乗りこんだ。僕も少年に続いて乗りこんだ。少年は一番上にある十五階のボタンを押した。エレベーターのドアが閉まり上昇を始めた。

エレベーターの中で少年はエレベーターの壁に額を押しつけて、首を小さく横に振っていた。少年の顔を覗きこむと涙が溢れていた。エレベーターはそのまま十五階に着いて止まった。ドアがゆっくりと開いて少年は顔を上げて、エレベーターから飛び降りた。僕も少年に続いてエレベーターを降りた。

エレベーターから出た少年は、等間隔に並ぶドアの前をトボトボと歩いていった。この階に少年の自宅があり、このまま自宅に帰ると思っていたが、そんな様子には見えなかった。

通路の途中に階段があり、少年はその階段を下りて行った。数段降りたところに階段の踊り場があり、少年は、そこで立ち止まった。両手を踊り場の手すりにかけて背伸びをし下を覗きこんでいた。

ゴクリと唾を呑み込む音がした。少年は地面を突き刺すような視線で見ている。少年はここから飛び降りるつもりかもしれない。ここから飛び降りたら、きっと命は助からない。それは絶対にさせてはならない。

僕はどのようにして、この少年を止めればいいのかと考えた。しかし、思い浮かばない。少年はまだ背伸びしてじっと地面を見ている。

僕は、とりあえず少年の背中にしがみついた。しかし、そんなことをしても意味がない。少年は僕がしがみついていることを感じないのだから。

少年の背中に、「早まるな」と声をかけてみたが、それも少年の耳に届くはずはなかった。

僕は自分の無力さが情けなくなった。神の力をもっと身につけたい。今の自分にはこの少年を助けるだけの力がないのだ。少年の体をおさえることも、少年の心に訴えることも、僕の力だけではどうにもできない。

少年がピョンと跳ねて自分のお腹を踊り場の手すりに預けた。少年の上半身がマンションの手摺から外に出た。バランスを崩せばそのまま落ちてしまう。

僕は慌てて階段を上がり、自分に出来る神の力はこれくらいのことしか出来ないと、すぐ前の部屋のインターホンを何度も鳴らした。

インターホンから『はい』という声が聞こえた。少年は、その声に慌てて浮いていた体を踊り場に戻した。僕はそれから何度も続けてインターホンを鳴らした。

インターホンを鳴らした部屋の中から激しい物音がして、勢いよくドアが開いた。その部屋の住人が飛び出してきた。丸坊主の頭をした恰幅のいい、少し怖そうな男性だった。

男性が階段の踊り場に立つ少年の姿を見つけ、睨むような視線を向けた。

「おい、今、インターホン鳴らしたのは、お前か？」

男性は真っ赤な顔をして怒鳴りながら階段を下りてきた。男性のサンダルの音がマンションに響いた。

「す、すいません」

少年は慌てて階段をかけ下りて行った。男性は少年を追いかけようと階段を下りかけたが、数段下りたところで足を止めた。少年が勢いよく下りていったので、追いかける

のをあきらめたようだ。

「バカガキが」

男性はそう言って舌打ちをし、踵を返し部屋へと戻って行った。

僕は男性に手を合わせて「ごめんなさい」とお詫びし、そして「ありがとうございます」と頭を下げてから、慌てて少年の後を追いかけて階段をかけ降りた。

下まで階段をかけ下りると、少年は両膝に両手をつけて息を切らし立っていた。僕が少年の後ろに立つと、少年は僕を待っていたかのようにすくっと体を起こし歩き始めた。僕はまた少年を追いかけた。

二、三分歩いたところで少し広い道路に出た。少年は赤信号で立ち止まり、左右を見ていた。少年の目の前を猛スピードで車が行き交っている。少年の様子を見てみると、ここで車に飛び込むんじゃないかと不安になった。右側から大型トラックが猛スピードで走ってくるのが見えた。

もし、少年がトラックの前に飛び出したら僕の力では少年を止められない。そう思うと体がガクガクと震えた。今の僕より人間の方が少年を助けることができる。人間なら優しく声をかけて話を聞いてあげられるし、説得もできる。強引に手を引っ張って力づくで止めることもできる。僕に出来ることは、ここで神様に祈ることだけだ。

大型トラックが近づいてくる。トラックは青信号を渡りきるつもりのように、スピードがあがっている。少年の視線は、近づいてくるトラックにじっと向けられていた。

トラックが信号の手前まできたところで、車道側の信号が黄色に変わった。トラックはブレーキを踏むことなく突っ込んできた。少年が車道に一步足を踏み出した。

「やめろ。早まるな」

僕は、そう叫んで、少年の体にしがみついた。しかし、少年に僕の声が届くはずはないし、しがみついたところで、少年の体は僕の手をすり抜けるだけだ。何の意味もない。自分の力の無さが情けない。

トラックは少年の鼻先を猛スピードで走っていった。目の前を走るトラックの風で少年の髪が揺れた。

「フゥー」

僕は体中の力が抜け、地面にへたりこんだ。冷えたアスファルトが僕の尻を冷やした。

へたりこんだまま少年を見上げると、少年は僕を見下ろしていた。少年と目が合った。ニヤリと笑ったように見えた。しかし、少年に僕の姿が見えるはずがない。でも、確かにこっちを見て笑ったような気がした。

僕は地面に腰をついたまま首を傾げ、少年の顔を見ていると、少年は、すぐに視線を外し信号を渡りはじめた。少年には僕の姿は見えてないはずだが、僕の気配くらいは感じていたのかもしれない。

少年は早足で信号を渡っていくので、僕は慌てて腰を上げ信号を渡る少年の背中を追いかけた。

少年の歩くスピードがドンドン速まっていった。少年はどこに行くつもりなんだろう。死に場所を探し続けているのかもしれない。少年から絶対に目が離せない。

しかし、もし、少年がまた死のうとした時、僕は少年を助けることができるだろうか。少年がマンションの十五階から下を見下ろしていた時、トラックが少年の前を猛スピー

ドで走り去った時、僕は何もすることができなかった。でも、僕は少年についていくしかない。

不安な気持ちのまま、少年の背中をじっと見つめながら歩き続けた。

少年が急に立ち止まった。そこで僕も立ち止まり、辺りを見渡した。驚いたことに、ここは野々神社の鳥居の前だった。無我夢中で少年の背中だけを見て歩いていたので、野々神社に戻ってきていたことに気づいてなかった。

少年は鳥居を見上げて両手を高く上げて伸びをした。

「うわーっ」と大声をあげてから両手を一気に下ろしダランとさせた。

「ハハハ、ハハハ」

今度は大きな声で空を見上げ笑いはじめた。

どうしたんだろう。少年の後ろに立ったまま、僕は少年の揺れる背中を見ていた。

少年は、ゆっくりと踵を返し、僕の方へ体を向けた。少年は口角を上げて僕の方を見て笑っていた。少年とずっと目が合っているような気がしたが、でもそんなはずはない。少年には僕の姿は見えてないはずだ。不思議に思っていると少年が口を開いた。

「習の神さん、テスト、終わっちゃいましたね。これで協会から追放されるかもしれませんね」

少年はそう言って、細い目を光らせた。口元は右の口角だけを上げて笑っている。

「えっ？」

どういうことかわからず、少年の顔をじっと見ていた。

「今の状況がまだわかりませんか」

僕は首を傾げるしかなかった。

「習の神さん、あなたは南の神に嵌められたんですよ」

少年は一歩二歩と僕に近づいてきた。

「ど、どういうことだ？」

「私はね、南の神に頼まれたんですよ。あなたをテストに行かせなくするために一芝居打ってくれてね」

「あ、あんたは一体誰なんだ」

僕は少年を睨みつけた。

「ハハハ、ハハハ、私が誰か知りたいですか？」

「あ、当たり前だ」

僕は少年に向かって怒鳴った。そして詰めよって行った。

「わしの仲間だよ」

拝殿の奥から声が出た。真っ暗な拝殿に視線を向けると、奥の暗闇から黒い影が見えた。黒い影が月明かりのあたるところまで来て、それが南の神だとわかった。南の神は拝殿からノソノソと歩いてこっちに近づいてきた。

「南の神、うまくいきましたよ」

少年が南の神に向かって言った。少年の方に視線を向けると少年は親指を立て笑みを浮かべていた。

「ごくろうさん。あんたの芝居、なかなかのもんだったな。感心したよ」

やられた。僕がテストを受けられないように南の神はこの少年を使って僕を騙した

んだ。

「南の神、どういうことですか？」

「自殺しそうな少年が現れたら、あんたはテストをとるのか、自殺しそうな少年をとるのか、試してみたんだ。なかなか楽しかったな」

南の神がこっちに向かってゆっくりとした足取りで歩きながら言った。

「自分を騙したんですか？」

南の神はニコニコと笑っていた。そして少年の隣まできたところで立ち止まった。少年と目を合わせたあと、少年の肩をポンポンと叩いた。

「騙した？ まっ、そういうことになるな。悪く思うな」

「悪く思うなって。バカにしないでください。このせいで、自分はテストに行けなかったじゃないですか。どうしてくれるんですか。すぐに南の神から野々神に説明して、テストをやり直せるように言ってくださいよ」

「あんなくだらんテストなんか、いいじゃねえか」

「よくありません。自分の三十年の苦勞が水の泡ですよ、あーっ、どうしよう」

僕は頭を抱えた。

「ご苦勞さん、ありがとうな」

南の神が少年に向かって言った。

「いえ、お役に立てて光榮です」

南の神は、僕が落ち込んでることなど気にする様子もなく、少年と楽しく話していた。

「南の神、自分を騙したそいつは誰なんですか？」

僕は少年を指さした。

「わしの仲間だよ。こいつは、いつもわしを助けてくれるんだ」

南の神が少年の方に視線をやった。少年は南の神に向かって一礼した。

「なんで、こんなことして自分がテストを受ける邪魔をしたんですか？」

野々神社に僕の声が響いた。

「あんたに神様協会に入ってほしくないからに決まってるだろ」

「自分が協会に入ると、あなたが追い出されるかもしれないからですか？」

「ハハハ、面白いこと言うねー。どちらかと言うと、わしは協会から追い出されたいんだけどな。けど、なかなか追い出してくれないんだよ」

南の神は首の後ろを搔きながら言った。

「強がって嘘つかないでください。自分がテストに合格して正式に協会所属の神様になったら、あなたは自分が追い出されると思って、邪魔をしたんじゃないんですか」

「君は南の神のことを誤解してるよ」

少年が口を挟んできた。

「うるさいな。あなたは一体何者なんだよ？ 南の神とはどういう関係なんだ」

「南の神は、私の師匠です。神様のなかで私が一番尊敬する方です」

「はあ、南の神を尊敬するなんてバカじゃねえの」

「師匠だとか尊敬する方、なんて言わんでくれ。照れるじゃねえか」

南の神は嬉しそうに顔をくしゃくしゃにして、少年の肩に手を置いた。

「南の神、一体こいつは何者なんですか？」

「こいつは、協会から放り出されたフリーの神様だ。カリスマと呼ばれている神様の一人だ。こいつの神の力は協会に所属する神様の力の比じゃないぞ。すごい力を持っている。だから人間に化けてあんたを騙すことも簡単に出来たわけだ」

「えっ、こ、こいつがカリスマと呼ばれている神様ですか？」

誰も見たことがないという、カリスマと呼ばれる神様がこんなやつなのか。いや、嘘だ。嘘に決まっている。

「カリスマなんて師匠、私の方こそ照れてしまいます。今の私があるのは師匠のおかげです」

なんのことかさっぱりわからなかった。

「そんなことより僕が神様協会から追放されることになれば責任とってくださいよ。絶対に協会長に頭下げに行ってください」

「協会長に頭を下げる気にはなれんな」

南の神が額の辺りを搔いた。

「じゃあ、自分はこの先どうしたらいいんですか？ あんたらのせいで神様として生きていけなくなるかもしれないですよ」

僕は泣き出しそうだった。

「習の神、大丈夫です。あなたはこれからフリーの神様となって、いずれはカリスマと呼ばれる神様になれます」

15

習の神が神様協会のテストを受けなかったことで、管理責任を問われた私は始末書を持って協会長をたずねた。

協会長室のドアの前に立ち、深呼吸してからドアをノックした。

中から「はい」なのか「おう」なのか「あー」なのか区別がつかない低い不機嫌そうな声が聞こえた。

体中のありとあらゆる所から汗が吹き出た。このドアを開ける勇気がない。

私がドアを開けることを躊躇していると、中からまた区別のつかない声が、さっきの二倍くらいの大ききで聞こえてきた。協会長の不機嫌さが増したようだ。

これ以上、待たせればもっと不機嫌になる。私は意を決して、ドアノブに手をかけた。ドアノブが私の手汗でべっとりと濡れた。

そこで一度息を整えてから、ドアノブを回しゆっくりとドアを開けた。

「失礼いたします」

体を小さくして、ドアの隙間から中を覗いた。

協会長が椅子に座っているのが見えた。苦虫を噛んだように顔を歪めていたので、そのままドアを閉めて逃げ出したくなった。

「中に入るならさっさと入れ」

「は、はい」慌てて中に足を踏み入れた。

「なんだ、お前か」

協会長はそう言って、ギロリとした目で私を睨んだ。その後、「フン」と鼻を鳴らし、宙に視線を向けた。私の話など聞きたくないといった態度に私の体は震えた。

「習の神がテストを欠席した件では大変ご迷惑をおかけいたしました」

協会長の座る机の前に立って深々と頭を下げた。

「その件で詫びに来たのか」

「はい、申し訳ございませんでした」

「お前のところは、本当によくトラブルを起こすな」

協会長はもう一度私を睨みつけてそう言った。

「申し訳ございません」

協会長と目を合わすことが出来ず頭を下げたままだ。

協会長はそれから言葉を発しなかった。私は頭を下げたまま、協会長の次の言葉を待ち続けた。

あまりにも沈黙が続くので、恐る恐る顔を上げると、協会長はハ虫類のような目で、じっと私を睨みつけていた。

「あ、あの……、この度は私の監督不行き届きで協会長には多大なご迷惑をおかけいたしました。本日は始末書を持って参りました」

始末書の入った封筒を協会長の前に両手で差し出した。

「始末書ねえ」

協会長は顔を上げ、面倒臭そうに封筒を片手で受け取った。私を一瞥してから、封筒のなかを覗き、フーッと息を吹き込んでから始末書を引っ張り出した。む

「本当に申し訳ございませんでした」

「バカの一つ覚えみたいに、何度も謝るな。謝れば許してもらえると思ってるから、何度も失敗をやらかすんだ」

「は、はい、申し訳……」

言いかけた時にギロリと睨まれた。

協会長は封筒から引っ張り出した始末書を広げて目を通していった。小さな黒目だけが行ったり来たりして、最後にまた「フン」と鼻を鳴らして、始末書を机の上に投げた。

私は言葉を発することをせずに、もう一度、深々と頭を下げた。

「まあ、いい。お前もこれまでよく頑張ってくれていたし、今回はこれで許してやろう。今後はしっかりと部下を教育してくれ」

「お、お許しいただけるのですか」

もっと怒られると思っていたが、意外にあっさりと許してくれたことに驚いた。

「まあ、終わったことだ。お前だけの責任でもないしな」

「温情あるお言葉に感謝いたします。今後も協会のために労を惜しまず邁進する所存でございます」

「わかった。ところで……」

協会長はそこまで言って、言葉を切った。

「あ、はい」

協会長の次の言葉を恐る恐る待った。

協会長は笑みを浮かべているが、目は笑っていない。

「今の野々神社は、お前と役立たずの南の神だけになってしまったわけだな」

「あ、はい。そ、そうです」

「それなら、今、お前も大変だろう？」

「そ、そうですね、忙しいのは確かです」

「神様の補充はいらないのか？」

「えっ」

協会長の思いもかけない言葉に声をあげてしまった。出来れば神様の補充をお願いしたいところだが、自分の監督不行き届きのせいで、北の神と習の神がいなくなったわけだから、補充をお願いする立場ではないと思っていた。

それが協会長の方から神様の補充の話を持ちかけてくれた。これはありがたい。ここで補充をお願いしてみようかと思った。

いや、しかし、補充をお願いしますと言った途端に協会長の機嫌が悪くなることも考えられる。

「野々神社は神様が足りないだろう。困っているなら遠慮なく言え」

協会長が念押しして言ってきた。今がお願いするチャンスかもしれない。今、協会長に神様の補充をお願いした方がいいのだろうか。お願いすると、甘えるなどか言い出しそうな気もするし、お願いしないと、わしの厚意を無駄にするのかと怒り出しそうな気もする。どうしようかと悩んだ挙げ句、素直にお願いすることにした。

「はい、それでしたら本当に勝手を言って申し訳ないのですが、野々神社に神様の補充をお願いいたします」

私は背筋を伸ばしてから深々と頭を下げた。

その後、協会長の表情が、にわかには険しくなった。

「お前の管理不行き届きでいなくなった神様をわしに補充しろっていうのか？ お前も偉くなったもんだな」

「い、いえ、補充しろだなんて、そんな滅相もございません。私のせいでこうなってしまったわけですから、私はこれまでの二倍も三倍も働くつもりでいます」

「二倍も、三倍も働けるわけがないだろ。いや、二倍くらいならいけるか。ハハハ」

協会長は冗談を言っているのか、嫌味で言っているのか、機嫌がいいのか、悪いのか、笑ってくれるのか、それとも怒り出してしまうのか、全くわからなかった。

「無理しなくてもいい。南の神は相変わらずやる気無しだろうから、確かに大変だとは思。どうせ南の神は使いもんにはならんだろ？」

自分の部下の南の神のことを悪く言うと、私の責任が問われそう。また協会長の機

嫌が悪くなるかもしれない。部下を庇う上司のほうが協会長の受けがよいかもしれない。

「南の神は使い物にならないわけではありません。南の神は本当は力のある神様です。それを私の指導不足で、力を発揮させることができているので、責任を感じております」

「なに、南の神に力があるだと」

協会長の眉間に深い皺が入り、目がハ虫類の目が変わってしまった。

「えっ、いや、あの、み、南の神が力を出せないのが私の責任だと反省しているのですが……」

「お前は本当に南の神に力があると思っているのか？」

ドスのきいた地獄から響くような声だった。

「えっと、南の神に力があるというか、私の指導不足が原因かと思っております」

「きれいごとは聞きたくない。南の神に力があるかどうかを訊いてるんだ。さっさと答えろ」

「いえ、あの、その」

南の神に力があると言うと協会長の機嫌は悪くなりそうだった。かと言って部下を無能扱いしても機嫌が悪くなるかもしれない。

「どっちだ。早くこたえろ」

「あっ、はい。南の神にはもう少し頑張してほしいのですが、なかなか私の力が及ばなくて難しいのが現状です」

「南の神は力がない、そうはっきり言え」

協会長が顎を突きだした。

「あ、はい。そ、そうですね。私にも責任はあるかと思いますが、南の神にはもう少し頑張ってもらわないといけません」

「お前でなくても誰が上司になっても南の神は無理なんだ。あいつに力がないんだから。そうだろ、はっきりとそう言え」

協会長は苛ついた様子だった。ここは協会長に同意するほうが良さそうだ。

「はい、そうですね。南の神は力がない上にやる気もありません。そのため野々神社は大変な状況です」

「そうだろ。最初からそう言え。南の神が力があるなんて言うから、お前の頭がおかしくなったのかと思った」

「南の神は大先輩なもので、少し遠慮してしまいました」

「先輩も後輩もない。力のない奴を庇うのは、組織を弱くしてしまう。ダメな奴はダメなんだ」

協会長は南の神を嫌っているようだ。それも異常なほどに。それはなぜなんだろうかと思った。

「そう言えば、南の神は協会長と同期だと聞きましたが、それは本当ですか？」

「そうだ。わしとあいつは、若い頃に同じ神社で働いていた。その当時は、まだあいつも頑張ってたけどな。頑張っても結果が出せなくて、だんだん気持ちが失せてしまったんだろうな。結果を出し続けていたわしを近くで見ていたから、余計に自信を無くしたのかもしれない。わしの成績が優秀だったから南の神がダメになったんだとしたら、今の南の神のやる気の無さは、わしにも責任があるかもしれないな」

「協会長のような優秀な方が近くにいたのでしたら、私なら協会長からいろいろと学ばせてもらいますが、当時の南の神はそうしたことも無かったのでしょうか」

「無かったなあ。あいつは当時からひねくれていたからな。わしの実力に嫉妬して、わしから教を乞うのも嫌だったんだろ」

「素晴らしいお手本である協会長が間近にいたのにもったいないですね。向上心が感じられません」

「南の神はそういう奴だよ。それが唯一の部下になってしまったんだから、お前の大変さはわかる。同情するよ」

「ありがとうございます」

「優秀な神様を補充してやらないといけないな」

協会長は補充する神様の候補を頭に浮かべているのか、宙に視線を向けていた。

「よろしく願いいたします」

「そうだな、あいつはどうだ」

協会長の頭に神様の候補が浮かんだようだ。

「だ、誰でしょうか？」

「集会で生意気なことをほざいたあいつだ」

「えっ、もしかして野々神社にいた北の神でしょうか」

「そうだ。あの時に人間界に送る処分にしたが、神様に戻るチャンスは残しておいてやったから、予定より早く戻してやってもいいだろう」

「人間界で百八年過ごす予定でしたが、そんなに短縮してもよろしいのでしょうか」

「まあいいだろう。あいつはクセはあるが優秀な神様であることは間違いない。野々神社の経験者で君ともいっしょにやっていた仲だし問題ないだろ。人間界に行ってから今で何年になるんだ？」

「北の神は人間になってちょうど三十年になります」

「三十年か。長すぎず、短すぎず、ちょうどいいんじゃないか。あいつもそろそろ集会での発言については反省して成長している頃だろう」

「協会長は北の神の集会での無礼をお許しいただけるのですか」

「もちろんだ。わしもそんな心の狭い神様ではない。わしはあいつが憎くて人間界に送ったわけではない。彼に成長してもらうために送ったんだ。あいつもこれでわしに感謝するだろうし、もともと実力のある神様だ。戻ってきてから、わしの力になってくれれば、わしとしても助かるしな。君からすぐに彼に連絡してやれ」

「わ、わかりました。すぐに連絡してみます。本当にありがとうございます。北の神も三十年で神様に戻れるとは思っていないでしょうから、すごく喜ぶと思います。協会長のご厚意に心から感謝いたします」

私は北の神が戻ってこれると聞いて、心が晴れやかになった。習の神のことは頭から飛んでしまった。

北の神とは一緒にやってきたので気心は知れているし、全く知らない神様が来るより絶対にやりやすい。

それに何と言っても北の神は実力のある優秀な神様だ。正義感が強くまっすぐなところがあるので、集会の場で協会長に生意気な口を叩いてしまったが、本当はそんな反抗

的な神様ではない。真面目で素直、そして正直な神様だ。

野々神社でいっしょにやっていた頃、私に対して、北の神が反抗的な態度をとることなど一度もなかった。あの集会の時は魔が差しただけだ。

北の神が野々神社に戻ってきてくれれば、習の神の穴は十分に埋まる。

北の神も思ったより早く神様に戻れるとなると喜ぶだろう。協会長の言っていた通り、協会長に感謝し、協会長とのわだかまりもなくなるはずだ。私は心を弾ませ北の神の元へと急いだ。

北の神に神様に戻れることを告げて、返ってきた言葉は、私にとって意外なものだった。そしてまた頭を悩ませるものだった。

『ほ、ほんとうですか。こんなに早く神様に戻してもらえるのですか。協会長と野々神に感謝いたします。このお礼は協会に戻ってから精一杯働くことで恩返しします』といった言葉が返ってくるものと信じていた。

しかし、返ってきた言葉は、『有難いことですが、俺は人間の寿命を全うしてから神様に戻りたいと思っています。なので、もうしばらく人間のままでいさせてください』といった内容だった。

何とか北の神の気持ちを変えないと、協会長はまた怒り出し、北の神の神様の記憶と神の力を奪ってしまい、完全に人間にされてしまうかもしれない。北の神にすぐに神様に戻るよう説得しなければならない。

「今すぐ神様に戻ってこい。今、君の力が必要なんだ。それに長い期間人間界にいて、神様に戻れないのは、君も辛いだろう」

「いえ、全く辛くはありません。人間としての寿命がある限りそれを全うします。俺はこれから人間界でやるのがたくさんあります。育ててくれた両親に恩返ししたいですし、妻の優花と生まれてくる子供のために人間として生きていきます。それに今の俺は人間界で医者として多くの患者をかかえています。その患者たちのために、まだまだ人間界でやる必要があります」

北の神は使命感に燃えるタイプだ。人間界での自分の使命に燃えているのだろう。

何とか今の気持ちを変えさせて神様に戻ってからの使命感を持つように説得しなければならない。そのように話をもって行って北の神の心をくすぐってみよう。

「今、野々神社がピンチなんだ。人間の幸福度が落ちている。だから、君には、人間界の自分の家族だけでなく、野々神社に参拝する多くの人間を幸福にしてほしい。君にはそれだけの実力があるし、それが君の使命なんだ」

「今はダメです。神様ではなく、人間として人間を幸福にしたいのです」

「なぜだ？　なぜ人間にこだわる？」

「俺は人間になってわかったことがあります。それは人間の力の方が神様の力より人間を幸福にする力が強いということです。人間は損得なしに人間を幸福にしようとしています。俺は人間が人間を幸福にする、そんな力をもっと経験したいんです」

「協会長のご厚意を無駄にするつもりなのか」

「申し訳ありません。人間の寿命を全うしてから、神様に戻って、今のこの経験を生かし

て協会のために頑張りますと協会長にはお伝えください」

北の神が人間として生まれた日からもうすぐ三十年になる。協会長は三十年で神様に戻してくれると言ってくれているのに、北の神はなぜ断るんだ。このチャンスを棒に振るつもりなのか。

北の神をもっと説得して気持ちを変えたいが、今のまま神様に戻しても北の神は納得しないだろう。北の神は頑固な奴だとは思っていたが、ここまでとは思わなかった。これ以上、何を言っても無駄なような気がした。

北の神の表情を見ていると、人間として充実した日々を過ごしているように見えた。それをこっちの都合で切ってしまうのは、かわいそうだとも思った。

北の神の人間としての寿命を全うさせてやりたい。協会長に何と報告すればいいのかと、私は頭を抱えた。

北の神の顔をじっと見た。充実したいきいきした表情を見て、協会長に正直に話すしかないと腹を決めた。

協会長のことだから、北の神の言い分を聞いてくれないかもしれない。もし、協会長が怒り出せば、北の神は二度と神様に戻れなくなるかもしれない。しかし、北の神を説得することはやめた。

「あいつは人間の寿命を全うすると言ってるのか」

「はい」

協会長を前にして私の体は震えた。

「相変わらずわがままで馬鹿な奴だな」

協会長の眉間に深い皺が入った。

「申し訳ありません」

どうしていつも頭を下げてばかりなのかと悲しくなった。

「まあ、いい。言わせておけ。こっちで何とかする。あいつに勝手にはさせんよ」

協会長は右の頬を歪めてニヤリと笑った。

協会長になにかいい考えがあるのだろうか。しかし、それは私たちにとっていいことではない気がする。どうするつもりなのか、考えるだけで恐ろしくなった。

「どうなさるおつもりでしょうか？」

恐る恐る訊いてみた。

「お前は何も考えなくていい。しばらくは黙っておとなしく待ってればいい。また、連絡する。今日はもう帰れ」

協会長は私を追い出すように右手を払った。私が考えても仕方がない。自分が悪いわけではない。自分は協会のため、北の神のために一生懸命にやった。自分にそう言い聞かせて踵を返し協会長室を後にした。野々神社へ帰る足取りは重かった。最近はずっとこんな感じだと、ため息を吐いた。

『トン、トン』とドアをノックする乾いた音が、わしの鼓膜を叩いた。背筋が勝手にピンと伸びた。さすがのわしも緊張していた。

ドアの向こうに立つ相手は油断できない。普通の神様とはわけが違う。一癖も二癖もある神様だ。この神様に依頼すべきではなかったのではと、ここにきて弱気になっていた。

三十分前に電話があり、今から協会長室へ向かうと言ってきた。ここに招き入れることは避けたかったのだが、さすがのわしも相手の強引な押しに屈してしまった。

わしは死神にあることを依頼した。その件で打ち合わせがしたいと言われると、無下に断ることが出来なかった。こっちからそっちの事務所に出向くと言ったが、ゆっくり話す場所がないと言ってあっさりと断られた。

わしは人間にした北の神を神様に戻すため、北の神の百八歳までである人間としての寿命を三十歳で切るように死神に依頼をしたのだ。

わしの今回の依頼は奴にとっても異例中の異例で、すごく気を使う案件で神経をすり減らす。誰にも気づかれず内密にすすめなければならないので、わしと二人きりで打ち合わせがしたいと、ねちねちとしつこく言ってきた。

「協会長、急にお時間をとっていただきありがとうございます」

ノックの音と同時にドアが開き、死神が協会長室に入ってきた。右手でとった帽子を胸にあて、慇懃に頭を下げている。

「急にどうした？」

わしは椅子から立ち上がり、左手で死神にソファをすすめながら言った。

「今回のあなたからの依頼について最終の確認をとりたかったんですよ」

死神はそう言いながらソファにどっしりと腰をおろした。

「あんたがここに来なくても、こっちからあんたの所に出向いたんだがな」

わしはそう言いながら死神の座るソファの前に腰をおろした。

「いやいや、うちの事務所なんて汚くて狭いうえにうるさいですし、神様協会のトップが来るようなところではありませんよ。それに、一度、神様の協会長室がどんなところか見たかったもんですからね。なかなかこんな機会は無いですから。神様協会のトップのあなたと私がタッグを組むことなんて、この先、いつあるかわかりませんからね」

死神はソファに体をあずけ、協会長室をぐるりと見渡していた。飾ってあるわしのコレクションの絵画や彫刻を見ているようだった。

「やっぱりすごいですね。協会長室だけあって高価なものばかりじゃないですか。協会長、だいぶ、儲けてますね」

死神がわしに向かってニヤニヤと親指と人差し指で丸を作って見せた。
「あんたには、あまりここには来てほしくないんだがな。神様協会のトップがあんと
会っていたなんてことが世間に広まると、あらぬ噂をたてられる。噂好きな馬鹿な奴ら
が勝手に尾ひれをつけて好き勝手に広める。そうなるとうるさいことになるかも知れんか
らな」

「確かにそういう噂好きな輩が出てくるかもしれません。しかし、今日ここに来たのは
今回の依頼についての大切な最終の確認なんです。急遽人間の寿命を変えるわけです。
軽い気持ちではできませんので、最終確認だけは、ここでしっかりとやりたかったんで
す。あなたが私に依頼した計画が本気なのかを確認するためには、あなたに直接会って、
あなたの目を見て、そしてあなたが覚悟を決められるであろう、この場所でやりたかっ
たんです」

死神はそう言って右の口角だけを上げた。

「ほおー、あんたでもそんなことを考えるんだな。人間の寿命を変えることなんて、もっ
と軽い気持ちでやるものかと思ってたよ」

「人間一人の寿命を変えてしまうわけですから、それも神様協会のトップからの依頼で
すよ。そりゃあ、私も慎重になりますよ。後で、違った、知らなかった、なんて言われた
ら、こっちとしても大変なことですからね。この仕事を引き受けた私もそれなりの覚悟
を決めてるわけですから、協会長もそこはお願いしますよ」

「わしだって覚悟を決めてるよ」

「そうですか、じゃあ、そんなちんけな噂を気にすることはないでしょう」

「変な噂が広まると進めることも進められなくなるんだ。だからさっさと終わらせてくれ
ないか」

「協会長もいろいろと大変なんですね。協会のトップなんですから、怖いものなんてな
いと思ってたんですがね」

死神は薄笑いを浮かべ、深海のような目でじっと見つめてきた。わしは目を合わせる
のが苦しくなり、目をそらした。

「つべこべ言わず、さっさとしてくれ」

「わかりましたよ。では、はじめますかね」

死神は鞆のなかから、厚さが五センチくらいある資料を取り出し、テーブルの上にド
ンと置いた。置いた瞬間にテーブルが揺れた。

わしはその資料に視線を落としてから、すぐに顔を上げ、死神の顔を見た。

「これはなんだ」

死神の感情の読めない糸のように細い目は視点がどこに向いているのかがわからない。
わしの方を見ているようにも見えるが、全く別の場所を見ているようにも見える。

「これは、今回あなたから依頼いただいた件の計画書になります」

「こんな分厚いのか？」

「そうです。これでも、あなたがわかりやすいようにと、だいぶまとめて枚数は減らして
あるんですよ」

「まとめて、これか」

「死ぬ時間を正確にするために、綿密に計画を練らないといけませんから、コンマ一秒の

狂いも許されませんからね」

「人間としての北の神が死んで、神様に戻ってくれば、死ぬ時間なんてどうでもいいんだがな」

「あなたは何もわかってませんね。あなたの依頼がどれだけ大変なことなのか、全くわかっていません」

「大変な依頼だということくらいはわかっどる」

「そうですか、わかりました。とりあえず、その計画書を開いてみて下さい。今からの説明を聞けば、あなたにも、この計画書の厚さの意味がわかってもらえるはずですよ」

死神に言われた通り、わしは『北野秀太、寿命短縮計画』と書いてある計画書の表紙をめくった。

さすがのわしもページをめくる手が震えてうまくページを開けなかった。その様子を見て、死神が「フン」と鼻を鳴らした。

こいつになめられてはいけないと、平静を装おうとしたが、腕の筋肉がいうことをきかない。死神を見ると、能面のような表情をしていたが、口角だけは、わしをバカにしたように上がっていた。

わしも口角を上げ「フン」と鼻を鳴らしてやった。

「まず今回の計画を簡単に説明いたします。一ページ目です。早く開いて下さい」

「ああ、わかっどる」

震える手を堪えながら、一ページ目を開いた。

「まず、今回のターゲットは人間になった北の神、人間の本名が北野秀太です。間違いのないですね」

死神が一ページの最初に書いてある文字を読み上げてから、わしに視線を向けた。

「ああ、間違いはない」

死神に顔を向けず、計画書に視線を落としたまま答えた。

「ここを間違えると大変なことになりますからね」

「大丈夫だ。間違いはない」

「では、そこ下の欄に協会長のサインをお願いします」

「ここか？」

「そうです。お願いします」

わしは内ポケットからペンを取り出し、サインをした。この時もまだ手の震えはおさまらなかった。

ミミズのはったようなサインを見て、死神はまた、「フン」と鼻を鳴らした。

「では、次のページをめくって下さい」

「ああ」

わしは次のページをめくった。

「このページには、今回の計画の大まかな流れが書いてあります。ここを見ただければ今回の計画のおおよそのことはわかるとおもいます」

「これだな」

今回の計画が時系列で書いてあった。

「まず、北野秀太の三十歳の誕生日に寿命を切るように設定しています。その日の帰宅途

中に、北野秀太は交通事故で即死するという計画です」

「交通事故か」

「はい。事故は北野秀太がいつも通勤の時に通るR交差点で起きるように設定しました。この交差点は交通量が多く、これまでも頻繁に事故が起きている交差点です。事故を起こす時間、北野秀太の死亡時刻ですが、午後七時四十四分四十四秒にしてあります。事故原因は居眠り運転のトラック運転手の信号無視によるものです」

「そ、そうか。北の神は交通事故で即死するのか」

わしは生唾を呑み込んだ。

「はい、正確には北の神ではなく北野秀太ですが、即死します。協会長も即死の方がいいでしょう？ その方が結果がすっきり出ますから、わかりやすい」

死神は凍った視線でわしの顔を覗きこんできた。

「う、まっ、そ、そうだな。よくわからんが、即死の方がいいのかな」

死神の顔を見ることが出来ず、計画書に視線を落としたまま言った。額から溢れ出る汗が計画書にポトリと落ちた。

「やっぱり協会長もそう思いますか。即死が一番いいですよ。即死でないと、その後、人間の力によって命を助ける可能性がありますからね。人間の医療のレベルはドンドン上がっていますので、最近、我々が病気や事故で死亡する計画を立てていても、人間が治療して命を助けるケースが増えています。我々の力も人間の医療の力に敵わなくなってきました。その点、即死の場合は、さすがの人間もあきらめるしかないですからね」

「なるほど、それなら、即死で頼むかな」

わしが死神に向けて言うと、死神はわしの顔を見てニヤリと笑った。

「協会長、次のページからは計画の内容について、細かく記載してあります。この中の一つでも狂うと失敗してしまいます。私が徹夜して綿密に計算したものです。どうぞ、お目を通しておいてください」

わしは汗で湿った手で計画書のページをめくり、目を通していった。

「思ったよりボリュームがあるし細かい内容なんだな」

「綿密に計画してますからね。最初にお話ししたように、コンマ一秒でも狂えば計画通りにいきませんから。北野秀太が運転する車と信号無視するトラックのスピードや重量まで計算しておく必要がありますし、ぶつかる時の車の角度なんかも路面の状態から計算しています。少しでもずれると協会長のお望みの即死になりませんからね」

「別に即死を望んだわけではないがな」

「でも、北の神を三十歳で殺したいわけですよ。それでしたら即死を望んでるのと同じじゃありませんか。だから私は苦勞して、この計画書を作ったんですよ」

死神がニヤニヤと笑った。

「わかった。苦勞をかけたな。ありがとうと言っておく」

「死神の世界でも、車の事故で即死させられる力のある死神は、ほんの一握りです。その時の天候や風速や風向きなどいろんな要素を計算しないとイケませんからね。ここがいるんですよ」

死神はそう言ってから、自分の頭に人差し指を向けた。

「なるほど、死神の世界でも力の差があるわけだ」

「そういうことです。しかし、ここまで綿密に計算しても、現場では微妙なズレが生じてきます。それを微調整を繰り返しながらやるわけで、当日、私はずっと現場に張りついていなければならないんですよ。気の抜けない一日になります」

「そ、そうか、じゃあ、よろしく頼む」

わしは死神の目を見ずに頭だけ下げておいた。

「任せてください。とりあえず、私の作った自慢の計画書の全てにもう一度しっかりと目を通しておいてください。何か他に要望がございましたら、今ならまだ変更も可能ですから遠慮なく仰ってください」

死神が細い目をカッと開き、キュッと口角を上げた。

「そうさせてもらおう」

計画書の最初のページからパラパラとめくってみた。この計画書のボリュームを見て死神に依頼した内容の重みを感じた。

死神の計画では、居眠り運転のトラックが信号を無視してR交差点に突っ込んでくる。トラックは青信号で交差点に入ってきた北の神の運転する車と衝突し、人間になっている北の神、北野秀太はトラックに押し潰され即死するという計画だった。

居眠り運転するトラックの運転手の名前は高木良治、五十三歳でトラックの運転歴は三十年のベテラン。事故は高木がその日の配達を全て終わらせて会社へ戻る途中に起こる。

事故の前日の高木の睡眠時間は三時間程度で、午後七時三十三分に睡魔に襲われる。睡魔と闘いながらも、もう少しで到着するからと無理してトラックの運転を続けるが、R交差点に入る六十二メートル手前で、高木は睡魔に負けて意識を失う。その時のトラックの时速は七十二キロとスピードが出ている。高木が意識を失ったまま赤信号のR交差点に突っこんでくる。同時に北野秀太の運転する車がR交差点へ入ってくる。北野秀太の反対車線を走る車は、左側の見通しがきいているので、信号無視して交差点に入ってくる高木のトラックが視界に入り急ブレーキを踏む。北野秀太側からは、ビルの死角になり高木のトラックは見えない。北野秀太は青信号なので高木のトラックに気付かずにR交差点に入っていく。北野秀太の反対車線を走る車の急ブレーキの音が響く。その音で高木は目を覚まし顔を上げた時には、北野秀太が運転する車が目の前まできている。高木は慌ててハンドルを右に切る。北野秀太もトラックが突っこんでくるのに気付きハンドルを左に切るが間に合わない。トラックの助手席側のバンパーの角の部分が、北野秀太の運転席側にぶつかり北野秀太の全身を押し潰すようにくい込んでいく。北野秀太は内臓を圧迫され即死する。

死神の計画書を最後まで読んで背筋が冷たくなった。顔を上げ死神に視線を向けた。死神は顎を上げ自信ありげな表情をして笑っていた。

「どうです。なかなかおもしろい計画でしょう」

「おもしろいかどうかはわからんが、この計画で北の神の人間としての寿命が切れて神様に戻れるなら、わしはそれでいい。これは、わしのためじゃなく、野々神と北の神のためにやることだ」

死神と目を合わさず下を向いたままそう言った。

「大丈夫ですよ。計画は完璧ですし、当日は私が現場に張りついてチェックしながらす

めますので間違いなくうまくいきます。では、最後のページにも協会長の承認のサインをお願いいたします」

「わ、わかった」

計画書にサインをした。書く手がまた震えた。サインを書き終えて死神の前に計画書を滑らせた。

「ありがとうございます。これで私も心置きなく今回の計画を実行することができます」

死神は計画書を手にとり、わしのサインを確認してから鞆に入れた。

「あとは、よろしく頼む」

「この計画書のコピーを後日お送りします」

「いや、いらない。あまりこういう証拠になるものは残しておかない方がいい。あんたも終わり次第、計画書は処分してくれ」

「わかりました。報酬をいただいた時点で私も計画書は処分しますし、私の出来のいいここからも消しておきます」

死神は人差し指で自分の頭をさした。

「ああ、そうしてくれ」

「では、これで失礼いたします」

死神が立ち上がり慇懃に頭を下げた。

わしも立ち上がり、死神をドアまで見送った。

死神は「グッドラック」と言って握手を求めてきた。わしは手汗をズボンで拭いてから右手を出した。

死神を見送ってから、椅子にへたりこんだ。今ごろになって死神に依頼したことが恐ろしくなった。

もし、今回の件が外に漏れたら、わしは神様全員からバッシングをくらうだろう。漏れることはないと思うが、念のため、ここは替え玉を作っておくべきだ。

今回の件は、元はといえば、野々神の監督不行きが原因だ。本来なら、あいつがやらなければならないことを、わしが代わりにやってあげたのだ。万一の時は野々神に責任をとってもらうことにしよう。

「すぐに協会長室に來い」

昨日の日誌に目を通してし、一服でもしようかと思った時に電話が鳴った。電話に出た途端に協会長の声が耳をつんざいた。

電話の声からして、少しでも待たせたら、厄介だと思い慌てて準備をし、今、協会長室のドアの前に立っている。息をととのえ、なぜ、急に呼び出されたのかを考えた。

ここに到着するまで、あれこれ考え続けたが、結局、北の神の件以外に思い浮かぶものはなかった。

たぶん、北の神が人間の寿命を全うするまで神様には戻らないといった件で、協会長の考えを私に伝えるつもりなんだろう。

私と北の神になんらかの処分をするつもりかもしれない。北の神は神様の記憶と神の力を取られ、そのまま人間にされてしまうかもしれない。私はどうなるのか。追放されるかもしれないと思うと鉛を飲み込んだような重い気分になった。電話での協会長の激しい声が、今でも耳に響いている。

あの声から想像できることは恐ろしい。あれこれ考えても結果は変わらない。もう何も考えないでおこう。覚悟を決めて汗を握る拳でドアをノックした。ノックの音までが震えていた。

「どうぞ」

協会長の声の中から聞こえた。電話の声とは違い、比較的軽く機嫌の良さそうな声だった。しかし、油断は出来ない。なんと言っても相手は協会長なのだ。

深呼吸し気を引き締めて、ゆっくりとドアを開け、中を覗いた。協会長はソファに座ったまま腕を組み、目を閉じていた。眉間に深い皺が二本走っているのが、この位置からでもわかる。

「お待たせして申し訳ございません」

中に入り直立不動でそう言った。口の中がカラカラに乾いていた。

協会長はしばらく、目を閉じたまま大仏のように動かず、言葉を発しなかった。私はどうしていいかわからず、そのまま立っているしかなかった。

微動だにしない協会長をしばらく見つめていると、ハ虫類が冬眠からさめた時のように、ギョロっと目を開けた。小さい黒目を左右に動かしてから、私に焦点を合わせた。

「そこへ座れ」

協会長がソファを顎でさした。

「あっ、はい、失礼いたします」

私は、ソファの端に腰をおろしたが、尻が落ち着かなかった。協会長は腕を組んだまま、また目を閉じた。

「呼ばれた理由はわかるか？」

協会長は目を閉じたまま言った。

「北の神の件でございましょうか」

「そうだ」

協会長は間髪いれずに言った。

「申し訳ございません」

私はソファからおり、床に正座し額を床に押しつけた。

「奴は、神様には戻りたくないと云ってるんだな」

「いえ、戻りたくないというか、今すぐには、戻れないと云っております」

「そんなことは、わしからすれば同じことだ」

「私の教育不足のせいで申し訳ございません」

「まあ、いい。それより、お前にいい話がある」

「な、なんでしょう？」

いい話といっても、聞くのが恐かった。とんでもないことを言ってくるのではないか。

「まあ、そんなとこに座らず、ソファに座れ。話しづらい」

「は、はい」

私は立ち上がり、ズボンの汚れをはたいてから、またソファの端に腰を落とした。

「お前は、北の神が野々神社に戻ってくるのを望んでいるんだな」

「はい。確かに戻ってきてくれれば、ありがたいとは思っていました」

「だが、北の神は、すぐに戻ろうとはしなかったわけだ」

「そ、そうです。申し訳ございません」

「そこでだ」

協会長が私に向けて人差し指を立てた。ギョロリとした目をこっちに向け、口元を綻ばせた。

「は、はい」

「お前の為に、北の神がすぐに野々神社に戻れるように準備を整えておいた」

「そ、そうなんですか」

「お前の為に、北の神の人間としての寿命を三十年にするように計画をすすめておいた」

『お前の為に』を強調するのが、不気味でしかなかった。

「私の為に、ですか？」

「そう、お前の為に、だ」

協会長が、キュッと口角を上げた。

「北の神本人は人間の寿命を全うすると言っておりましたが」

「大丈夫だ。わしの計画通りにいけば北の神は三十歳で人間としては、死ぬことになる」

「三十歳ですか？ それなら、もうすぐではないですか」

「そうだ。あいつをすぐに神様に戻す。そして、野々神社で活躍してもらおう。これはすべてお前の為に、わしがすすめた計画だ」

協会長が私の顔をじっと見てきた。

「北の神の人間としての百八歳までの寿命はどうなるのでしょうか？」

「あいつの寿命は、死神に依頼して三十年で切ってもらおうことにした。あとのことは死神に任せておけばいい」

「死神、ですか？」

「ああ」

協会長が俯いて言った。

「死神が、北の神の人間としての寿命を切るわけですか」

私はビクッとして声が大きくなった。

「声が大きい、それに何度も言うな」

協会長の声の方が大きかった。

「死神なんて恐ろしすぎます」

私は声のトーンを落として言った。

「確かに、死神は恐ろしい奴だな。わしも死神と話して背筋が凍りついたよ。しかし、これはお前の為だと思って、わしは死神に依頼したんだからな。そのことを忘れるな」

「私の為、ですか」

「そうだ。だからお前もこの件に関しては覚悟を決めてもらわなければならない」

「覚悟をですか？」

生唾を呑んだ。

「そうだ。死神はすでに北の神の人間としての寿命を切るために計画を進めている。人間としての三十歳の誕生日の午後七時四十四分四十四秒に、北の神は車で帰宅途中、R交差点に入ったところで居眠り運転のトラックと衝突して即死してしまう予定だ」

「うっ、そ、そこまでして……」

私は、北の神を神様協会に戻す必要があるのか、と続けて言いたかったが、自分の為に協会長が死神に依頼してくれたことなのだ。自分が言えた義理ではないと言葉を呑み込んだ。

死神が動き出すと、簡単に止めることは出来ないはずだ。北の神をもう少し人間のままだまにしておいてあげたい気持ちもあるが、死神を止めるためには、自分の今持っている神の力を全て使い切っても無理だろう。

もし、できたとしても自分の神の力が無くなってしまい神様を続けることはできないだろう。そして間違いなく協会長は怒り狂い、自分を協会から放り出してしまうだろう。そうなったら、自分は完全に終わってしまう。

神様に戻れることを話しにいった時、人間のままでいたいと言った幸せそうな北の神の表情が頭から離れない。人間として幸せに暮らしている様子が手に取るようにわかった。

結婚してもうすぐ子供ができると言っていた。

両親に恩返しすると言っていた。

病気で苦しむ患者を助けたいと言っていた。

それらすべてが終わってしまう。

北の神の人間としての寿命の百八歳まで全うさせてあげたいとは思いますが、協会長に背いてまで、それをする勇気も力も私には無かった。

心の中で北の神に詫びるしかない。北の神には、心残りかもしれないが、人間としては三十歳で死んでもらうしかない。

自分ができることは、北の神が野々神社の神様として戻ってきてから、彼を慰めてやることくらいしかないだろう。

神様は万能だ。北の神が神様に戻ってから、心残りであろう彼の家族や患者を神様の力で幸せにしてあげればいい。そう声をかけてあげることにしよう。

「何を考えている？」

協会長の声で顔を上げた。

「いえ、何も」

「ポーッとしてたじゃないか」

「少し驚いていただけです」

「今回の件は、何度も言うが、お前の為にやったことだ。わしは道筋をつけただけで、すすめたのはお前自身だ。そのことを忘れないでくれ。だから、わしはこの件は知らなかったことにする。今後、わしはノータッチだ。お前の独断ですすめたことだ。それでいいな」

「えっ、あっ、はい」

「よし、それでは、今から、お前に死神の計画について話しておく。口外は厳禁だ。全てお前の胸にしまっておけ。そして、全てお前の責任だ」

その後、協会長から北の神を神様に戻すため、三十歳で寿命を切る計画を聞かされて恐ろしくて苦しくなった。この件を自分だけで抱え込むことに耐えられるだろうか。私は重い足どりで協会長室をあとにした。

12

「ハァー、困ったな。頭が痛いよ」

野々神は帰ってきてからずっと一人ため息を吐きながら何やらブツブツと嘆いていた。何を嘆いているのだろうか。朝から協会長に呼ばれて出て行ったから、また怒られて帰ってきたのだろう。

「野々神、元気がないですな。もしかして、習の神がテストをボイコットした件で、また協会長に怒られましたか」

わしが言うと、野々神はわしを睨んだ。

「ちがいます。けど、習の神のボイコットの件は、南の神、あなたの責任ですからね。なぜ、テスト当日に、参拝にきた少年を追いかけてさせたりしたんですか。あー、思い出したー、クソー」

野々神は、頭を抱えて天を仰いだ。

「まあまあ、よろしいじゃないですか。終わったことですし」

わしはニヤリと笑った。

「なに笑ってるんですか。あなた、全然反省してませんよね」

「すいませんね。でも、今日の呼び出しは習の神がテストをボイコットした件じゃなかったんですか」

「習の神の件は、協会長のなかでは、すでに終わってます。かわいそうに、あいつは協会を追放されて、今頃は浮浪の神になってますよ。今ごろ路頭に迷ってるんじゃないですかね。南の神、ちょっとは責任感じて下さいよ」

「わかりました。わしのせいで、習の神は協会を追放されて、路頭に迷って苦しんでることを、しっかりと肝に銘じておきます」

「本当に思ってますかね」

「じゃあ、今日の呼び出しは、北の神の方ですかね」

「そうです」

少し前に協会長が北の神を神様に戻すつもりだと野々神に話していたらしいから、その件だろう。北の神が野々神社に戻ってくることは、野々神にとってはありがたいはずだが、今の様子を見る限り、今日の呼び出しはいい話ではなかったようだ。

協会長は自分の利益になることしか考えてないので、呼び出しと聞いた時、野々神にとって、あまりいい知らせではないだろうとは思っていた。

「北の神が戻ってくる話はどうなったんですか」

「協会長は、その予定ですすめているみたいです。今日はその話でした」

「やっぱりそうですか。そのわりには表情が冴えないですな。野々神は北の神に戻ってきてほしくないんですか」

「そりゃあ、戻ってきてほしいですよ。一日でも早く北の神と一緒に仕事がしたいです」

「それなら、もっと元気出してくださいな」

「でも、いろいろあるんです」

「いろいろ？」

協会長のことだ。北の神や野々神のことを思って、北の神を野々神社に戻すつもりではないのだろう。野々神にとって、なにが嫌な条件でもついているのだろう。今の野々神の態度を見るかぎり、きっとそうだ。

「実は、北の神は人間界ですごく幸せに暮らしてるみたいなんです。だから、野々神社に戻るのには人間としての寿命を全うしてからにしてほしいと言ってきたんです」

「ほおー、北の神は人間界で幸せなんですか。さすが北の神ですな。人間界でもうまくやっているんですな」

「そうなんですよねー。私には理解出来ませんが、北の神は人間界が気に入ってるみたいなんですよ」

「北の神にとって、人間界はいいところなんでしょうな」

「よくわかんないですけど、北の神の話を聞いていると、百八歳の寿命を全うさせてやりたいなと思うんですよね」

「それでしたら、野々神はしばらく大変でしょうけど、そうしてあげればいいじゃないですか」

「私がそう思ったところで、協会長がね。わかるでしょ」

「協会長、ですか？」

「そう。協会長。北の神は戻りたくないと言ってるのに、強制的にすぐに野々神社に戻すつもりなんです」

「厄介ですな」

「ほんと、厄介。協会長は、北の神が人間界で三十歳になった日に神様に戻すつもりなんです」

「三十歳、そりゃあ、急ですな」

「そうですよ。それでですね、協会長は、恐ろしいことに、この件を死神に依頼してるんです。死神が北の神の人間としての寿命を三十歳で切ってしまう計画を立ててるらしいんです」

「そりゃー、無茶苦茶ですな」

「そうでしょ。でも、協会長が言い出したら、私がどうこうできるわけないですしね」

「困りましたな」

「北の神の人間界での三十歳の誕生日に交通事故で死亡する計画を、協会長と死神で、すでにすすめているんです。私、その計画を聞いて恐くなって、これでいいのかって悩んでるんですよ。でも、私がどうすることも出来ないし、今、この件を自分だけで抱えてるのが苦しくてね」

「うーん、なるほど。考えてみりゃ、人間になった北の神が幸せに暮らしてるなら、三十歳で死亡するのは確かに辛いかもしれませんな。人間の三十歳って年齢は、一般的には仕事も充実してきて、これからって時でしょうし、一家の主として家庭を持つ頃ですからね。これまで、経験したこと、学んできたことを成果として形になってあらわれてくる年齢ですし責任が重くなってくる頃ですからね」

「へえー、人間の三十歳ってそんな大事な時期なんですか」

「野々神は人間のことを知らなすぎます。もっと人間のことを学ばないとダメですな。協会長の方ばかり見て仕事しないで、人間を幸せにするためにはどうすればいいか、もっと人間のことを知らないといけません」

「部下のくせに、えらそうに。南の神こそ、もう少し協会のことを考えて下さい。あなたのせいで、私が協会長に目をつけられて大変なんですからね」

「協会のことには興味ないですな。それより、北の神は人間界で結婚はしてるんですかね」

「協会のことに興味がなくて、もうこれ以上問題起こさないで下さいよ。お願いしますよ」

「わかってます、わかってます、問題は起こさないようにしますよ。それより北の神は結婚してるのか教えてくださいな」

「結婚して、もうすぐ子供ができるみたいです。でも、このままだと、子供の顔を見る前に死ぬことになるでしょうね」

「子供の顔を見る前に死ぬことになる、そんなこと平気で言えますな」

「平気で言ってるわけじゃないですよ。私も困ってますよ。けど、その方向で進んでしまってるから、私にはどうすることも出来ません」

「どうすることも出来ないなんて、それは北の神が可哀想すぎますよ。ここは野々神の力で何とかしてやらないといけませんよ」

「私の力じゃ、本当にどうすることも出来ないですよ。可哀想だけど、やむを得ないです。北の神が野々神社に戻ってきてから、元気づけてやるしかないです。南の神も北の

神が戻ってきたら、元気づけてやってください」

「うーん、このままだとヤバイですな、何とかしてやりたいですな」

わしは協会長の自分勝手なやり方に怒りを覚えた。死神に依頼してまで北の神の寿命を切るなんて異常すぎる。狂ったとしか言いようがない。

あの日からあいつはおかしくなった。地位と名誉に目が眩んだ。わしは協会長といっしょに過ごした若かりし日のことを思い出した。

当時、今の協会長とわしは勝野神社というところに所属し同期で良きライバルだった。勝野神社は規模が大きく神様が九人もいた。

その中のリーダー的な立場だったのがわしと協会長だった。協会長は当時、東の神として活躍し、わしは当時も南の神だった。

お互いに相手を意識しながら切磋琢磨し、人間界の幸福度を上げるためにそれぞれ努力していた。しかし、当時のわしと東の神との考え方には大きな違いがあった。

東の神は神様協会の繁栄こそが人間界の幸福度を上げる為に不可欠なことだと考えていたのに対し、わしは神様協会の繁栄を優先するべきではなく、まず人間界の幸福度を上げることを優先し、人間界の幸福度が上がれば、自然と神様協会も繁栄するという考えだった。

当時、まだ血の気の多かったわしと東の神は、そのことでよく意見をぶつけ合い、殴りあい寸前になることもあった。

考えの違うわしと東の神は、今では、片や、協会のトップとなり協会をまとめる立場にまでのぼりつめ、片や、落ちこぼれというレッテルを貼られてしまい、神様協会のお荷物となってしまっている。

この差はいつの間についたのだろうか。そこには、わしと協会長の運命を大きく分けるある出来事があった。

当時の協会長が常に成績優秀だった勝野神社に視察訪問に訪れた時のことだった。

勝野神社の神様全員が、恭しく当時の協会長を迎え、視察後には宴を開催する予定になっていた。

協会長の視察は無事に終わり、宴の準備に忙しくする神様たちの中には、わしと現在の協会長の東の神もいた。

東の神は料理の準備を任せられ、わしは飲み物の準備を任せられていた。

わしが宴の会場まで重たい酒樽を運び終えてから、一旦、神社に戻ってきた時のことだった。

本殿で休憩していると、一人の少年が神社の境内にポツンと立っていた。十代前半くらいの少年だった。少年を見ると、着物の腕のところが破れていて、着物全体が汚れていた。

太陽の光で辺りは赤く染まり、少年の影が長く伸びる時間になっていた。ただでさえ、この年頃の人間が神社に一人で現れるのはめずらしい。こんな遅い時間にどうしたんだ

ろうと、わしは少年のことが心配になった。少年を放っておけなくなり、暫く少年の様子を見ることにした。

「おい、なにサボってんだよ」

その時、背中から声がして、振り返ると東の神が米俵を肩にかついで立っていた。

「あの少年の様子がおかしいんだ。こんな遅い時間に神社に来るなんて変だと思わないか？ もうすぐ陽が沈むぞ」

わしは顎で少年の方をさした。

ハァーとため息を吐いた東の神は、天を仰いでから少年に視線を向けた。

「肝試しでも、やってんじゃないのか。大きな物音でもたてて脅かせてさっさと追っ払えよ」

「一人で肝試しか？ そりゃないよ。それにあの顔は、そんな楽しんでる表情じゃない。思いつめた表情だ。着物だって汚れているし。絶対やばいから何とかした方がいいんじゃないか」

「バカなこと言うな。早く宴の準備しないと間に合わなくなるぞ。協会長を待たせたらヤバいぞ。勝野神社は協会長の評価が高いのに、あんな少年の相手をしてぶち壊すわけにいかねえよ。俺は先に行くぞ」

「わかった、東の神は先に行ってくれ。俺はもう少しあの少年の様子を見てから行くわ」

「ハァー、相変わらず、お前はバカだな。協会長や勝野神に怒られても知らねえぞ」

「勝野神には、不審な少年が現れて目が離せなくなったと伝えておいてくれよ」

「わかった、わかった。じゃあな、先に行くな」

東の神は米俵をかついだまま宴の会場へと向かって行った。

わしは、東の神が行ってからずっと少年の様子を窺っていた。少年は勝野神社に茂る一本の樹を首が痛くなるんじゃないかと思うくらい見上げていた。

陽は完全に落ちて、少年の見上げている樹は色を失いまっ黒な不気味な怪物のように見えた。茂る葉の隙間からかろうじて月の光が射し込んでいた。

少年が何をしているのかと不思議に思い、わしは少年の後ろに立った。少年が鼻を吸る音が聞こえた。

急に少年が踵を返しわしの方に体を向けた。少年の顔を正面で見た。少年の顔は青白く、目の辺りに痣があった。

わしは生唾を呑みこんだ。やっぱり、この少年を放っておいてはダメだと思った。

少年は一步踏み出し、わしの体をすり抜け、フラフラした足取りで歩きはじめた。わしはそのまま少年を追いかけた。少年は手水舎の前に立ち、柄杓を右手にとってゆっくりと水を掬った。

まず左手に水をかけてから、柄杓を持ち替え、右手にも水をかけた。また柄杓を持ちかえてから水を掬い、今度は頭を下げて、頭の上で柄杓をひっくり返した。それを三度繰り返して、髪の毛はびしょびしょになり、着物まで濡れていた。

その後、少年は地面に座り込んだ。体育座りをして両膝の間に顔を埋めていた。

少年の顔を覗きこんで見ると、髪の毛から落ちる水といっしょに目から涙がポタポタと落ちていた。

急に少年は立ち上がった。腕で涙を拭いてから顔を両手でパンパンと叩いて歩きだした。

わしは少年の後をぴったりとついて歩いた。少年は月の灯りで白く光る畦道を歩き、そこから草木が生い茂る山道へと進んで行った。

最初は周りをキョロキョロと見ながら歩いてしたが、急に視線を左に向けた。「ここにしよう」と言って、そこで立ち止まった。

なにを見つけたのだろうか。少年の視線の先を見ると勝野神社で見えていた樹よりも、一回り大きな樹が不気味にそびえ立っていた。太い幹からしっかりとした頑丈そうな枝が四方に何本も伸びている。

少年はその樹を見上げながら近づいて行った。樹の下まで来て立ち止まってからも、ずっとその樹を見上げていた。

しばらくすると、少年は「よし」と呟いて、地面に腰をおろし持っていた風呂敷の紐をほどいた。開いた風呂敷の中には縄が入っていた。その縄を両手で持つと強度を確かめるように縄をピンピンと左右に何度も引っ張っていた。それを終えると、その縄を自分の首にグルグルと巻きつけてから立ち上がり、また樹を見上げた。樹に近づくと、幹の出っぺったところに左足をかけて右足で地面を蹴って飛び上がり、上にある太い枝に右手をかけた。

少年はこの樹にのぼろうとしている。わしは先回りして樹の高い位置にある枝から少年を見下ろした。

少年は右手一本で自分の体を持ち上げた。次に上の枝に左手をかけ、両足を幹に巻きつけて樹にしがみついた。少年はそれを繰り返し樹をのぼっていった。ある高さまできたところで、少年は太い枝の上に体をのせた。少年は枝の上で自分の体制を整えてから、首に巻いてあった縄の両端を枝に縛りつけた。

「こりゃ、やばいな」

少年は枝に縄を縛りつけてから、自分の首に巻いてある縄を両手で引っ張りギュッと首を絞めた。そして目を閉じて手を合わせた。

「父上、母上、お許してください」

そう呟いて、少年は全身の力を抜いた。少年の体は枝から離れて落ちていった。その瞬間、わしは慌てて神の力を使い、縄の縛ってある樹の枝を折った。

バキッという枝の折れる音に続いて少年が地面に落ちるバサッという音がした。少年は枝に吊るされる寸前で折れた枝といっしょに地面に叩きつけられた。痛かったろうが死なずにはすんだ。

わしは枝の上から「フゥ」と息を吐いた。体中の力が抜けた。落ちた少年を見るとうつぶせになって倒れたまま動かなかった。

わしは樹から下りて地面にうつ伏せになっている少年の横に胡座をかき、少年の顔を覗きこんだ。

少年の目から涙がポタポタと落ちて地面を濡らしていた。しばらくこのまま泣かせておくことにした。

わしは、少年の耳元で彼が赤ん坊の頃に彼の母親が歌ってくれていた子守唄を歌った。少年の顔が少しずつ柔らかい表情に変わっていくのがわかった。

替え玉は出来た。今回の死神との計画のすべてを野々神が勝手にやったことにしておけば、万一、トラブルがあってもわしの地位は守ることができる。

野々神を帰してから、ソファに体を預け、煙草に火をつけた。煙を天井に向かって勢いよく吐くと体の力が抜けた。

「これでなんとかなる」

天井に舞う紫煙に向かって呟いた。せっかくのぼりつめた協会長の地位を、あいつらの為に、ふいにするわけにはいかない。

協会長になるまで、どれだけ苦労したかと、若い頃のことを思い出した。ふと、野々神社の南の神のことが頭を過った。

若い頃はあいつのせいで一番にはなれなかった。あいつさえいなければ、自分は間違いなく一番で、もっと早く出世できたはずだ。あいつは、いつもわしの邪魔をした。あいつは確かに実力はある。この先あいつが本気になってわしの邪魔をしないかが不安でならない。

野々神は今回の計画を南の神に相談したりしないだろうか。南の神に知られることだけは避けないといけない。それだけは絶対にマズイ。

あいつが知ると、ここぞとばかりに、昔の仕返しをしてくるに違いない。あいつは若い頃のあの件でわしを恨んでいるはずだ。

あれは、わしとあいつが勝野神社で働いていた頃のことだ。当時の協会長が勝野神社に視察に来た時のことだ。

わしは勝野神社で東の神として働いていた。南の神はその当時も南の神だった。協会長の視察が終わり、勝野神社の神様たちが宴の準備をはじめていた。

みんな忙しくしているのに、南の神は勝野神社に現れた不審な少年の様子を見ると言っ、宴の会場に来なかった。

南の神から、少年を見張っているから宴には行けないと、その当時の上司である勝野神に伝えるように頼まれたが、わしはそれを無視して伝えなかった。

南の神の評価を下げるチャンスだと思ったからだ。南の神が、宴の準備をサボっていると勝野神と協会長に伝えれば、きっと南の神の評価はどん底に落ちる。そうなれば、自分が一番になれると思った。

宴の準備が全て終わり、宴が始まっても南の神は姿を見せなかった。

協会長と勝野神は、宴の会場の隅で椅子に腰掛けて談笑をしていた。その時、南の神がいないことを伝えにいこうと思ったが、それは躊躇した。

南の神が宴の準備をしないでサボっていると伝えたら、協会長は怒り、勝野神は慌てるだろう。南の神の評価も落とすことは出来る。

しかし、下手をすれば、自分も仲間の告げ口をするようなやつとして評価を下げてしまうかもしれないと思い、慎重に様子を見ることにした。

協会長と勝野神はニコニコと上機嫌のようだった。この視察で、協会長は勝野神社に好印象を持ってくれたのだと想像ができた。

自分の評価はどうだったのだろうか。南の神と自分の評価は、どちらが高かったのか知りたかった。

きっと大丈夫だ。自分には実力がある。ライバルは南の神だけだ。その南の神が、宴に参加せずにサボっていることをうまく伝えれば、自分の評価は上がり、南の神の評価は地に落ちる。

宴が始まっても、南の神の姿はまだなかった。このまま南の神が来ないことを願った。中途半端に現れて、少年を助けたことを報告されると、あいつの評価が上がるかもしれないと思ったからだ。

宴は盛り上がり、舞台に上がって歌を披露する神や芸をする神もいた。こいつらは実力がないからこの程度のことで、協会長のご機嫌をとるしかないのだ。この日の為に必死で練習をしているやつらを冷めた目で見ていた。

この雑魚どもは実力がないので眼中にはなかった。こいつらの役割はこれでいい。協会長の機嫌をとるだけの、その他大勢の神様でいい。絶対に協会長から頼りにされる神様にはなれない。

協会長は、舞台に向かって満足そうに手を叩いてゲラゲラと笑っていた。お腹を抱える場面もあった。こんなに笑っている協会長をはじめて見た。

これまでは、いつも眉間に皺を寄せ、こっちを突き刺すように細い目で睨み、唇を真一文字にしている印象しかなかった。

この時の協会長の表情を見る限り、今回の協会長の視察と宴は勝野神社にとって大成功のように思えた。

しかし、それは、このまま協会長が南の神が宴の場に姿をみせていないことに気づかなければの話だ。もし、気づいてしまうと協会長のこやかな表情は豹変してしまうだろう。

協会長が豹変したら、どうなるのだろうか。この時、それが出来るのはわしだけだった。

協会長が、このまま南の神がサボっていることに気づかず、ご機嫌なまま視察が終わってしまうことは避けたかった。南の神は宴に参加していないことで怒られるべきなのだ。そして自分と南の神とでは協会を愛する気持ちに雲泥の差があることを協会長にわかってもらわなければならない。

「東の神一、ちょっとこっちに来てくれるかー」

舞台の出し物が一段落したタイミングで、わしを呼ぶ勝野神の声が宴の会場に響いた。一瞬、宴の場が静まり返り、みんなの視線がわしに集中した。勝野神の方を見ると、わしに向かって手招きをしている。

「はい」

何事かと思いながら、勝野神に向かって大きな声で返事をした。

「早く来い」

勝野神の手招きが高速になった。わしは勝野神の方へと早足で向かった。不安になり、勝野神の表情を見たが、その表情からは読めなかった。

「おーい、早く来い」

勝野神が手をメガホンにした。

「あ、はい」

勝野神の隣に座る協会長を見た。協会長の表情が少しずつ険しくなっていく気がして、慌ててダッシュした。

「すみません、お待たせいたしました」

少し息を切らしながら、協会長と勝野神の前に立ち深々と頭を下げた。

「呼ばれたらさっさと来い」

勝野神が眉をつり上げていた。

「申し訳ございません」

もう一度、頭を下げながら協会長の顔色を窺った。口を真一文字にして、目を閉じていた。いつもの厳しい表情に変わっていた。

「まあ、いい。実は協会長が今日お忙しい時間を割いてわざわざ勝野神社に視察にいらっしゃってくれた本当の理由なんだけどな」

今度は勝野神の顔に笑みが浮かんだ。隣にいる協会長も笑みを浮かべていた。悪い話ではないと思った。

「はい」

わしは直立不動で勝野神に体を向けた。

「ありがたいことに、協会長がこの勝野神社の神様は優秀な神様が多いので、勝野神社から一人の神様を協会の幹部候補として、本部に異動をさせたいとおっしゃってくれているんだ」

勝野神はわしの肩を何度も叩いて笑みを浮かべた後、「本当にありがとうございます」と言って協会長に向けて笑みを浮かべ頭を下げた。

「そ、そうなんですか。それって、すごいことですよ」

わしは興奮した。本部に異動ということは、実力を認めてもらったということだ。

「そうだよ、すごいことだよ。そ、そこでだ」

勝野神が一旦言葉を切り、唾を呑み込んだ。そして、わしの顔をじっと見て両肩に手を置いた。

「協会長が視察した結果、東の神、君をその候補にあげてくれたんだ」

勝野神の表情に満面の笑みが広がった。

「えっ、え、ほ、ほんとうですか」

わしも満面の笑みになった。

「本当だ。そんなに喜んでくれると、こっちまで嬉しくなるね」

協会長はわしに向かって笑みを浮かべながら言った。

わしは完全に舞い上がった。こんな光栄なことはない。

「それでだな、まずは東の神の気持ちを確認しておこうと思ったわけだ。今の顔を見ると確認するまでもなさそうだけどな。まっ、一応な。どうだ、本部に行きたいか」

勝野神が笑顔のまま訊いた。

「は、はい。光栄なことです。ありがとうございます。是非行きたいです」

わしは前のめりになった。

「まあまあ、落ち着け。まだ、お前に決まったわけじゃない。でも候補にあがっただけでもすごく光栄なことだぞ」

勝野神がわしの肩を何度も叩いた。

「はい、すごく光栄です、ありがとうございます」

幹部候補として本部へ異動するという事は超エリートコースだ。こんなチャンスは滅多にない。このチャンスを絶対に逃したくない。

「よし、東の神の気持ちはわかった。そうしたら、南の神を呼んできてくれるか。協会長が、もう一人の候補として、南の神をあげてるんだよ。さすがに協会長はお目が高い。うちで一、二を争う神様二人に目をかけてくれたんだからな。でも、どちらも抜けると勝野神社は辛いけどなあー」

勝野神はずっと目尻が下がりっぱなしだった。

もう一人の候補が南の神と聞いて、晴れやかな気持ちがあくすんでいくのを感じた。

「南の神も候補なんですか？」

「そう、南の神も候補だ。あいつの力ははずば抜けているからな。あいつにも候補に上がってることを知らせてやろうと思ってるんだ。あいつもきっと喜ぶだろうな」

勝野神の興奮は収まらない様子だ。

このタイミングで南の神が、この場にいないことを伝えるしかない。そうでないと、本部行きは南の神になる可能性が高い。

「それがですね。南の神なんですが……」

伏し目がちに唇を噛みしめて演技をした。このタイミングで南の神がサボっていると伝えれば、南の神は、きっと幹部候補から落選する。

「どうした？」

勝野神の眉間に皺が寄った。

わしは協会長と勝野神の顔を交互に見てから、顔に申し訳ございません、という表情を貼りつけた。

「実はですね、大変言いにくいのですが」

そこで言葉を切って、唇を噛みしめながら、また協会長と勝野神社長を交互に見た。

「だから、どうした？」

勝野神が苛立ちを隠さなかった。協会長の眉間にも深い皺が寄った。

「南の神は、こんな宴に参加するのはバカバカしいと言って帰ってしまいました。本当に申し訳ございません」

わしは一気に言って、深々と頭を下げた。

「な、なんだと」

勝野神の怒声がわしの後頭部に飛んできた。そこで、よしと拳を握った。口元が勝手に綻んだ。

「この宴は、協会長が私たちのために開いてくれる大切な宴だから参加するようにと南の神を説得はしたんですがダメでした。本当に申し訳ございません」

「お前がそう言って説得しても、南の神は帰ってしまったのか？」

「はい、私の説得不足でした」

「あいつ、ど、どういふつもりなんだ」

勝野神がわしの胸ぐらをつかみ睨みつけてきた。勝野神の目は真っ赤に充血し、こめかみの辺りをピクピクさせていた。

「申し訳ございません」

わしは胸ぐらをつかまれながら首だけを折ってもう一度お詫びした。

「勝野神、暴力はやめなさい。彼が悪いわけではない」

協会長が言うと、勝野神は胸ぐらをつかむ手を少し緩めた。

「す、すまん。お前が悪いわけじゃないのに。つい興奮してしまった」

勝野神はそう言ってわしの胸ぐらから手を離し、わしに向かって頭を下げた。

「いえ、連帯責任ですから、おなじ勝野神社の仲間の無礼です。本当に申し訳ございません」

唇を噛みしめ、協会長に向けて、もう一度深々と頭を下げた。

「なかなか、君は見所があるね。私が今日視察して目に止まった二人の神様は大当たりと大外れといったところですか」

協会長は勝野神の方に視線をやった。勝野神も深々と頭を下げた。

「私の監督不行きでございます」

「そうですか。この勝野神社に、そんな無礼な神様がいることを、君には反省してもらわないといけないな」

協会長の眉間に深い皺が入っていた。

「は、はい、申し訳ございません」

「まあ、しかし、これで東の神か南の神、どちらを本部に連れて行くのか悩まなくてよくなったな」

協会長がわしの方に視線を向けて笑みを浮かべた。

わしはグッと拳を握った。

「ありがとうございます」

勢いよく頭を下げた。口元が綻ぶのを堪えられなくなった。

その後のわしは協会本部に入り、そこからはトントン拍子に出世して、協会長にまでのぼりつめることができた。この地位を守るために、この先、絶対に南の神に邪魔されるわけにはいかない。

「てめえ、なに考えてんだ」

わしが勝野神社に出社すると、勝野神が飛んできて、えらい剣幕で怒鳴ってきた。頭から湯気が出ているんじゃないかと頭の上を見ると本当に湯気が上がっていた。

「は、はあ、何のことでしょう？」

勝野神の頭の上の湯気に視線を向け、首の後ろを搔きながら返事すると、湯気が一段と激しくなった。

「なぜ、昨日、宴をサボって帰ったんだ」

「ああ、すいませんね。反省しています」

宴をサボって帰ったことになっているようだった。東の神は勝野神に少年のことを伝えてくれてないようだ。まあいい。言い訳するのも面倒だ。

「今さら反省しても遅いんだよ」

「じゃあ、反省しないでおきます」

わしは、頭ごなしに怒鳴る勝野神に苛立った。

「な、なんだとー。お前、俺に喧嘩売ってんのかー」

「いえ、そんなつもりはありませんが」

「もういい。どうせ、お前は神様協会からすでに追放されているからな」

「追放？」

「そう、追放だ。もうお前は俺の部下でもなければ、協会の神様でもない。ただのフリーの神様だ」

「そうでしたか」

「今さら謝っても遅いぞ。協会長がご立腹だからな。許してもらえないわけない」

「それなら、今日はここに出社しなくてもよかったですね」

「なんだ、その態度は。もういい、さっさとここから出ていけ。お前の顔なんて二度と見たくない」

勝野神を一段と怒らせてしまい、言われた通り、わしは勝野神社を後にした。

今思えば、大人気ない態度だったなと思う。勝野神には申し訳ないことをした。しかし、宴に参加せず、少年の後をついて行ったことは、今でも間違っていない。

あの少年を放ったまま宴に参加し、後で少年が自殺でもしてしまっていたら、わしは悔やんでも悔やみきれず、立ち直ることができなかつただろう。その事で神様としてやっていく自信を失っていただろう。自己嫌悪に陥り、そのまま神様協会をやめてしまっ

いたかもしれない。そう考えれば、神様協会を追放されたことなど、大したことはない。これからはフリーの神様としてやっていけるように人間について必死で学ぶしかないと思った。

フリーの神様になったわしは、人間の幸福度を上げるために必死で学んだ。その甲斐あって、自分の力だけで人間の幸福度を上げることができるようになった。そして、上がった人間の幸福度は協会に吸い上げられることがないので、有り余るほど増えていった。わしは、それを出来るだけ人間に還元することにした。人間に還元すると、今度は勝手に人間が幸福度を上げていった。

わしの手元には幸福度は有り余っていった。それを使って、本当に困っている人間を助けることも出来た。その頃はすべてがうまくいった。

わしはフリーの神様として成功したが、周りには神様協会から追放されたフリーの神様が浮浪の神や疫病神になっていくのを目の当たりにしていた。彼らの暗鬱な表情を見ると、何とかしなければならぬと思うようになった。

彼らが浮浪の神や疫病神になるのを食い止めよう。わしが成功したように、フリーになった神様にも成功してほしい。そして人間の幸福度をいっしょに上げていこうと考えた。

わしの得た人間の幸福度を上げるためのノウハウや心得を多くのフリーの神様に伝授するため、フリーの神様のための塾を作った。そして、ありがたいことにそこから優秀なフリーの神様がドンドンと誕生してくれた。何もかもうまくいってくれた。

そんなある日、協会から戻ってきてほしいという連絡が入った。今さらとも思ったが、その時の協会長が、一緒に勝野神社で過ごした東の神と知り、一度話を聞くことにした。

協会長になった東の神に久しぶりに会った。彼は貫禄がついて立派になっていた。握手を交わし、昔話をすることなく、彼はすぐに本題に入った。

彼は現状の神様は人間界の幸福度を上げることを疎かにしているので、君のように人間の幸福度を上げることに長けた神様に戻ってきてほしいと、わしに訴えてきた。

わしは、若い頃に協会で学ばせてもらったおかげで、今の自分があるわけだし、今の協会長は同じ釜の飯を食った仲間だから神様協会に戻ることにした。そして協会長といっしょに人間の幸福度を上げ、神様協会を盛り上げると約束した。

それから、野々神社で南の神となったわしはフリーの頃と同様に人間の幸福度を上げていった。手応えもあり充実した日々が続いた。

しかし、ある時、おかしなことに気づいた。野々神社の人間の幸福度はドンドンと上がっているはずなのに、すぐに下がってしまっていた。おかしい、こんなはずはないと思い、独自で調査してみることにした。

すると、野々神社の人間の幸福度は一度は急激に上がっていたが、次の日には元に戻っていた。

その原因を調べてみると、野々神社の人間の幸福度の上った分のほとんどを神様協会が吸い上げていたのだ。

神様協会に戻る条件の一つとして、人間の幸福度の吸い上げの比率を今の三十パーセントから十パーセント下げて二十パーセントにしてほしいとお願いしていたはずなのに、現実には百パーセント近く吸い上げられていたのだ。

「約束が違うじゃないですか」

独自で調査した資料を協会長の座る机の上に叩きつけた。

「何だ、その態度は」

協会長は眉間に皺を寄せ、わしの目をギロリと睨んだ。その時の協会長の目は完全に濁っていた。協会長はわしが机に叩きつけた資料を手に取り、一瞬、視線を落としたが、すぐにその資料を机に投げるように返してきた。

「何が、じゃないですよ。これは何ですか？ 野々神社の人間から幸福度を通常の三十パーセント以外に七十パーセント近くも吸い上げてるじゃないですか」

わしは資料を手に取り、協会長の目の前にかざしながら訴えた。

「ああ、その件か。すまん」

「すまん、じゃありません。ちゃんと説明して下さい」

協会長は口元を歪めて話しはじめた。

「君が野々神社の人間の幸福度を大幅に上げてくれたからね。ちょっと多めに吸い上げさせてもらったんだ。そうでもしないと、協会の運営も厳しくてね。まあ、わかってくれ」

「わかるはずないでしょ。約束が違います」

「約束、約束とうるさい奴だな」

「これまでも、こうしたことをやっていたのですか」

「こうしたことって？」

「人間の幸福度の吸い上げを通常の三十パーセント以外に、無断で吸い上げるようなことですよ」

「幸福度の高い神社には、そこの神社の長に内密でお願いして吸い上げていたことはある。神社の長にお願いしているから無断ではない。今回の件も君の上司である野々神には伝えてある」

「そんなの、無茶苦茶だ。せっかく苦労して人間の幸福度を上げたのに、それを協会に全て吸い上げられたら神社としては、たまったもんじゃない。いや、神社だけじゃない。人間はたまったもんじゃない。やってられないですよ。こんなことしていたら、みんな黙っていないですよ。そのうち反乱が起きますよ」

「そんなこともないぞ。神社の長のなかには、余分に吸い上げられることが成績優秀の証だと勲章のように喜ぶ長もいるぞ。野々神も喜んでいたぞ」

「信じられない。この協会は腐ってる」

わしは何度も首を横に振った。

「これも今だけだ。協会の利益が安定したら、そんなことはしない。君の言ってたように吸い上げ率は二十パーセントまで下げるようにしてやる」

その後も協会長と話し合ったが、やはりわしと協会長の考えは平行線のままだった。

「協会の利益？ バカバカしい」

わしは最後にそう言って椅子を蹴飛ばして出ていった。それ以来、わしは野々神社で人間の幸福度を上げることをやめた。

協会に所属して、人間の幸福度を上げたところで、協会に全て吸い上げられるだけだ。協会から脱会してフリーとして活動することも考えたが、協会長はそれを許さないだろう。

多分、わしがフリーになったとしても、協会長は邪魔をしてくるつもりだ。そうなる
と、当時フリーで頑張ってくれていた神様に迷惑がかかってしまう。

協会長はわしのことを目の上のたんこぶのように思っているから、わしは目立たない
方がいいと判断した。

わしは野々神社の南の神として幸福度を上げることには力を入れず、出来の悪い神様
を演じながら、陰でフリーの神様を支援することにした。神様協会に気づかれないよう
にフリーの時代に始めた塾で、指導したりアドバイスしたりし、優秀なフリーの神様を
育てることに注力した。

フリーの神様たちは、協会の神様とは違い、自分の成績に固執せず、みんなで人間の
幸福度を上げることに協力をした。幸福度の吸い上げ率を自分たちで決められるのだが、
誰もが自分たちで上げた幸福度の二十パーセント以下におさえていた。出来るだけ人間
に幸福度が残せるようにと考えていた。彼らは皆、わしの教えを守ってくれた。神様協
会の幹部よりフリーの神様の方が常識があるのだ。

新しいフリーの神様が入塾したので、わしはそいつを徹底的に教育している。こいつ
はわしが邪魔したせいで神様協会のテストを受けることができず協会に入れなかった神
様だ。

なぜ、わしがこいつのテストの邪魔をしたかということ、こいつが優秀だからだ。優秀
で実直な奴なので、協会のドス黒い色に染まってほしくなかった。きっとフリーの神様
で頑張った方がこいつの為にもなると思った。

神様協会のテストの当日に、こいつを試してみた。テストに行く寸前に、不審な少年
が現れたら、こいつは少年を見捨ててテストに行くのか、それとも少年を心配してテス
トに行かないのか。

テストに行けばそのまま協会の神様としてやっていけばいいし、テストに行かずに少
年の後をついて行ったら、フリーの神様として、わしが育てるつもりだった。案の定、彼
は少年の後をついて行き、神様協会のテストを受けなかった。

「いいか、習の神。耳の穴、かっぼじってよく聞けよ。大事な話だぞ」

「はい、ちゃんと聞いていますよ」

「なんだ、その態度は！ 教えを乞う態度じゃないぞ」

わしは習の神に対し、丁寧に優しくそして時には厳しく教育した。習の神は、わしの
見込み通り覚えがよくドンドン吸収していった。

こいつは近い将来、カリスマと呼ばれるフリーの神様にまで成長するだろう。そして、
ここのリーダーになれると確信した。こいつがわしの後を継いでくれるはずだ。こいつ
がリーダーになってくれれば、わしはいつでも神様を引退出来る。

わしと習の神の師弟関係は周りから見ると羨ましい関係のようだった。わしも習の神
に教えている時はすごく楽しかった。

しかし、この関係は長くは続けられないかもしれない。わしにはやらなくてはならないことができた。

それをすることで、協会長の逆鱗に触れるだろう。そうなると、協会長はわしを本気で潰しにかかるだろう。

これ以上、協会長の邪魔をすると、二度と邪魔できないように、わしを人間にしてしまおうだろう。だから、わしは目立ってはいけないのだが、北の神のためにはやむを得ない。だから、わしが人間になる前に少しでも早く習の神を一人前に育てなければならぬ。

9

人間に生まれてから三十年が過ぎようとしている。この三十年間、本当に幸せだった。父の俊介、母のみどりからたくさんの愛情をもらい育ててもらった。園山優花という女性と出会って、一目惚れし告白し、付き合いはじめ二十八歳の時に結婚した。そして、今年優花のお腹に新たな命ができた。俺は心の底から人間になって良かったと思っている。

自分が人間として生まれた日に父の俊介が異常なほどに喜んで幸福度が上がるのを目の当たりにした。その時は、なぜ俊介の幸福度がそんなに上がるのか不思議でならなかったが、自分に子供ができるということはそういうことなんだと今になってわかった。

産婦人科から帰ってきた優花の口から妊娠したと聞いた時、胸がキュンキュンと何とも言えない気持ちになった。

神様の頃は、人間を幸せにすることは難しいことのように思っていたが、そうではない気がした。人間界がこんなに幸せにあふれた世界だとは知らなかった。

子供の頃は両親から愛され、育ててもらい幸せをもらった。

小学生の頃はサッカーや野球をするのが楽しく、友達から幸せをもらった。

母のみどりが病で倒れた時は心配したが、みどりの病は吉岡先生のおかげで完治した。吉岡先生に感謝した。俺も吉岡先生のようになりたかった。

勉強は好きではなかったが、医者になると決めてから勉強も頑張り受験に成功して幸せだと思った。

医者になって、沢田先生という良き先輩と出会いいろんなことを教わった。

恋愛はほろ苦い経験もしたが、今思えばいい経験だった。優花に出会い恋をした。優花からもたくさんの幸せをもらった。

俺は人間として生まれてから、ずっと幸せにあふれている。

これから先も人間として生きていき、父の俊介と母のみどりにこれまで育ててもらっ

た恩返しをし、優花と生まれてくる子供には、俊介やみどりが自分に向けた愛情に負けないくらいの愛情を注ぎ、孫やひ孫が出来ても、彼ら彼女らに目一杯の愛情を注ぐつもりでいる。

神様に戻るのは、それらをやり遂げ、人間の寿命を全うしてからでいい。人間界での今の経験は神様に戻ってからきっと役にたつものだから。

ところで自分の人間としての寿命は何歳までなのだろうか。いつまで人間として過ごすことができるのだろうか。ふと、そんな疑問が頭をよぎった。

「あなたを、ここから先にいれるわけにはいきません」

病院の前で警備員に止められた。

「なぜですか？ 俺は、今日赤ん坊を出産した北野優花の夫なんです。生まれてきた赤ん坊の父親です。だから、妻と子どもに会わせてください」

「あなたは、普通の人間ではありませんね。危険人物は病院に入れるわけにはいきません」

子供が生まれたと連絡が入り、病院まで会いに来たのだが、病院の中に入れてもらえない。何度訴えても、あなたは、普通の人間ではない。危険な人物なので患者を守るために病院に入れるわけにはいかないとされる。

「中に入れる、子供に会わせてくれー」

叫んだ自分の声で目を覚ました。

「あなた、大丈夫？ すごく汗かいてるけど」

優花が心配そうに俺の顔を覗きこんだ。

「ああ、ごめん、大丈夫だ。変な夢見たもんだから」

体を起こして頭を左右に振った。

不吉な夢だった。俺は自分の子供の顔を見ることができないんじゃないかと、ふと思った。

ベッドから体を起こして頭を振った。少し頭痛がする。最近体調があまりよくない。

医者の不養生だなど優花に向かって苦笑いを浮かべた。ため息を吐いてからベッドから出て、大きく伸びをして、もう一度頭を左右に振った。やはり少し頭が痛かった。疲れているだけだ。明日は休みだ。今日一日頑張れば、明日はゆっくり体を休めることができる。それで体調は回復し元気になる。俺はそう信じていた。

食欲はなかったが、無理にトーストを口に押し込みコーヒーで流しこんだ。朝食を終えてから、ストレッチをして仕事に出掛ける準備をはじめた。

そうしてるうちに、疲れはあるが、気持ちは仕事モードに切り替わる。頭痛も気にならなくなる。

ネクタイを絞め上着に袖を通す。フーッと息を吐く。よし、これで今日一日乗り切れる。俺はどんなに疲れていても、朝の準備の時に気持ちを切り替えるようにしている。神様の時から心がけていることだ。

「じゃあ、いつてくるな」

リビングに座る優花に声を掛けた。

「気をつけてね」

優花が立ち上がり玄関へ向かう俺の背中を追いかけてきた。

「わかった」

俺は玄関で振り返り、優花に笑みを向けた。

「今日は実家に寄ってから帰ってくるんでしょ」

「一応、そのつもりだけど」

靴べらを手にして返事をした。毎年、自分の誕生日には両親に感謝の気持ちを伝え、プレゼントを渡すことにしている。子供の頃、両親が俺の誕生日を毎年祝ってくれた、そのお返しだ。

家族三人、バースデーケーキを前にしハッピーバースディと歌い、幼かった俺がローソクを消すと、両親はいつも俺に向かって、「生まれてきてくれてありがとう」と言ってくれた。その度に、俺の小さな胸は熱くなった。

大学生になってからは、自分の誕生日に、生んでくれてありがとう、育ててくれてありがとう、という気持ちを伝えるため、俺から両親にプレゼントを渡すようにした。今日も仕事帰りに両親にプレゼントを持っていくつもりだ。

「あなたが実家から帰ってきたら、あなたの誕生日のお祝いを二人でやりましょうよ。夕食はあなたの好きなものにするわ。何がいい？」

「何でもいいよ。それより」

そう言ってから優花のお腹に手を当てた。

「もうすぐ予定日だろ。ゆっくりしてろ。俺の誕生日のお祝いなんかより、この子が生まれてから、俺は君とこの子に目一杯のお祝いをしてあげたい」

優花のお腹に手を当てて体温を感じながら、そう続けた。

「わかった。けど、わたしもあなたの誕生日くらいは感謝を込めてお祝いさせてほしいの。だから今日の夕食のメニューはあなたの好きなものにする。それとケーキも買ってくるから」

「楽しみにしとく。じゃあ、行ってくる」

ぷっくりと膨らんだお腹に手を当てたまま、優花の頬に軽くキスをしてドアを開けた。ドアを閉める寸前で胸騒ぎがした。優花の顔が名残惜しくなり優花の顔をもう一度見た。

「行ってくる」

もう一度言って口角を上げた。

「いってらっしゃい」

優花も小さく手を振りながら笑みを返してくれた。

なぜかまた、優花の顔を見た。無意識にじっと優花の目を見つめていた。なぜだろう？

今日はなぜか嫌な予感がする。いつもと違い、優花から離れたくなかった。今日はこのまま優花といっしょにいたい。仕事へ行きたくない。こんな気持ちになるのは初めてだった。やはり、体調が悪いからだろうか。

「どうしたの」

優花が俺の異変に気づいたようだ。

「いや、なんでもない。やっぱり疲れてるみたいだ」

「大丈夫？ 顔色よくないよ」

「大丈夫だ。実家から帰る前に連絡する」

俺はドアを閉めて、フーと長い息を吐いた。

「じゃあ、お先です。あとお願いします」

夜勤のスタッフに挨拶をし、俺は帰路についた。体調は、朝よりだいぶ良くなっていた。今日で人間としてこの世に生まれて丸三十年になる。帰宅してから優花が誕生日を祝ってくれると言っていた。

人間になった当初は誕生日を迎えることが、そんな特別なことだとは思っていなかったが、毎年のように家族や友人に誕生日を祝ってもらっているうちに誕生日が特別で幸せなものだと感じるようになった。

大学生になってからは、誕生日を迎えた自分を祝ってもらうより、生んでくれたこと、これまで育ててもらったことを父親と母親に感謝するべきではないかと考え、俺から二人にプレゼントを渡すことにした。

プレゼントを渡した時、喜んでくれる二人の顔を見て幸せを感じた。今日も自宅に帰る前に実家によって二人の喜んでる顔が見たい。

しかし、毎年、プレゼントを渡していると、だんだんと渡すものが限られてきて、今年は何だあげく物ではなく、夫婦水入らずの旅行をプレゼントすることにした。行き先は二人が行きたがっていた鹿児島県の屋久島にした。

父親と母親が並んで縄文杉を見上げている姿を思い浮かべながら、駐車場へと向かった。帰りが予定より遅くなったので、急いで車に乗り込んだ。エンジンをかける前に、母のみどりに連絡を入れた。

電話はすぐに繋がった。

「もしもし、お誕生日おめでとう」

すぐに母親の声が出た。

「ありがとう。今から、そっちに顔出すから」

「わかった。じゃあ、後でね」

電話を切ってスマホを上着の内ポケットに放りこみ、車のエンジンをかけた。

実家は自宅へ帰る途中にあるので、顔を出して帰っても一時間もあれば自宅に着く。少し疲れはあるが父親の俊介と母親のみどり、妻の優花の顔を思い浮かべ、そして、もうすぐ生まれてくる自分の子どもの顔を想像したら疲れは一気に吹き飛んだ。よし大丈夫だ。俺はアクセルを踏んだ。

めずらしく車を飛ばした。道がすいている上に、今日は信号にもつかまらない。タイミングよく信号が青に変わってくれる。このペースだと予定より早く実家に着きそうだ。よし、優花も待ってるし急ごう。俺はアクセルを踏んだ。

R交差点が見えてきた。この交差点で赤信号につかまると長いのだが、目の前の信号は青だ。一気に渡ってしまおうと、もう少しアクセルを踏み込んだ。

R交差点にさしかかる。一気に渡ってしまえ、そう思った瞬間に、目の前に閃光が走った。眩しくてアクセルを緩めてしまいブレーキに足をかけた。

その時、耳に突き刺すような高くて『キキキキッ』という嫌な音が聞こえた。

急ブレーキの音だとわかった。音のする方を見ると右側からトラックが赤信号を無視して突っ込んできていた。トラックは交差点に入ったところで、タイヤから白煙を上げ

ながら急停車した。反対車線の車はなんとかブレーキが間に合ったようで事故にならずにすんだようだ。☒

俺はさっきの閃光のせいでR交差点の手前でとまったので巻き込まれずにすんだ。あのまま交差点に突っ込んでいたらと思うと背筋が冷たくなった。あの閃光のおかげだが、あれはいったいなんだったんだろうか。

交差点のあちらこちらからクラクションが鳴り響いている。赤信号を待ちながら様子を窺った。突っ込んできたトラックの方を見ると、トラックの運転席の窓に顔を突っ込んで、怒鳴っている男性の姿が見えた。ぶつかりそうになった車の運転手のようだ。

確かにトラック側の信号は完全に赤だったので信号無視して突っ込んできているから腹が立つ気持ちはわからないではない。下手すれば死亡事故になっていたかもしれないのだから。

トラックの運転手は運転席でペコペコと頭を下げていた。そのせいでトラックの後ろは渋滞していた。

とりあえず、みんな無事でよかったとトラックから視線を外した時に、交差点の隅に見覚えのある顔があった。

「あれ」と二度見した。

やっぱりそうだ。あんなところで何してるんだろう。そこには、俺が野々神社の神様だった頃、いっしょだった南の神が立っていた。

8

「失敗じゃないか」

協会長室にわしの声が響いた。

「協会長、失敗とは人聞きが悪いですよ。いや神聞きが悪い、ですかね」

受話器の向こうからは冷めた声が聞こえてきた。

「そんなことはどっちでもいい」

わしは受話器に向かって怒鳴った。

「協会長、そんなに興奮しないで下さい。冷静にお願いしますよ」

「わしは冷静だ。そんなことより、北の神は人間として今も生きているじゃないか。あんたは、あいつの三十歳の誕生日に人間として死ぬことになると言ってたんじゃないのか」

「確かに、そう言いましたよ」

「だから、失敗じゃないか」

「いえ、違います。失敗ではありませんよ。これから、そちらに行って、今回の件を説明いたします」

「あんたは、ここに来ないでくれ」

「いいえ、すぐに伺います」

「来るなど言ってんだ」

わしは受話器に向かって怒鳴ったが、遅かった。死神は、すでに電話を切っていた。

「くそーっ」と受話器を叩きつけた。

ここに来てほしくはないが、死神には今回の件のクレームは言っておかなければならない。

「協会長、お待たせしました」

音もせずドアがフワッと開いて、死神が顔を覗かせた。

「さっさと中に入れ」

わしが言うと、死神はニタニタと笑いながら中に入り、ソファにふんぞり返った。失敗したことを詫げる様子はない。

死神が協会長室に姿を見せたことと横柄な態度をとっていることに、わしは苛立ちを隠せなかった。

死神の前に座り、睨みつけた。しかし死神はニタニタと笑ったままだ。

電話などせず、こっちから死神のところに出向いてクレームを言うべきだったと歯軋りをした。

「北の神は人間として生きてるぞ。話が違うだろ。これが失敗じゃないなんてよく言えるな」

ニタニタしたまま口を開こうとしない死神に向かって怒鳴った。

急に死神の顔つきが変わった。真顔になり、わしを睨むような目で見つめてきた。

「あれは、誰かに邪魔されたんですよ。それも私の計画を知った誰かが、私が修正出来ないギリギリのタイミングで邪魔をしています」

「邪魔されただと」

「そう。邪魔されましたよ」

「なに言い訳してるんだ。綿密に計画を立てたんじゃないのか。現場にはりついて、失敗しないように微調整すると言ってたじゃないか」

「そうですよ。綿密に計画しましたし、当日は現場にはりついて、風や路面の状態の変化にまで気を配りました」

「それでも、結果は北の神が生きているんだから、失敗じゃないか」

「協会長のおっしゃる通り、北の神は生きています。しかし、それは私の責任ではありません。なぜなら、私が微調整出来ないくらいのギリギリのタイミングで、北の神にブレーキを踏ませた奴がいるからです」

「北の神にブレーキを踏ませた奴だと」

「はい、そうです」

「そんな奴、いるわけがない」

「とぼけないで下さいよ。そんなことが出来るのは、協会長、あなたくらいしかいないんですよ」

死神がこっちに冷たい視線を向けた。

「わしが、邪魔しただと。バカ言うな。なんで、わしがあんたに頼んだことを自分で邪魔する必要があるんだ」

「私の失敗を笑いたかったんじゃないですか」

「わしはそんな暇じゃない」

「しかしですね、あんな絶妙のタイミングで邪魔が出来るのは、この計画を知っていて、その上、そこそこ力のある神様の仕業としか考えられないんですよ。協会長、そうなるど、あなた以外に考えられないでしょう。依頼しておきながら何故邪魔をしたのですか。最後になって怖気づいたのですか」

「バカにするな」

「それでは、誰がやったというのですか？ 私の計画は完璧でした。あのギリギリのタイミングで北の神にブレーキを踏ませるなんて、今回の計画を知らないと絶対に無理です」

「そんなこと言われても、知らんもんは知らん。あんたの言ってるのは失敗した言い訳にしか聞こえん」

「あなたじゃないなら、協会長は今回の計画について、誰かに話していませんか。それも、そこそこ力のある神様に」

ソファにふんぞり返っていた死神が、急に前のめりになって、深海のような目でわしをじっと見てきた。わしは死神の視線に耐えられなくなり、下を向いてしまった。

「そ、それは、……だな……」

腕を組んで、宙に視線を向けた。野々神に話してしまったことを思い出した。しかし野々神にそんな力があるわけがない。

「その様子だと、やっぱり誰かに今回の計画を話したんですね」

死神の言葉が強くなった。

「ま、まあ、今回の関係者には話したが……」

「今回の関係者。じゃあ、そいつですよ。協会長でないなら、そいつが邪魔をしたんです。あーあ、誰に話しちゃったんですかねー」

死神はまたソファにふんぞりかえった。

「野々神には話したが、あいつは実力もないし、そんな大それたことができるとは思えんがな」

「では、その野々神が誰かに漏らした可能性はありませんか？ もし、計画が漏れていたのなら、こっちのミスではなくて、そちらのミスですよ」

「わ、わかった。野々神に確認してみる。もし、野々神が誰かに漏らして、その誰かが邪魔をしていたなら、こっちのミスは認めよう。そうでなければ、そっちのミスだから報酬の支払いはしないぞ」

「こちらのミスなら報酬は結構ですが、間違いなく、事故寸前に邪魔されています。北の神にブレーキを踏ませた邪魔者がいるはずなんです。すぐに野々神を呼び出して確認してください」

「わ、わかった」

わしは不安になった。とりあえず野々神に電話してすぐに来るように告げた。

野々神が来るまで、協会長室は、空気の流れる音が聞こえるくらい沈黙に包まれた。

死神は余裕たっぷりにソファにもたれかかったまま、嫌な笑みを浮かべていた。死神はふいに立ち上がり、協会長室に飾ってある美術品を手にとりながら、「ふーん、神様協会は儲かってよろしいですね」とひとりごとのように呟いた。

しばらくして、協会長室のドアからトントンと乾いた音がした。野々神が来たようだ。

「は、入れ」

わしはドアに向かって怒鳴った。

美術品を眺めていた死神もドアに視線を向けた。ドアが少し開き、野々神が顔を覗かせた。

「お、お呼びでしょうか？」

野々神が、ドアの隙間から申し訳なさそうな顔でわしを見ていた。

「お呼びだから電話したんだ。さっさと中に入れ」

「は、はい」

野々神は神妙な面持ちで入ってきた。

「座れ」前のソファを顎で指した。

野々神は、「は、はい」と言って、死神の横を通り抜け、頭を下げてからソファに腰を下ろした。

死神は立ったまま、腕を組み笑みを浮かべて見ていた。

「こいつが誰だかわかるか？」

わしは死神を顎で指した。

「も、もしかして、死神でしょうか」

「そうだ」

「はじめまして、野々神と申します」

野々神が立ち上がり、死神に向かって頭を下げた。

死神は無言でペコリと頭を下げて不敵に笑みを浮かべた。

「挨拶なんてしなくていい。それより訊きたいことがある」

「な、何でしょうか」

「お前に北の神の寿命を三十歳で切る計画を説明したよな」

「は、はい。協会長が私のために死神に依頼したと聞きました」

「なのに、北の神は三十歳を過ぎても生きているよな」

「そ、そのようですね」

「わしは、死神が失敗したと、今クレームをつけているところなんだが、死神は失敗じゃない、誰かが邪魔をしたんだと言っている」

わしは死神に視線を向けた。死神は壁にもたれ腕を組んだまま首をポキポキと鳴らした。

「あなたが邪魔をしたんじゃないですか」

死神が野々神に向かって言った。

「いえ、滅相もございません」

「じゃあ、あなたは今回の計画を誰かに話しませんでしたか？」

「え、えっと、ですね」野々神が俯いた。

「誰かに話しましたね」

死神がわしの顔を見て、ニヤリと笑った。

「え、ええ。野々神社に所属する南の神には話しましたが……」

「な、なんだと、南の神に話したのか」

わしは慌てた。よりによって南の神に話してしまったのか。

「も、申し訳ございません」

「なんてことしてくれたんだ」

わしは天を仰いだ。もうダメだ。南の神の仕業に違いない。

「ほーら、協会長、言った通りでしょ。その南の神が邪魔したんですよ。南の神はそこそこ力のある神様なんですか」

「いえいえ、南の神は落ちこぼれの神様です。そんな邪魔が出来るとは思えませんよ」

野々神が頭を掻きながら、呑気に発言した。

「お前は、なにもわかっていない。なんてことしてくれたんだ」

わしは野々神の呑気な態度に苛立ち、怒鳴った。

「えっ、あ、ああ。も、申し訳ございません」

野々神が床にひざまずいて深々と頭を下げた。

「こんな重大なことを何故漏らした？」

土下座する野々神の後頭部に向けて、怒鳴った。このまま後頭部を蹴り飛ばしたい気分だった。

「は、はい。も、申し訳ございません」

野々神は頭を下げてままだ。

「協会長、私はあなたに誰にも話さないようお願いしておきましたから、彼を責めるのもわかりますが、あなたが彼に話したのがそもそもの間違いなんですよ」

わしは死神を一瞥してから、床にひざまずき頭を下げたままの野々神の前に屈み、髪の毛を掴み無理矢理顔を上げさせた。

「お前なー」

涙ぐんでいる野々神の頬をバシッとはった。

「これでこっちにミスがなかったことはわかってくださいましたよね。あとは、そちらで話し合ってください」

死神はそう言って退屈そうに首の後ろを掻いた。

「わ、わかった」

「じゃあ、私はこれで、失礼しますよ」

死神は協会長室のドアを足で蹴って出て行った。

「あっ、そうだ」

死神はドアを出たところで振り返り、ニタニタと笑いながらバカにしたような目でわしを見た。

「な、なんだ？」

「報酬は通常通り戴きたいところですが、協会長も大変でしょうから、半額にまけておきます。また次に何かありましたら、いつでもどうぞ」

「次はない」

わしは吐き捨てるように言った。

「そうですか。残念です。それでは、失礼いたします」

死神はそう言ってドアを閉めた。

わしは死神が出ていったドアを睨みつけた後、机を思い切り叩いた。

『バーン』という音が協会長室に響いた。

「クソー」

その横で野々神は体をブルブルと震わせていた。

「そこに座れ」

わしがソファを顎で指した。

「は、はい」

野々神は床から立ち上がり、ソファの端に尻を置いた。

「なぜ、南の神に話した？」

わしは野々神を睨みつけた。

「一人で抱えているのが怖くなってしまいました」

消え入りそうな震える声で野々神がこたえた。

「よりによって、南の神とはな」

「南の神がそんな大それたことをするとは思ってもみませんでした」

「お前は南の神と長く一緒にやってきて、気づかないのか？」

「と言いますと？」

「あいつは、私を恨んでいる。そして、わしを陥れることばかりを考えている。最近はおとなしくしているようだから安心していただけだな」

「南の神がですか？」

「ああ。あいつは協会に反抗的なんだ。協会にというよりわしにかもしれんがな」

「協会に協力的ではないとは思いましたが、さすがに死神の邪魔をするとまでは思いませんでした。それにそんな力があることにも気づきませんでした。協会長も先日は南の神は力がないと仰ったじゃありませんか」

「それは、わしより力がないということだ。お前たちよりは、はるかに力はある。力はあるが、協力的ではない。だからあいつは厄介なんだ」

「申し訳ございませんでした」

「終わったことは仕方ない。これで北の神は神様には戻さない。神様だった頃の記憶も力も失うことになる。あいつは神様としては死んでもらうことにする。これからは、あいつの希望通り人間として生きてもらい、寿命を全うしてもらうことにする。こうなったら南の神も人間にしてしまうしかないな。あいつはこの先もわしの邪魔しかなさそうだろ」

「ということは、野々神社の神様はいなくなるということでしょうか」

「お前がいるじゃないか。お前が一人で頑張るしかない。これは自業自得だ」

ここは人間の世界ではない気がする。ここに来ると決めた時、優花はここは夢の国だと目を輝かせていた。優花の言うとおりに、ここは夢の国で人間の住む世界とは別世界のようなところだ。

ここにいるだけで、自然と心が華やかになり、ウキウキした気分になる。特に子供や若者にとっては楽しい場所だろう。

いっしょに来た父親と母親はどうなんだろう。楽しめているのだろうか。

北野秀太は目の前にそびえ立つお城を見上げながらそう思った。

「父さん、こんなところでよかったの？」

秀太は、自分の右隣に立ち、いっしょにお城を見上げている父の俊介に訊いた。

「ああ」

秀太は俊介の横顔を見て、満足してくれていると嬉しくなった。

『ああ』という声にたくさんの幸せが詰め込まれているのを感じたからだ。

「母さんは？」

今度は左隣に立つ母のみどりに訊いた。

「あかし？ もちろん、ここにしてよかったわよ」

みどりは胸の前で両手を合わせ、目を弓のようにして笑っていた。

「本当は自然豊かなところで綺麗な景色を見て、美味しい料理でも食べて、ゆっくり温泉にでも浸かりたかったんじゃないの」

「ううん、そんなことない」

みどりが目の前ではしゃぐ麻耶と優花を見て目を細めながら言った。

「それならいいんだけど。父さんと母さんのための旅行のはずなのに、なんか麻耶と優花のための旅行みたいになっちゃったよな」

北野秀太は自分の三十五歳の誕生日に父親と母親への感謝の気持ちをこめて、旅行をプレゼントした。

去年までは夫婦水入らずの旅行をプレゼントしていたのだが、今年は秀太と妻の優花、娘の摩耶もいっしょに行くことを提案したら、二人は大喜びした。

二人にどこに行きたいかと訊くと、この夢の国がいいと言った。

秀太は二人が自然豊かな落ち着いた所や温泉をリクエストしてくるものと思っていたので意外に思った。

ここに決まって喜んだのは優花と麻耶だった。特に摩耶は行く前から大はしゃぎしていた。

「いいじゃない。二人があんなに楽しそうなんだから」

みどりは優花と麻耶がはしゃぐ姿をじっと見つめていた。

「父さんと母さんが楽しめてるなら、俺はそれでいいんだけど」

「あの楽しそうな二人を見てるだけで、あたしもお父さんもすごく幸せな気分よ。麻耶の笑顔は、世界中のどんな景色よりも幸せな気分にしてくれるし、どんな名湯より心が癒してくれるわ」

「そんなものかな」

「そんなものよ。いつかあなたにもわかる日が来るわ」

「ふーん」

「あなたがこれまでプレゼントしてくれた旅行は全て楽しかったけど、やっぱり今年が一番楽しい。麻耶のあんな楽しそうな顔をずっと見てられるんだから」

みどりはそう言ってから、「麻耶ちゃん」と言いながら、はしゃぐ母娘の元に小走りで近づいて行った。

前に高くそびえ立つお城までも笑っているように見えた。

6

自宅近くにある野々神社の鳥居をあたしは一人で見上げていた。

この神社へは、昔から家族揃ってよくお参りに来た。ここに来ると、なぜか気持ちが落ち着いて、これから何をやっても、うまくいくような気がした。

だから、これまで人生の節目には、この神社に一人で参拝に来ている。

神様にお願いするのは、その人生の節目の大事な時だけにして、それ以外の時は参拝しても、お願いするより手を合わせ感謝の気持ちを神様に伝えるようにしている。

そうするようになったのは、あたしが小学生の低学年の頃に父に言われたからだ。

幼かったあたしはお賽銭を入れてから、長い時間手を合わせてたくさんのお願い事をした。神様にお願いしたいことは山ほどあったので、手を合わせ目を閉じ、次から次へと心の中でお願い事を呟いた。

全てのお願い事を、神様に伝えて目を開けると、隣に立っていたはずの父と母の姿がなかった。

慌てて後ろを振り向くと、父と母はすでにお参りを済ませて後ろに立ち、あたしを見ながらニヤニヤと笑みを浮かべていた。

照れながら二人の元に駆け寄ると、父の秀太が、そんなに長く何をお願いしたんだ、と訊いてきた。

あたしは、小学校の成績のことや友達のこと、昼休みの遊びや毎日の夕食のメニューまで、その時にお願ひしたことを指を折りながら長々と説明をした。

父は笑いながら、たった十円のお賽銭で、そんなにたくさんのお願ひをする麻耶は欲張りだな。神様には、まず、これまでの感謝の気持ちをしっかり伝えて、お願ひ事をするのは大事な時だけにしなさい、と言われた。

それからは出来るだけお願ひ事はしないで、神様に感謝の気持ちを伝えるようにした。

『学校は楽しいです。ありがとうございます』

『テストがうまくいきました。ありがとうございます』

『毎日元気に過ごしています。ありがとうございます』

『今日の朝ご飯はおいしかったです。ありがとうございます』

思い浮かぶのは、いつもそんなちょっとしたことばかりだったが、父はそれでいいと言ってくれた。

感謝の気持ちを神様に伝えただけで、すごく幸せな気持ちになることがわかった。やっぱり神様はすごいなと思った。

今日もお願ひ事をする前にある男性に巡り合わせてくれたことに感謝することになっている。

そして、そのあとでお願ひすることは、あたしの人生にとって受験や就職以上に大事な節目になるかもしれないことだ。

あたしも社会人になって三年が経つ。友人の紹介で、ある男性と知り合った。その男性を見た瞬間に、あたしは一目惚れしてしまった。

父と母のなれそめを聞いたことがある。父は今のあたしのように母に一目惚れしたようだ。

あたしは小さい頃から容姿も性格も父に似ているとよく言われたが、一目惚れするところまで似てしまったようだ。

父は母に告白して、その後付き合い、結婚してあたしが生まれた。それから父は母とあたしを幸せにしてくれた。できればそこまで父に似たいものと思った。

あたしは父が大好きだ。結婚するなら父みたいな誠実で優しい男性がいいと思っていた。しかし、一目惚れした男性は父とは少しタイプが違う。

父は社交的で優しく温厚、医者をしていて仕事に対しても一生懸命、収入も安定しているし、あたしたち家族へ愛情をいっぱい注いでくれる。

一方、あたしが一目惚れした男性は、人見知りで少しぶっきらぼうだ。本当は心の優しい人だが、他人からは誤解されやすい。それと、問題なのはミュージシャンをしているが、まだまだ収入が安定していかないことだ。

他人とのコミュニケーションが下手で、生意気に見える。その上、収入が不安定。そんな彼との結婚を父が許してくれるだろうか。

しかし、彼は根が真面目で優しいことをあたしは知っている。音楽で多くの人を幸せな気分になりたいという夢を持っている。

父とはタイプが違うように見えるが、他人を幸せにしたいという根っこの部分では父と似たところがある。

彼のそういう所を、あたしは彼を見た瞬間に感じとり、父と重なって好きになったの

だろう。父にも彼のそういう所を感じとってもらえることを期待している。

彼と結婚したいと告げると父は賛成してくれるだろうか？

彼の内面の優しさに気づいてくれるだろうか？

そんな不安な気持ちを持ちながら、鈴を鳴らしお賽銭を入れて手を合わせた。

『彼に出会わせてくれてありがとうございます。彼と幸せになりたいです。お父さんが結婚を認めてくれますように』

5

北野秀太は、今日これからのことを考えると朝からずっと落ち着かない気持ちでいる。娘の麻耶が紹介したい男性がいるから来週のお父さんの休みの日に連れてくると言ってきたのは、ちょうど一週間前の日曜日の夕食後のことだった。

夕食後の寛ぎの時間が一瞬で、胸がざわつく時間変わった。その男性は間違いなく、麻耶さんを僕にくださいと言うためにやってくるのだ。それからの一週間は、長くて落ち着かない日々だった。

麻耶が生まれてから、彼女の成長を喜びながらも、いつかはこの日が来るんだと、覚悟をしていたつもりだったが、こんな気持ちになってしまうとは、まだまだ覚悟が出来ていなかったようだ。

摩耶はまだ子供だと思っていたのに、知らぬ間に大人になったものだ。麻耶がその男に一目惚れしたらしいから仕方ないと思うのだが、麻耶をとられてしまうようで寂しい気持ちが強い。

摩耶が小学生の頃、結婚するならお父さんみたいな人がいいとよく言っていたのが、秀太は嬉しかった。

摩耶に結婚したいと思う相手が現れたことは、そういう出会いを喜ぶべきなのかもしれないが、父親としてはやはり複雑な心境だ。

その男性が本当に麻耶を幸せにしてくれるのか、しっかりと見極めなければならない。音楽関係の仕事をしていると妻の優花から聞いているが、それで食べていけるのだろうか。そんな不安定な仕事で麻耶を幸せにできるのだろうか。

その男性は、収入もないまま好きな音楽だけをやって、麻耶が寝る間も惜しんで働き、その男性を食べさせることになるのではないだろうか。子供をつくる余裕もなく、自分たちは孫の顔も見ることができないのではないだろうか。

今日これから会って、変な男だったら反対するべきなのか、それとも麻耶を信じて応援してやるべきなのか、すごく難しい。

麻耶を幸せにしてくれる、いい男性であることを願う。が、そうになるとやっぱり、それも寂しい。今は反対したい気持ちが、だいぶ勝っている。

「あなた、大丈夫？」

優花が部屋を歩き回る秀太に声をかけた。

「いや、ダメだ。どっちに転んでも苦しい。麻耶を幸せにしてくれる男であってほしい。そう思うけど、麻耶を取られたくない」

秀太は頭を掻いて髪の毛をグシャグシャにした。

「おとうさんを思い出すなあ」

優花が宙を見て呟いた。

「えっ、おとうさん？」

秀太は優花の宙を見る横顔に視線を向けた。

「そう。わたしのお父さん」

優花が笑みを浮かべて秀太の方を見た。

「ああ、優花のお義父さんか。お義父さんがどうした？」

「あなたが挨拶に来る日の朝は、お父さんは今のあなたみたいにずっと落ちつかない様子だったわ」

「そうなんだ。意外だな」

秀太が優花の両親に初めて挨拶に行った時、優花の父親は平然としているように見えた。

「お母さんから聞いたんだけど、わたしがあなたを迎えに行ってる間、ずっとソファに座って電源の入ってない真っ黒なテレビ画面を怖い顔してじっと見つめていたらしいわ」

優花は当時の様子を思い出して笑った。

「お義父さんの怖い顔が想像できないな。あの時、俺が玄関で挨拶すると、優しく微笑んでくれたよ」

秀太は優花と結婚がしたいと彼女の両親に挨拶に行った日のことを思い出した。

あの日は優花が駅まで迎えにきてくれた。駅で優花が来るのを待っている間、緊張を必死でほぐしていたが、優花の顔を見た瞬間、心臓がバクバクと大きく暴れだして、全身のコントロールがきかなくなったのを覚えている。駅から優花の自宅まで二人並んで歩いているだけなのに、右足と左足がぎこちなく何度もつまづきそうになった。

二人並んで歩きながら優花が心配そうな表情で、秀太の顔を覗きこんできた時、平然を装おうとしたが、その余裕は全くなかった。

優花の自宅に着いて、先に優花が家に上がり、お義父さんとお義母さんと呼びにいった。

秀太は家に入っていき優花の背中を見ながら、両手で髪の毛を整え、ネクタイの結び目を締め、「あー、あー」と喉の調子を確認し、手を前に組んで背筋を伸ばした。口の中はカラカラに渴いていた。呼吸困難になり何度も深呼吸した。足がガクガクと震えて止まらなくなった。

優花が玄関まで戻ってきた。秀太は優花に向かってぎこちない笑みを浮かべた。優花

の肩越しにお義父さんの顔が見えた瞬間、秀太の体は固まってしまった。その時のお義父さんの顔は優しく微笑んでいた。

お義父さんは秀太の前に来て、「よく来てくれたね」と笑みを浮かべ優しく声をかけてくれた。

その笑みと優しい声のおかげで、緊張がスーッと霧が晴れるように解けていったのを秀太は覚えている。

秀太にとって、今は複雑な心境だが、これから挨拶にくる男性は、あの時の自分と同じで、緊張して全身のコントロールがきかなくなっているかもしれない。足がガクガク震えているかもしれない。うまく挨拶しようと頭を悩ましているかもしれない。

秀太はそう思って、お義父さんが自分にしてくれたように優しく微笑んで、相手の緊張をほぐしてやろうと決めた。反対するか賛成するかは、その後に考えることにした。

4

ライブの時に緊張することなどほとんどないのに、今はすごく緊張している。

足が地につかないというのはこういうことかと、フワフワとした足に意識を集中させて歩いた。そうしないと、すぐに転んでしまいそうだった。

「大丈夫？」

隣を歩く恋人が訊いてくるので、大丈夫だと答えたが、自分でもどうなのかわからなかった。

これから会う彼女の父親は医者をしていて、真面目で優しいマイホームパパというイメージだ。彼女のことを本当に愛していることが、彼女がたまに口にする父親の話題からわかる。

そんな父親が自分のようなフワフワした生き方をしている男との結婚を認めてくれるのだろうか。南野はすごく不安に思った。

反対されたらどうしたらいいんだろう。ねばって食らいついてお願いしよう。それでもダメなら、出直すしかない。

彼女との結婚を諦める気は全くない。自分は彼女を誰よりも愛している。彼女を幸せにしたいと本気で思っている。

そんなことばかりを考えて歩いていると、頭の上から清んだ声が聞こえた。
『今日も、きつとうまくいきますよ』

自分は顔を上げたが誰もいない。空から聞こえたように思ったので空を見上げた。青空にポツンと真っ白な雲が見えるだけだった。

空耳にしてははっきり聞こえたかと首を傾げた。きっと神様が応援してくれてるのだろうと、勝手にそう思うことにして自分に勇気をつけた。

3

摩耶が男を連れて来る時間が近づいてきている。心臓が口から飛び出しそうだ。落ち着かず部屋の中を歩き回った。

「あなた、とりあえず座りましょうよ」

優花がコーヒーカップを手にして笑みを浮かべている。

「ああ」とだけ言った。

「コーヒーでも飲んで、少し落ち着いた方がいいんじゃない」

優花はコーヒーカップをテーブルに置いて腰を下ろした。

秀太も優花の前に腰をおろして、壁の時計に視線をやった。約束の時間まで、あと十分。またトイレに行きたくなって、すぐに立ち上がった。これで朝から三回目だ。

トイレから戻って優花を見ると、湯気のアがるコーヒーカップで両手を暖めていた。

こんな時に落ち着いていられるなど、優花に感心しながらコーヒーを口に含んだ。コーヒーの香りも味もわからない。

優花はコーヒーを飲みながらクッキーをかじりはじめた。

「ウワー、これ美味しい」

優花は完全にリラックスモードだ。この余裕は何なんだろう。父親と母親の違いなのか、それとも優花も緊張しているが、芝居をしてそれをごまかしているのか。それなら優花は俳優の才能がある。

秀太も少しは落ち着こうと、コーヒーを一口、二口と続けて飲んだ。そこで玄関のチャイムが鳴った。

「来たみたいね」

優花がコーヒーカップを口につけたまま、上目遣いに秀太に視線を向けた。

「そ、そうだな」

秀太はコーヒーカップをテーブルに置いて、すくっと立ち上がり、「フゥー」と息を吐いた。

優花も立ち上がって胸に手を当て、秀太と同じように「フー」と息を吐いた。

やはり、優花も緊張しているようだ。玄関のドアの開く音が聞こえた。

「お父さん、お母さん、ただいまー」

玄関から麻耶の声が聞こえてきた。

「あなた、落ち着いてね」

優花が、そう言って笑みを浮かべながら、コーヒーカップを片付けはじめた。

緊張が沸騰寸前のところまできていた。秀太は自分でも顔がひきつっているのがわかった。秀太は大きく息を吸ってから、玄関へと向かった。

「あなた、ちょっと待って」

優花が後ろから声をかけてきた。立ち止まり、振り返ると優花が秀太に向かってキュッと口角を上げてみせた。

「あなたも笑って」

優花はそう言って、両手の人差し指を秀太の唇の端に当て口角を持ち上げた。

そうだった。お義父さんのように、まずは相手の男性の緊張をほぐしてやらなければならないのだ。

優花に上げてもらった口角をそのまま固定して、笑みを貼りつけた。

麻耶がリビングまでやってきた。

「お父さん、お母さん、南野さん連れてきたよ」

麻耶の顔は紅潮し、声も上ずっていた。さすがに緊張しているようだ。

「ああ」

秀太は貼りつけた笑みを崩さないように、自分の右手の人差し指と中指でもう一度口角を上げた。

麻耶の後をついて、玄関へ向かって歩いて行くと、玄関にがっちりした男のシルエットが見えた。ついにこの時が来てしまった。

優花が先回りして、玄関に立つ男のところへ向かった。

「お父さん、お母さん、紹介します」

麻耶が男の横に立って背筋を伸ばした。

「彼が、今日、お父さんとお母さんに紹介したい南野翔さんです」

麻耶が男の腕に手をまわして男を紹介した。

「はじめまして、南野翔です」

男は深々と頭を下げた。

長い髪の毛を後ろで束ね、四角い顎と彫りの深い顔を見て、気難しい頑固な男に見えた。

秀太の勝手なイメージだが、ミュージシャンという感じがしなかった。どちらかというところ、陶芸家といった感じの武骨な感じがした。男が緊張しているせいもあるだろうが、少し取っつきにくい印象を受けた。

麻耶の一目惚れで、ミュージシャンだと聞いていたので、細くてスタイルのいいイケメンが、秀太の頭の中で勝手に出来上がっていた。なので、目の前の男を見た瞬間、秀太は意外に思った。

まあ、外見はこの際どうでもいい。問題は中身だ。麻耶のことを本気で愛して幸せに

してくれる男なのかどうかが一番大事だ。

「よく来てくれたね。とりあえず、中に入ろうか」

秀太はお義父さんのことを思い出しながら、出来るだけ笑みを消さないように優しい口調を心がけた。

優花がこっそりオーケーサインを秀太に送ってきた。秀太は優花に笑みを返した。

居間に入り、少し南野という男と話をした。

ミュージシャンを志した理由や摩耶との出会い、出身地や学校、家族のことなどを話してくれた。

最初は秀太と南野の間には重苦しい空気が流れていたが、その空気は意外と早く晴れた。

南野は見た目の尖った印象とは違い、優しくて心の澄んだ男だということが、秀太にはすぐにわかった。

話しはじめてすぐに、この男なら麻耶を幸せにしてくれると、なぜかそう確信した。

南野と話していると、この男に会うのは初めてではない気がしてきた。どこかでいっしょに何かをした気がする。そして秀太はこの男から助けられている。そんな気がしてならなかった。

もしかすると、前世というものが本当にあって、その前世で、この男に助けられたことがあるのかもしれない。

南野に、これまでにどこかで会ったことがないかと訊ねると、南野は、「ええ、いつ、どこでかは、思い出せませんが、お義父様とは、どこかでお会いした気がしてならないんです」

そうこたえた。

この南野という男はすごい力を持っている。音楽の力で人を幸せにしたいと言っているが、この男なら本当にやりそうな気がした。

そして、摩耶を幸せにしてくれる男はこの男しかいないと、秀太はなぜかそう思った。

2

「また、脱会するバカがいるだと。お前はそんな報告を平気な顔をしてわしにできるな」

テーブルを叩き、報告に来た部長に苛立ちをぶつけた。

「申し訳ございません」

部長は頭を下げていたが、気持ちが入っていない。とりあえず、頭を下げておこうといった感じだ。その態度にわしは苛立ちが倍増した。

「こんな状態になるまで、お前はなぜボーッとしてたんだ」

わしは役立たずの部長に向かって、持っていたペンを投げつけた。報告だけして、何の手も打たない奴は能無しだ。

「しかし、もうどうしようもありません。神様協会は終わりですよ」

部長はそう言いながら、自分の胸に当たり、床に落ちたペンを拾い上げテーブルに置いた。ペンを置いてから、わしの顔を見てニヤリと笑った。

能無しの部下のくせして、生意気な態度だ。こいつはもういらぬ。すぐにでも神様協会から追放してやる。あとで泣き言を言っても絶対に許さん。

「どうしようもない、神様協会は終わりだと」

「はい、もう限界ですよ。今年に入ってこれで協会を脱会した神様は二百人を超えているんです」

「お前らがしっかりしとらんからだろうが」

「協会長、あなたが人間の幸福度の吸い上げを七十パーセントまで上げてしまったことで、反発する神様が増えてしまったからですよ」

「フン、反発する神様など、さっさと追放してしまえ」

「ですから、ほとんどの神様が反発しています。反発する神様は、追放するまでもなく、ドンドン脱会していつてるわけですよ。それが今の現状です」

「脱会してフリーになったところで、うまくいくわけないだろ。浮浪の神になって、泣きをいれてくるにきまっている。しばらく我慢して、泣きをいれてきたやつの中で優秀なやつだけを協会に戻してやればいい。出来の悪いやつはそのまま浮浪の神にでもなればいいんだ。考えてみれば、これは出来の悪いやつを一掃するチャンスかもしれない」

これで少数精鋭の神様協会にすればいい。目の前のこの部長も新しく優秀なやつに変えればいいんだと、わしは思った。

「そんなうまくいきませんよ。これまでに脱会した神様が浮浪の神になって困っているものは一人もいないんですから」

「これまでに脱会した神様は、フリーでやっていけているというのか。そんな簡単にフリーで成功できるとは思えぬ。そのうち協会に戻してくれと泣き言をいうやつが出てくるはずだ」

「いえ、ここ最近では、協会を脱会した神様はみんなフリーで成功しています。ですから、これから先もドンドンと協会を脱会する神様が増えていくでしょう。そしてフリーで成功していきます。もうこの流れを止めることは出来ません」

「なぜだ。フリーでやっていくのは難しいはずだ。誰でも彼でも成功できるはずがない」

「それがですね、フリーの神様の世界も今はだいぶ様変わりしているようですよ」

「様変わりしているだと。それはどういうことだ？」

「フリーの神様達で助け合うコミュニティができあがっているそうです」

「助け合うコミュニティだと。なんだそれ？」

「フリーになった神様を支援するコミュニティです。少し前に野々神社にいた習の神という神様がリーダーとなって活動しています。フリーになった神様に人間を幸福にするノ

ウハウを教えたり困った時の相談にもものってくれたりするようです。フリーになった神様は、そのおかげで、みんなやっていけてるようです」

「野々神社にいた習の神か？」

そう言えばそんなやつがいたような気がする。

「そうです。神様協会のテストをサボって、あなたが追放した神様ですよ」

「テストをさぼったあいつか？ あんなバカにそんな力があるわけないだろ」

「それがですね、習の神には頼りになる師匠がいたようです」

部長は眉を上げて言った。

「頼りになる師匠だと。それは誰だ？」

「それはですね、協会長と同期だった南の神です。もとは南の神がそのコミュニティを作っていたようでして、習の神は南の神に弟子入りして、それを引き継いだそうです」

「また、南の神がからんでいたのか」

南の神の四角い顔が頭に浮かんだ。あいつはいつもわしの邪魔をする。あいつのことを考えただけで反吐が出る。

「南の神は、我々の知らない間にフリーの世界を大きく変えていました」

「それで、今は習の神がリーダーというわけか？」

「はい。習の神がリーダーになって、フリーの神様のコミュニティを一気に大きくしようと神様を集めたのです」

「いらぬことばかりしやがって。それで、協会を脱会した神様は習の神の元に集まっているのか？」

「そうですね。あなたがタイミングよく、人間の幸福度の吸い上げ率を七十パーセントに引き上げてしまいましたからね。協会に対して不満を持つ神様が一気に増えたんですよ。そんな神様たちがフリーのコミュニティに流れていっているというわけですよ」

「タイミングよくだと？」

部長の嫌みな言い方に腹が立った。睨みつけてやると、部長は、「あっ」と口を右手でおさえた。

「協会としては、幸福度の吸い上げ率を上げるタイミングが悪すぎましたね」

部長は言い直したが、わしの怒りはおさまらない。

「幸福度の吸い上げ率を上げたタイミングが悪かったと言うのか？ わしの責任だと言うのか」

「いえ、そういうわけではありません。しかし……」

「しかし、何だ」

「しかし、今の協会は限界にきています。実は、私も協会から離れることにしました」

「な、何だと？ お前まで裏切るのか？ これまでの恩を忘れたのか」

「裏切るつもりはありません。私が思うのは、ここまできてしまった以上、今の協会をなくしてしまい、習の神たちのコミュニティと協力しあうのが賢明だと思っているのです」

「それが裏切りなんだ。わしの代で神様協会を潰すわけにはいかん。わしの面子はどうなる」

「今は面子なんて気にしている場合ではありません。あなたが、習の神のコミュニティと協力する気があるのなら、私もあなたを裏切ることにはならないです。私は神様協会

がこれから新たな道に進むことをあなたに提案しているんです」

1

南野翔がガチガチに緊張した表情で北野麻耶と並んで歩いている様子を天から眺めていた。

あんなに緊張した南の神の姿は、これまで見たことがなかったので、新鮮すぎて勝手に口元が綻んだ。

南野はこれから北野麻耶の父親、北野秀太に、娘さんを僕にくださいと挨拶に行くようだ。人間の世界では男として人生最大級の大事な催しなので緊張するのも無理はないことなのかもしれない。

「習の神ー」

僕を呼ぶ声に振り向くと、フリーの神様の仲間がバタバタと大きな音をたてて走ってきた。彼はあっという間に僕の目の前まで来て、急ブレーキをかけるようにして止まった。

止まってから苦しそうに膝に手を当て息を切らしていた。上下する肩からは湯気があがっている。たいぶ興奮しているようだ。

僕に何か伝えたいことがあるようだけど、彼の呼吸が整うまで待つことにした。

しばらくの間、彼は肩を上下させ、口から白い息を機関車のように吐いていた。白い息が少しおさまって、膝から手を離れたタイミングで、僕は訊いた。

「どうしたんですか？」

その問いには答えず、彼は逆に僕に質問してきた。

「習の神、さっきから何ニヤニヤして見てるんですか？」

僕の質問に対する彼からの答えがないことに少し戸惑った。あんなに慌ててたのだから、何か大事な話があったのではないだろうか。まあいい。とりあえず、彼の質問に先に答えることにした。

「人間になった南の神が幸せそうにしてるなどと思って見てたんですよ。ほら」

緊張して歩いている南野翔を指さした。彼は僕の人差し指の先に視線を向けた。

「あっ、ああ、本当ですね。南の神さん緊張してますけど、幸福度は高そうですね。それに神様の頃と違って少しはイケメンになってますよね」

「うーん」

僕は南の神がイケメンになっているという言葉に首を傾げた。

「いや、神様の頃よりってことですよ」

僕が首を傾げるのを見て、彼はそう付け加えた。

「そうかな。神様の頃よりはイケメンなのかな。けど、あの顔は、やっぱりイケメンとは言ってはいけない顔だと思うよ」

僕がそう言うと、彼は吹き出した。

「失礼なことをいいますね。南の神にはあれだけお世話になって助けてもらったのに」

「それくらいのことはいいんだよ。南の神なら許してくれるよ」

「確かに南の神はそんなこと気にしませんからね」

「ところで、何慌ててたんです？」

彼は大事な話をするために来たはずだ。

「あっ、そうそう。大事な話です」

彼はそう言って姿勢を正した。

「本当に大事な話なんですか？」

大事な話のわりには横道にそれたなと思った。

「そうです。大事な話です。神様協会の協会長がついに白旗を上げました」

「協会長がですか？」

「はい。今の協会は解散することに決めたそうです。そして、今後は我々に協力するので、全協会の受け入れをお願いしたいとのこと。それで、これからは全神様が我々と同じようにフリーでやることになりました」

「そうですか、ついにやりましたね」

報告にきてくれた神様に右手を差し出した。その神様も右手を出してきたのでがっちり握手をした。やっと南の神の念願が叶った。

「南の神、うまくいきました。ついにあなたの夢が叶いましたよ」

緊張して歩いている南野に向かって声を掛けた。当たり前だが南野は気づくことなく緊張して歩いていた。

人間になった北の神のところへ、北の神の娘との結婚を許してもらうために向かっているのだ。

南の神のことだ。これも絶対にうまくいく。あの時、北野秀太を救ったのは南の神なのだから。北の神にもそれが伝わるはずだ。

「今日も、きっとうまくいきますよ」

僕は両手をメガホンにして、南野に向かって叫んだ。

エピローグ

北野秀太は妻の優花と並び、野々神社の境内で手を合わせていた。

娘の摩耶が幼い頃、彼女に向かって神様にお願いごとばかりするのは欲張りだと言ったことを思い出したが、今の秀太は神様にお願いごとばかりしている。

全ての願い事を心の中で呟いてから顔を上げた。横を見ると優花が秀太に顔を向けていた。

「長い時間、何をお願いしてたんですか」

優花が笑みを浮かべて秀太に訊いた。

「いろんなことを山ほどお願いした。ほとんどが麻耶のことだけだな。優花は？」

「わたしもあなたと同じです。今日まで麻耶が元気で幸せに過ごせたことのお礼と明日からの麻耶の結婚生活が今まで以上に幸せになるようにお願いしました」

「俺も同じだな。麻耶には幸せになってほしい。南野くんと麻耶はこれから先も幸せに過ごせるかな」

「きっと、幸せに過ごせます」

「それならいいんだけど」

「親バカかもしれませんが、麻耶は優しく愛情豊かな子ですから、これからもきっと幸せになれるよ」

「確かに、優しい子だ。きっと南野くんとうまくやっていくよな」

「麻耶はあなたからたくさん愛情をもらいましたから、優しい子に育ったんです。あなたのおかげです」

「俺じゃなくて君のおかげだ」

「じゃあ、わたしとあなた二人のおかげということにしましょう」

「そうだな」

「麻耶が遠くにいて寂しくなりますけど、ふたりでこれからも幸せに暮らしましょうね。これからもよろしくお願いします」

「こちらこそだ」

「じゃあ、帰りましょうか」

「そうだな」

二人揃ってもう一度境内に向かって頭を下げた。

「ところで、神様って本当にいるのかな」

秀太は鳥居をくぐってから、振り返り鳥居を見上げて言った。

「わたしは、いると信じてますよ。だからこうしてお参りしてるんです」

優花も鳥居を見上げた。

「そうだな。いるよな」

「はい。これまでに辛いことはありましたけど、何とか乗りきって、今こうして幸せなのは、きっと神様のおかげですよ。わたしたちが前向きにさえいれば、神様はきっと手を差し伸べてくれます」

「神様の力はやっぱりすごいな」

「神様は万能ですからね」

万能でない神様

著 まつだつま

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
